霜島ケイ
KEI SHIMOJIMA

イラスト
ミギー

カラクリ荘の異人たち3

～帰り花と忘れ音の時～



GA文庫

カラクリ荘の異人たち3

～帰り花と忘れ音の時～

霜島ケイ

GA文庫


言っておくけど、好きで取り憑いたんじゃないからね！
まさか男だなんて、思わなかったのよ。
あたし、男って嫌い。
無神経だし鈍感だし、
——嘘つきだし！

『ここ……すごい』
六花が声をあげた。



そこにはまるで、季節がないみたいだった。
足下にはレンゲにタンポポ、
冬枯れたはずの草むらに新しい緑が萌えて、
家の周辺には赤紫のホタル袋や黄色の菜の花が揺れている。
日だまりには深紅とピンクの秋桜。野菊。オシロイバナ。
桜がぽつぽつと薄紅の花を灯し、
その傍らには山吹の黄金とユキヤナギの白。




「軍手だから、一回使って汚れたら捨てていいからね！」

カラクリ荘の異人たち3
～帰り花と忘れ音の時～

霜島ケイ

GA文庫

カバー・口絵　本文イラスト

ミギー

目次

一章　時雨月の客 …… 5
二章　帰り花と忘れ音の時 …… 92
三章　冬燈 …… 232

一章　時雨月（しぐれづき）の客

1

「え――――っと？」

時刻は夜の九時ちょっと過ぎ。

風呂（ふろ）から戻ってきた太一（たいち）は、タオルや石けんを入れた洗面器を持って廊下に突っ立ったまま、悩んでいた。

（どうしようかな）

二階の廊下に、落ち武者（むしゃ）が立っていた。

どこからどう見ても、これ以上ないくらい落ち武者だ。鎧（よろい）はボロボロであちこち破（やぶ）れているし、手に持っている刀は真ん中から折れている。髪はざんばらで、ごていねいに背中には矢が三、四本刺さっていた。

で、そいつが廊下の真ん中にでんと仁王立（におうだ）ちになっているものだから、その向こうの自分の

部屋に戻りたいのに、通れなくて太一は困っているのだ。
　このまま落ち武者が消えるまで待つべきか、それとも無理矢理に横をすり抜けるべきか。
迷っていたら、
「くしゅん！」
くしゃみが出た。
（やっぱり部屋に戻ろ）
相手がいなくなるまで廊下に立っていたら、湯冷めして風邪をひきそうだ。
ところが、意を決して太一が動いたとたん、落ち武者も動いた。
がしゃがしゃと鎧の音を響かせながら、こちらに向かって歩いてくる。慌てて端に寄った太一の横を、ゆっくりと通り過ぎていったが、その時にぐるりと首を回して彼を見た。
両目とも、瞳のない濁った白目だった。目があったとたん、落ち武者が「どうも」というように礼儀正しく会釈したので、つられて太一も頭をさげる。
落ち武者はそのまま、がしゃんがしゃんと階段のところまでいって姿を消した。
（幽霊かな？）
「くしゅっ！」
首を捻っていたら、またくしゃみが出た。
「うわ、本当に風邪ひくかも」

急いで０１４４号室（空栗荘の大家いわく、『お人好し』と読む。太一本人は自分がお人好しだと思ったことはないのだけれども）のプレートのかかった自分の部屋のドアを開けようとした時、隣室から声が聞こえた。

「うるさくてすまなかった。廊下は静かに歩くようにと言ったんだが」

渋い男性の声だ。

「あ、いえ……」

太一は目を瞬かせて、隣の１７４号室（『人でなし』と読むが、性格のことではない。たんに人間ではないという意味だ）のドアを見た。

その部屋の住人であるタカハシさんの姿を目にした者は、誰もいない。本人は絶対に部屋から出てこないので、大家の時国柊二郎ですら、その正体は知らないらしい。空栗荘の奇妙な住人たちの中でも、きわめつけに不可解な存在だ。

それはともかく、あの鎧を着て静かに歩けと言われても、落ち武者も困るだろう。

「今の人、タカハシさんの知り合いですか？」

「古い友人だ。いつもこの時期になると、茶飲みついでに世間話をしにくる」

確かに、見るからに古そうである。

「幽霊ですよね？」

「そう。死んでからこのかた、ずっと幽霊だ」

「はあ」

落ち武者が遊びにくることよりも、タカハシさんに友人がいたことのほうが驚きだと思っていると、「くしゅん」とまたくしゃみが出た。

「夜は冷える。部屋では暖かくして、風邪をひかないようにしなさい」

タカハシさんは気遣うように言った。

正体不明でもいい人だ。人ではないけど。

「はい。おやすみなさい、タカハシさん」

「おやすみ」

ところで落ち武者の世間話ってどんなのだろう。昨今の政治問題や株価や芸能ニュースについてだったりしたら、ちょっと嫌かもと思いながら、太一は自分の部屋に入った。

空栗荘は人間の住む「こちら側」の世界と、妖怪たちの住む「あちら側」の世界の境界に建つ、下宿屋兼旅館である。

この世には、そんなふうにあっちとこっちが繋がる場所が、幾つもあるのだという。空栗荘の大家である時国柊二郎は、人と異形の世界が不用意に交わらないように境界を見張る管理人で、「境界守」と呼ばれているらしい。

そういうわけで、空栗荘の住人にとって不思議な出来事というのは、ただの日常だ。幽霊や

妖怪に出くわしたところで、いちいち驚くにはあたらない。

このおかしな下宿屋で太一が一人暮らしをはじめて、はや数ヶ月。季節は、夏から秋へと移ろい、いつしか冬を迎えていた。

今は十一月の終わりだ。

「阿川君、おはようっ」

朝、駅に向かういつものバスに乗ると、真ん中くらいのところで吊革につかまっていた和泉栄奈が、元気に声をかけてきた。

「おはよう」

栄奈は同じ賽河原町に住んでいて、二つ前の停留所から乗ってくる。

最初の頃は太一のほうが早く登校していたので顔を会わせることはなかったのだが、いつの間にか栄奈も同じバスに乗るようになった。といっても、もちろん一緒に学校に行くわけではない。挨拶を交わしたあとは、栄奈はなんとなく彼と距離をおいて、でもなんとなくいつも視界の隅にいる。駅に着いてからも、わざわざ隣の車両に乗ったりしている。

だけどその日は珍しく、運転席のすぐ後ろに陣取った太一のそばまで来て、横にちょこんと並んだ。

「急に寒くなったね。先週まであったかかったのに」

「うん」

「これからどんどん寒くなるのかあ。私、寒いのって苦手。阿川君は？」
「……普通」
「冬に生まれたくせにって、よく言われるの。でも関係ないよね、そんなの」
「うん。……多分」
相変わらず、栄奈はよくしゃべる。学校でも屈託なく話しかけてくる。しゃべりながら、くりっと大きな目を丸くしたり、唇を尖らせたり、笑ったり急に真面目くさった顔をしたり、くるくると表情が変わるのが、見ていてなんだか楽しい。
きっと栄奈のおかげなんだろうな、と太一は思う。
高校に入ってだいぶ経つのに、クラスの連中とは未だに馴染めなくて、会話をするにしても必要最低限の言葉しか交わしていない。それでも中学の時とはっきりと違うのは、面と向かって「つまらないヤツ」だとか「暗い」とか言われることはなかったし、距離をおいていても以前みたいに露骨に敬遠されている感じがしないことだ。
それは多分、こんなふうにいつも栄奈が話しかけてきてくれるからだろう。
いつだったか、栄奈が言っていたことがある。
（クラスの他の子たちも、本当は阿川君としゃべりたいって思ってるんだよ。こないだ私、他のグループの女子に言われちゃったもん。阿川君と普通に会話ができるなんてすごいって。自分たちも話とかしてみたいけど、阿川君てなんだか気安く声をかけられない雰囲気があるから、

話をする勇気がないんだって）

（だからね、えーそんなことないよって言ったの。阿川君て本当は優しいんだよって）

クラスの女子のことよりも、優しいという言葉に太一は戸惑った。「俺、別に優しくないと思うけど」と躊躇いがちに言うと、采奈はぶんぶんと首を振った。

（そんなことないっ。阿川君は絶対に優しいと思う。だって、夏の盆のお祭りの時に包丁を持ったお化けから私を守ってくれたし、タケルが薄売りに攫われた時だって一緒に探してくれたもんっ）

実際、采奈はクラスメートにむきになって反論したのだが、あまり言ってライバルが増えても困るので、心中わりと複雑だった、というのは太一には内緒だ。

（あとね、男子も言ってた。阿川ってなんかいつもかったるいってカンジで黙ってるけど、怒らせたらおっかなそうだよなって）

かったるいとか、おっかなそうとか、そんなことを言われたのは初めてだ。他人とコミュニケーションをとるのが苦手で、会話をしても相手を不愉快にさせるのがわかっているから黙っているだけなのに、どうしてそんなふうに見えるのだろう。

「俺って怖そうなの？」と訊ねたら、采奈はくりっとまた目を丸くして、「うーん」と唸った。

（ほら、前に言ったでしょ？　みんな阿川君のことは一匹狼だって思ってるの。一人でいるのって難しいのに、阿川君はそんなのは平気ってふうにみんなには見えるから、それが不思議

ですごいって思うんだよ、きっと）

なんだかよくわからない。

ただ、栄奈がそんな話をしたのは、太一がけしてクラスの中で完全に無視されているのでも嫌われているのでもないということを伝えようとしてくれたからだ。――それだけは、わかった。

バスが交差点を曲がった。吊革につかまって大きく傾くように揺れながら、太一は隣に立っている栄奈に目をやった。

（何をしてるんだろう）

急におしゃべりをやめて静かになったと思ったら、栄奈は真剣な顔で、吊革を握っている彼の手を見ている。じっと見ている。ものすごく見ている。

「……俺の手、どうかした？」

思わず訊いたら、栄奈はギクっとしたように飛び上がった。で、揺れに足をとられて、危なくコケそうになった。

「あああっと、な、なんでもないっ！　きき気にしないで！」

なぜだか慌てふためいた様子で、真っ赤になっている。

「あ、うん」

太一のほうも反応に困って、それきり二人して黙り込んだ。

「――あ、あのね。阿川君て誕生日、十二月だったよね」

栄奈がようやくまた口を開いたのは、もうじきバスが駅に着くという頃だった。
「うん」
どうして知っているんだろうと思ってから、確かクラス名簿に誕生日も書いてあったことを思い出した。
「じゃ、私より阿川君のほうが少しだけお兄さんなんだ」
「お兄さん？」
「だって私、二月生まれだもん」
ほんの二ヶ月かそこらの差で年上扱いされても困るけど、栄奈はそれがとても大切なことみたいに、うんうんと嬉しそうにうなずいている。
「でも、そっかあ。十二月ってすごいたくさん、イベントがあるね。期末テストでしょ、冬休みでしょ、阿川君の誕生日とクリスマスと、大掃除とか年賀状も書かないといけないし……、うわあ大変」
「べつに俺の誕生日は、関係ないと思うけど」
「え……、あ、そっか。そうだよね」
栄奈はまたも慌てたように言って、
「えっと、ええっとぉ、……阿川君はどうして、いつもこのバスに乗るの？」
ものすごく強引に、話題をかえた。

「どうしてって」

「この時間だと、わりと早く学校に着いちゃうでしょ？　あと二、三本バスを遅らせても全然余裕で間に合うのに、どうしてかなって思って」

「俺、満員電車やバスって苦手だから」

もっと言えば、他人に触れられるのが気持ち悪いからだ。他人の体温や手の感触が嫌で、誰かに身体を掴まれようものなら、反射的に硬直するか振り払ってしまう。

もちろん寝坊して遅刻しそうになった時などは仕方がないけれども、なるべくなら通勤通学時のぎちぎちに混んだバスや電車には乗りたくない。それでラッシュのピークを避けて、いつも少し早めに空栗荘を出ることにしていた。

という説明を、結局太一は言葉にせずに呑み込んだ。なぜか采奈には、他人に触れられることが苦手だとは、言いたくなかった。

「和泉こそ、どうしてこのバスにしたの？」

逆に訊ねると、うっと采奈は言葉に詰まったような顔をした。

「それはあの、阿川君――」

「俺？」

「――は関係なくてっ。私、いっつもすごく早く目が覚めちゃうの。早起きして暇だから、早めに学校に行っちゃおうかなって思ってっ」

「ふぅん」
「ほら私、おばあちゃん子だから。お年寄りは朝が早いって言うでしょ⁉」
そういうのって関係あるんだろうか、ないような気がするんだけど、と太一は心の中で首を傾げた。
バスが駅のターミナルに着いた。終点なので、他の乗客もいっせいにバスを降り始める。
「じゃ、またあとで。学校でね！」
栄奈はぱたぱたと先にバスを駆け降りていった。ホームで一緒になるのに、どうせ同じ電車に乗るのに、駅の改札まで小走りに行くのはいつものことだ。
——和泉栄奈は友達だ。きっとそうなのだと思うし、彼女もそう思ってくれているのだと思う。
他人とどうやって関わっていいのかわからなくて、学校でもずっと一人でいた太一のことを、「好き」だと言ってくれて、一緒に話をして楽しいと言ってくれる、ただ一人の特別な「友達」という存在。
朝日の中を駆けてゆく栄奈の紺色のブレザーの背中を見送って、眩しくて目を細めて、太一もゆっくりと改札に向かって歩き出した。

2

学校から帰ると、５９６３（ごくろうさん）号室のミヨシが、部屋番号どおりにご苦労さんなことをしていた。

玄関前の落ち葉を、せっせと竹箒で掻き集めている。

「くそ、どんな罰ゲームやねんこれ。掃いても掃いてもきりないやんか。なんでこないに樹が多いんや、ここんちは」

いくら箒で掃いたところで、バラバラといくらでも上から降ってくる枯れ葉に毒づいたミヨシだが、太一に気づいてじろりと不機嫌そうな視線を向けた。

「なんや。帰ったんか」

「ただいま」

長身で目つきの鋭いミヨシは、一見しただけだと剣呑というか、それこそおっかなそうであまり近づきたくないタイプだ。なにしろ妖かしにまで、「顔が怖い」と言われているくらいである。でも本当は心配性で面倒見のいい人間だということを、太一はもう知っている。

「何をしてるんですか」

「ああ？　見てわかるやろ。お露さんに、暇やったら掃除をしとけて言われとるんや」

「暇なんですか？」
「やかましわ」
クスクスと笑い声がして、８７８３（花屋さん）号室の風田レンが、両腕いっぱいに枯れ枝を抱えて裏手から姿を見せた。
「裏庭にまで声が聞こえていたよ。――おかえりなさい」
こちらはミヨシとは反対に、小柄でほんわりと優しい空気をまとった若者である。
「今日はバイトは休み？」
太一が訊くと、レンは「午後だけ」と答えた。
「大家さんに、庭木のメンテナンスを頼まれていたから。本格的に寒くなる前に、枝を剪定したり肥料を足したりしておかないといけないんだ」
太一はこの頃、レンに対しては敬語を使わずにしゃべるようにしている。年がほとんど違わないのだからそうして欲しいと、レンが言ったからだ。最初はずいぶん違和感があったが、最近はなんとか慣れてきた。
空栗荘の住人たちは、みんなちょっと奇妙だ。
ここにいるミヨシと２４００（自信満々）号室の十遠見順は、悪霊を祓ったり魔物を退治したりする霊能力者である。特に十遠見は、国家公認術者とかいうなんだかすごい資格を持っているらしい。

レンは植物と会話ができる。

１１０７（いいオンナ）号室の井原古都子は、妖怪の町にある工房に通う木彫り職人だ。

あとは大家で境界守の時国柊二郎と、タカハシさんと、空栗荘の家事を切り盛りするお露さん。

時々、どうしてただの高校生である自分がここにいるのだろうと、太一は思うことがある。

まあ居心地はいいし、幽霊だの妖怪だの付喪だのとしょっちゅう顔を合わせる毎日にも、今ではすっかり慣れてしまったが。

「おいレン、ちょっとそこらの樹に、気合いで枯れ葉を落とすのをやめろって言うたれ」

ミヨシが仏頂面で言うと、

「そんなの無理です。冬支度の邪魔をするのかって、逆に樹にどやされますよ」

枯れ葉の山の上に運んできた枝を置いて、レンはまた笑った。

「アホ。樹の分際で人間様をどやすなんざ、おこがましいわ」

そのとたん、上から何か落ちてきて、すこんっとミヨシの頭を直撃した。

「でっ⁉」

柿の実だ。

玄関脇にある柿は食べても渋いのだそうで、お露さんが早々に実を取って干し柿にした。それでもてっぺんのほうに幾つか、赤い提灯みたいに実が残っていて――木守といって、実は必ず幾つか木に残しておくんだよとお露さんは言っていた――、それが落っこちてきたのである。

ほら怒られた、とレンが呟く。
ミヨシは頭を撫でながら、柿の木に向かって吼えた。
「猿カニ合戦やあるまいし、なんやねん、こら――！」
玄関の戸が開いた。
「まったく喧しいね。掃除くらい静かにできないのかい。――おや、おかえり、太一」
出てきたのはお露さんだ。手に、アルミホイルの包みを幾つも入れた笊を持っている。
ミヨシが集めた枯れ葉を一瞥して、お露さんは「まあまあだね」とうなずいた。
「今日は風もないし、このまま落ち葉焚きをしちまおう。――ついでにこいつも焼いちまうよ」
「なんやねん、それ？」
「今夜のおかずの、鮭とキノコさ」
げ、とミヨシは唸った。
「焼き芋かと思うたやんか。焚き火で夕飯つくるて、どんだけワイルドやねんっ」
「ふん。ガス代の節約だよ。誰かさんが今月の家賃をまだ入れていないせいで、遣り繰りが大変でねえ」
お露さんの言葉に、ミヨシは酢を飲んだような顔をした。
「せやからこうして、勤労奉仕をしとるやろ。未納の分は、ちゃんと今月中に払うて」
どうやら家賃滞納の罰で、掃除の手伝いをさせられていたらしい。

「今月は仕事が少なかったんですか?」とレンが訊ねる。
「まあな。俺は十遠見と違ってフリーやから、実入りが多い時はええんやけど」
「だからいつも言っているだろう。いざって時のために、貯金くらいしておきなって」
がみがみとお露さんが言い、ミヨシはますます仏頂面になり、レンはにこにこと笑っている。
こんな話でも、住人たちの会話が楽しく聞こえるのは、太一自身が何の違和感もなくその輪の中にいられるからなのだろう。
「ああ、そうだ。太一、あんたに荷物が届いていたよ」
落ち葉焚きの用意をしながら、お露さんが急に思い出したように言った。
「荷物?」
「宅配便で、あんたの家から」
(何だろう)
空栗荘に下宿してから、太一はまだ一度も家には帰っていなかった。時々父親から電話がかかってきたけれども、荷物を送ったという話は聞いていない。
「食堂に置いてあるから、部屋に戻る前に持っていきな」
「はい」
首を傾げながら太一は、急いで食堂へ向かった。

「あれ、古都子さん……？」
食堂では、古都子がのんびりとお茶を飲んでいた。いつもなら、まだ工房にいるはずの時間だ。
「おかえりなさい、太一君」
「工房はどうしたんですか？」
「うん、今日は早めにひけてきちゃった。今はそんなに忙しい時期じゃないし、たまにはいいんじゃないかと思って」
さらさらのロングヘアに、頭部を覆うバンダナ。黒のハイネックのTシャツにサーモンピンクのフリースを重ねて、下は細身のジーンズ。毎度のことながら、古都子の格好はシンプルだ。太一の目から見ても、着物など着たらさぞかし似合いそうな細身の美人なのに、本人はお洒落にはまったく興味がないらしい。
「でも、珍しいですね。レンさんも帰ってきてるし、平日のこんな時間にみんながいるのって」
「それを言うなら、十遠見さんもよ。今日は休みをとって部屋にいるわ」
「え、そうなんだ」
「有給が余っているんですって。十遠見さん、このところずいぶん忙しそうだったから。先週なんて、ほとんど空栗荘に戻ってこなかったみたい」
そういえばここしばらく十遠見を見かけなかったなと、太一は思った。
「大家さんは？」

「柊さんなら、今日は姿を見てないわね。また寝ているんじゃない？」

今日はというか、今日もというべきか。空栗荘の大家の目撃率は、相変わらずどこぞの珍獣なみである。それで何をしているかといえば、たいていいつも寝ている。ちなみに部屋番号は７８３７４の「悩みなし」だ。

「太一君も、お茶飲む？」

「あ、いいです。俺、荷物を取りに来ただけだから」

ああこれ、と古都子はテーブルの端に置いてあった箱を指さした。思っていたよりも小さい。ケーキの箱くらいだ。

「家から？」

「はい」

送り状を見ると、「阿川鈴子」とあった。

（鈴子さん……？）

父の再婚相手からである。

太一はますます首を傾げた。

カバンを置いて手にしてみると、箱は軽い。振ると中でかさかさと乾いた音がした。

（何を送ってきたんだろう）

とりあえず部屋に戻ってから開けようと思って、箱を小脇に抱えたとたん、

「たーいち！」
ぽんと小さく泡が弾けるみたいな音がして、傍らにアカネがあらわれた。
「なに？　その箱なあに？」
腕を伸ばして、きゅうっと太一にしがみつく。
クリーム色のふわふわしたワンピースに、レースの胸当てのついた白いエプロン。一見、おかっぱ頭の七、八歳くらいの女の子だが、その正体は玄関に飾ってある市松人形だ。
アカネは、太一の祖母に魂を吹き込まれた付喪である。
こうして少女の姿に化けて、しょっちゅう太一にまとわりついているのだが、今は箱の中身に興味津々らしく、目を輝かせて太一の腕を引っ張った。
「ねえねえ、太一、それなあに？　見せて見せて！」
「ダメ。部屋に戻ってから」
「やだやだ。今見る！」
駄々をこねるように腕にしがみつかれて、仕方がないなと太一はため息をついた。もう一度カバンを下に置くと、テーブルの上で箱を開けた。
ふわあっと甘い香りが立ち上った。
待ちかねたようにアカネが、中をのぞき込む。
「お菓子だあ」

とたんに、ちょっとガッカリした顔をした。もともと人形なので、食べ物には用はない。

（これって……クッキー？）

箱に入っていたのは、クッキーが一袋。それと便箋が一枚。それだけ。どうりで軽いはずだ。

わけがわからず、太一は箱からクッキーの詰まったビニール袋を摑み出した。袋の口にはご丁寧に赤いリボンが結んである。

便箋には、『クッキーを焼きました。食べてください。　鈴子』と丸い字で書かれていた。

「お元気ですか」も何もない。手紙というより、説明書きみたいな素っ気ない文面だ。

お手製のクッキーだというのは、一目でわかる。色も形も不揃いだから。

しかし――。

（どうしてこんなものを送ってきたのかな）

困惑して、手にしたクッキーの袋をぼんやり見ていると、

「わざわざクッキーを焼いて送ってくれるなんて、素敵。新しいお母さんなんでしょ？」

古都子がテーブルに肘をつき、組み合わせた指に顎をおいて、訊いてきた。

（お母さん……？）

太一はきょとんとした。お母さん。なんて違和感のある言葉だろう。

「鈴子さんは……父の再婚相手ってだけで」

古都子は猫のように、ちょっと目を細めた。柔らかな声で、



「あまり仲がよくなかった？」
「べつに、そういうわけじゃ」
もごもごと太一は答えた。
アカネはクッキーよりも赤いリボンのほうが気に入ったらしい。太一の横で、リボンの端を握ってひらひらと嬉しそうに振っている。
「……好きとか嫌いとか、べつに考えたことないっていうか」
「鈴子さん」に対しては何も思わなかった。好きか嫌いかどころか、彼女に対しては良い感情も悪い感情も持たなかった。
ただ、「鈴子さん」が来てから、太一にとって自分の家は、ひどく気疲れのする息苦しい場所となった。父の啓介も「鈴子さん」も自分も、それぞれに気を遣って相手の表情や言葉をうかがうような、そんな空気がいつもあって、息がつまりそうだった。
だから、啓介の勧めもあって太一はこの空栗荘に下宿することにした。家から逃げ出したかったのだ。
「鈴子さん」だって同じだろう。啓介も彼女も、太一が家を出てホッとしたに違いない。
それなのに。
（どういう意味なんだろう、これ）
「ちょっとお腹が空いちゃったな。そのクッキー、私ももらっていい？」

ニッコリした古都子に、太一は慌てて袋を差し出した。
「どうぞ」
「ありがと」
古都子はバター色のクッキーをひとつつまんで、ぱくっと頬張った。
「……」
それきり、しんと黙り込んだ彼女を、太一は怪訝に見る。
「古都子さん？」
「……」
「あの？」
「……か、固い……」
「ええ!?」
太一もひとつ、口に入れてみた。
（うわ、なんだこれ？）
クッキーにしてはおそろしく固い。噛るというより、噛み砕いて飲み込む感じ。おまけに砂糖の塊のように甘かった。甘すぎて、他の味なんかわからない。
（これって、失敗作なんじゃ……？）
「うーん、ここまで固くできるっていうのも、逆にすごいかも」

お茶と一緒にようやく口の中のクッキーを飲み込んで、古都子はむしろ感心したように言った。
「あんまり料理の上手な人じゃないから」
「鈴子さん」のつくったまずい料理の数々——焼きすぎてぼそぼそになったハンバーグや、うんざりするほど甘い照り焼きのチキン、油でべとべとのトンカツを久しぶりに思い出して、太一はげっそりした。
「そういえば太一君、前にもそんなことを言ってたっけ」
古都子はもうひとつクッキーをつまむと、慎重に端っこを噛りながら、うなずいた。
「そんな、無理に食べないほうがいいですよ。甘すぎるし」
「確かにお砂糖の分量は、完全に間違えちゃったみたいね」
言いながら、古都子はけろりとした顔で口を動かしている。
(これ、捨てるしかないんじゃないかな)
本当にどうしてこんなものを送ってきたんだろうと、太一はため息をついた。
「どうせ送ってくるなら、手作りなんてしないで、店で買ったものにしてくれたらよかったのに。そのほうがおいしいんだし」
思わず言ったら、古都子はちょっと目を瞠った。
「太一君は、そんなふうに思うんだ?」
「え?」

その時、食堂に十遠見が入ってきた。

国家公認術者は普段はクールなサラリーマン風にスーツとネクタイ、夜は白黒ホルスタイン柄のパジャマを愛用しているが、休日の今日は目がさめるようなコバルトブルーのタートルネックのセーターを着ていた。趣味がいいのか悪いのか、判断に迷うところだ。

「どうしたの、十遠見さん？」

「コーヒーでも飲もうかと思ったんだが。……何か甘い匂いがするな」

「うん、これ。太一君の家から送ってきたクッキー。手作りですって」

「ほう？」

十遠見はメガネをきらりと光らせると、ずかずかと近づいてきた。「手作りとは聞き捨てならない」と呟くと、素早く手を伸ばしてクッキーを口に放り込んだ。

わぁ、と太一は声をあげた。止める間もない。

「あ、あの……」

「うん？　食べてはまずかったか？」

「い、いえ。まずくないです。でもまずいんです」

味が。

将来の夢はケーキ屋さん、と言うだけあって、十遠見のお菓子作りの腕前はプロ級である。一度彼のつくったチーズケーキを食べたことがあるが、本当にビックリするほどおいしかった。

そんな人に「鈴子さん」のクッキーなんか食べさせたら、何を言われるか……、と太一は内心で焦った。

十遠見は眉を寄せて、クッキーを噛み砕いている。あくまで冷静に、口の中のものを分析しているみたいな表情だ。

ややあって、言った。

「誰の手作りだ？」

「父の再婚相手です」

そう口にするたび、他人には関係のない家庭の事情をわざわざ公言しているような気分になって、滅入ってしまう。

なるほど、と十遠見は呟いた。

「……悪くないな」

「えええええっ⁉」

太一は珍しく驚いた。シルクハットをかぶったお魚紳士を見かけたり、ろくろっ首の頭を拾い上げたり廊下で落ち武者と対面したりすることよりも、十遠見の言葉のほうがはるかに衝撃的だった。

「まさか、おいしいんですか⁉」

「いや、味のことだけ言えば、明らかにまずい。というより、これは菓子と呼べるレベルでは

ない」

さらにぶつぶつと、独り言のようにつづける。

「準備段階でバターを溶かしすぎたな。途中で分量に不安を感じて小麦粉をさらに加えたうえ、力いっぱい混ぜすぎてグルテンの粘りが出てしまった。おまけに小麦粉を足したぶん、砂糖も足したのはわかるが、明らかに計量ミスだ。とどめにオーブンの余熱が十分ではなく、焼いているうちに水分がとんでしまった――とまあ、こんなところだろう。初心者にありがちなミスだが、それをいっぺんに全部やらかすというのは、なかなかできることじゃない」

「はあ」

「だが、悪くはない」

太一は首を捻った。

「どうしてですか？」

十遠見は彼を見る。指先でメガネの銀縁を押し上げた。

「どうしてかって？　君はわからないのか？」

逆に訊かれて、太一は困った。

（わからないって、何が？）

「鈴子さん」のクッキーが固すぎて甘すぎてまずいこと以外に、まだ何かあるのだろうか？

「そうか。――わからないなら仕方がないな」

十遠見はそれだけ言うと、あとは何事もなかったように、コーヒーを淹れに厨房へ行ってしまった。

残されて、太一はぽかんとする。十遠見は、一体何を言っているのだろう。

（――太一君は、そんなふうに思うんだ？）

古都子の言葉もわからない。だって、このクッキーに比べれば、店で買ったもののほうがよほどおいしいにきまっているのに。

（あれ、なんだか……）

急に足下が頼りなくなったような、不安な気持ちになった。

まるで外の人間と話をしている時のように、十遠見や古都子の言っていることが理解できない。ここの住人たちとは、家や学校にいる時よりもよほどうまく、会話ができているつもりだったのに。

一人遊びに飽きたらしく、アカネがつん、と太一の袖を引っ張った。

「ねえねえ、太一。アカネの髪にこれ結んで」

付喪の少女が差し出したリボンをしばらく見つめてから、太一は首を振った。

「俺、結び方知らない」

声は自分でも驚くほど素っ気なく、聞こえた。

「おいで、アカネちゃん。私がやってあげる」

古都子がアカネを引き寄せて、おかっぱの髪を手櫛で撫でつけると、器用にリボンを結わえた。まるで赤い花を挿したように、少女の髪にリボンがふうわりと揺れる。
「はい、できた。すごく可愛いわよ。ね、太一君」
「……うん」
「うわーい、ほんと？」
アカネはくすぐったそうに、笑った。
「本当よ。お露さんたちにも見せてらっしゃいな。みんな、庭にいるから」
「うんっ」
よほど嬉しいのだろう。アカネはぴょんと立ち上がると、リボンを大事そうに両手で押さえて、ぱたぱたと食堂から駆け出して行った。
「ね、太一君」
「はい」
「鈴子さんて、どんな人？」
「え……」
なぜそんなことを訊くんだろう。とっさに見返すと、古都子は頬杖をついてニコリと笑った。
「どんなって……えっと、……背丈は普通くらいで、髪は肩くらいまで伸ばしてて、……どっちかっていうと痩せてて」

そこで太一は黙り込んだ。

——どんな人だっただろう、「鈴子さん」は？

半年間同じ家で暮らしていたのに、いざこうして訊ねられると顔も姿もはっきりと思い出せない。

古都子は小首を傾げた。

「よく笑うとか大人しい感じとか。キレイ好きとか女らしいとか逆にボーイッシュとか、どこの生まれとか趣味は何とか、『どんな』っていうのにはいろいろあると思うけど」

出身や趣味どころか、彼女がどうやって啓介と知り合って結婚することになったのかも、知らない。どんな性格かなんて、知らない。

（あれ……？）

太一は呆然とした。

啓介の再婚も、再婚相手のことも、どうでもいいと思っていた。だけど古都子に言われるまで太一は、自分が「鈴子さん」のことを何も知らないのだということさえ、わかっていなかったのだ。

この半年の間の会話やいろいろな場面を、一生懸命に思い出してみる。「鈴子さん」はよく笑う人だろうか？　キレイ好きというのは、何をしたらそうだとわかるのだろう。ボーイッシュという感じでは、なかったような……。

「すみません。俺、他人のことってよくわからなくて」
結局、そんな返事しかできなかった。
古都子は「そっか」とうなずいた。
「うん。そうよね。見た目だけじゃわからないことも、いっぱいあるし。よけいなことを訊いちゃって、ごめん」
「あ、いえ……」
クッキーの袋を箱にしまって、太一は立ち上がった。
「俺、もう部屋に戻らないと」
カバンと箱を摑んで、逃げ出すように食堂を出た。
前庭から、アカネのはしゃいだ声と、お露さんやミヨシたちの会話が聞こえてくる。落ち葉焚きの甘いようないがらっぽいような臭いのする煙が、玄関の中にもうっすらと漂っていた。
階段を登りながら、太一はため息をつく。手にした小さな荷物は、その分だけ少し重くなったような気がした。

3

その訪問者は、冬の初めの駆け去るような通り雨とともにあらわれた。

バス停に降りたとたん、空は晴れているのにぱらぱらと雨粒が落ちてきた。雨宿りするよりこのまま走ったほうが早そうなので、太一は急いで空栗荘を目指して駆けだした。

まだ夕刻でもないのに、陽はずいぶん低い。斜めになった陽射しに透けて、雨粒が金色に輝いた。あたりの風景は雨に濡れて一変し、空も足下のアスファルトも、目に入るすべてが光のかけらを散らしてキラキラと、燃えるような金に染まっていく。

光の中を走りながら、眩しくて太一は何度も目を瞬かせた。

そうして空栗荘の門が見えるところまで来た時に、そこに佇む人影に、太一は気づいて足を止めた。

降り始めと同じように、雨は唐突にやんだ。幻のような金色の世界も瞬時に消え、あたりはまた、見慣れた日常の風景に戻る。

（お客さんかな）

近づいてゆくと、門の前にいた相手も気づいたらしく、こちらを向いた。

真っ白な髪と口髭をたくわえた老紳士だ。真鍮のボタンのついたフロックコートに、黒い山高帽――むろん太一にコートや帽子の種類まではわからなかったが――をかぶっている。立派な身なりだが、どことなく古めかしい。背筋をぴんと伸ばして、厳かな顔で太一を見ていたが、空栗荘の住人だと認識したのか、山高帽を脱いで声をかけてきた。

「失礼。空栗荘の主はおられようか」



「大家さんに何か用ですか？」
「用があるからうかがったのであるが」
その通りだが真顔でそう返されると、どうも気難しい相手のように思えて、太一は「はあ」とだけ呟いた。
（大家さんはいるとは思うけど、寝てるかも）
とりあえず、玄関に案内する。
「どうぞ。今誰か呼んできます」
老紳士を中に招き入れたところで、お露さんが割烹着の裾で手を拭きながら、食堂から出てきた。
「おやおや」
客人と太一を交互に見て、お露さんは軽く眉をひそめる。
「誰だい、この人は？」
「あの、大家さんに用があるそうなんです」
「大家にねえ」
お露さんは今度はしげしげと老紳士を眺めてから、
「とにかく本人を呼んでくるから、ちょっとそのまま待っていておくれ」
と、その時、驚いたことに当の柊二郎が、ぺったんぺったんとスリッパを引きずって姿を見

せた。
「おやー、お客さんですかー」
思い切り気の抜ける声で言って、ふわあっとアクビをする。髪に寝癖がついているところをみると、例によって今まで寝ていたようだ。
「あんたの客だよ」
お露さんが言うと、それまで黙っていた老紳士が初めて口を開いた。
「空栗荘の主であられるか」
「はい。時国柊二郎です」
「境界守の」
「はいはい」
「では、あなたにお頼みしたいことがある。聞いてもらえようか」
柊二郎は目尻の下がった目を細めて、「もう中に入っちゃってますからねぇ」と呟いた。
その言葉やお露さんの態度がなんだか妙で、太一は首を傾げる。
しかし、空栗荘の大家はすぐに笑顔でうなずいた。
「わかりました。ではあらためて、どうぞお上がりください」
老紳士は靴を脱ぐと、「失礼」と言って上にあがった。
「お露さん。団欒室は空いてます？」

「ああ、誰もいないよ」
「じゃあ、そちらにお客さんを案内しますので、お茶をお願いします。三つ」
「三つかい」
「はい。太一君の分も」
え、と太一は声をあげた。
「俺も……？」
「そうですよ。早いとこ制服を着替えて、団欒室まで来てくださいね」
柊二郎は、やっぱり気の抜けるような笑顔でうなずいた。
「だってこちらの客人は、もう君のお客さんでもあるわけですから。――ここでは、そういうルールなんです」

「ルールって何ですか？」
柊二郎と老紳士が団欒室へ行ったあと、太一はお露さんに訊いた。
「まあね。うっかりしていたよ。あんたにちゃんと説明をしておかなかったアタシが悪かったのさ」
お露さんは屈んで客人の靴を揃えながら、ため息まじりに言った。そうして身体を伸ばすと、太一を見た。

「空栗荘にやって来るものが、必ず人間とは限らない。もしそれが妖怪だったら、私らが招き入れてやらなきゃ、連中は玄関から中には入れないって決まりだ」

そういえば前にもそんな話を聞いた。

この空栗荘は人間と異形の世界の境界にある建物なので、両者の住み分けのためにはそういう決まりも必要なのだ。

「だから、訪問者が何者であるかわからないうちは、簡単に中に入れちゃいけない。いくら表の世界のほうからやって来たとしても、もとから人間の中に紛れ込んでいる妖怪だっているからね。そりゃ、今の客が完全に人間だというなら、問題はなかったろうが」

それで、太一にもようやく呑み込めてきた。

「俺があの人を、中に入れちゃったから……」

「そう。あんたは自分であの客人を招き入れた。それはつまり、あんたが境界を越える許可を与えたってことさ。だから、あの客に対する責任はあんたにもある。――ルールってのは、そういうことさね」

（責任……そうか、それで）

あの老紳士は太一の客でもあると、柊二郎は言ったのだ。

「あの人、妖怪なんですか？」

どうだろうね、とお露さんは肩をすくめた。

「妖怪かもしれないし魔物かもしれないし、それともやっぱり人間なのかもしれない。でもまあ、幸いなことに悪いヤツではなさそうだ。大家がああやって、中にあげたんだから。これが万が一にも悪意のあるヤツだったら……」

「悪いヤツだったらどうなるんですか？」

さあてどうなるかね、とお露さんは惚ける。

「すみません。俺、知らなくて勝手なことをしちゃって」

「なに、知らなきゃやって当然のことを、あんたはやったまでだ。だから教えとかなかったアタシがいけないんだよ。……ま、次からは中に入れる前に誰か呼んどくれ。大家が敷居をまたぐ許可さえすりゃ、何の面倒も起こらないんだから」

はい、とうなずいてから、太一は団欒室のほうを見た。

柊二郎が待っているだろうから、早く服を着替えて行かなければならない。

（でも……俺が大家さんと一緒に話を聞いて、何か役に立つのかな）

客に対して責任をとるって具体的にどうするんだろう、と太一は思った。

「――というわけで、その本を探して来てはもらえぬであろうか」

太一が団欒室に入っていくと、客はすでに話を始めていた。

この空栗荘で、団欒室だけが洋間だ。板張りの床に絨毯が敷かれて、古めかしい革張りのソ

ファや猫足のテーブルが置かれている。壁の一面には本がぎっしりと並んだ棚。隅には暖炉があって薪の束が積み上げてあるが、まだ火は入っていない。それでもアーチ型の窓から射し込んだ昼間の陽射しの温もりが残って、部屋の中はほっこりと暖かかった。

お露さんは先に来たらしく、テーブルにはすでに三人分の茶が出されている。話の邪魔をしないよう、太一は遠慮がちにソファの端に腰を下ろした。

老紳士の頼み事というのは、要するにこういうことだった。

――地方の名士で資産家でもあった自分の父が、生前に一冊の本をつくった。ところが父の死後にそれは人手にわたってしまい、行方がわからなくなった。父の形見とも言えるその本を自分はこれまで探し続けていたのだが、先日それがこの賽河原町の『裏側』の古本屋にあることがわかった。しかし自分では妖怪の町に入り込むことはおろか、その店を見つけ出すことも難しいので、境界守である空栗荘の主に力を貸してもらいたい。

（どう見ても人間だと思うけど）

話を聞きながら、太一は首を傾げた。

老紳士は一人掛けソファにぴしっと姿勢を正し、行儀よく揃えた膝の上に帽子を置いて座っている。お露さんはああ言ったけれども、妖怪や魔物にはとても見えない。

ひとつだけ妙だとしたら、老紳士が部屋の中でもコートを着込んだままだということだが。

（でも、ものすごく寒がりなのかもしれないし）

他にコートが脱げない理由だってあるかもしれない。

大家はといえば、ソファにぐんにゃりと埋まって「あー」とか「うー」とかよくわからない相づちを打っていたが、老紳士の話が終わると、寝癖がついたままの頭をコリコリと掻いた。

「あー、まずですねえ。――境界守のことは、どこでお聞きになりました？」

「人づてに」

「賽河原町が妖怪の町と繋がっていることや、古本屋にあなたのお父上の本があることも？」

「人づての人づてに」

厳めしく答えて、老紳士はじっと柊二郎を見つめた。

「それではいけないのであろうか」

「いえいえ」

空栗荘の大家はにこやかに言った。

「ここは旅館も兼ねていますから、『裏側』のことを知っていて泊まっていく客もいますし。頻繁にあちら側に出入りしている人間も、いないわけじゃありませんからねえ。そういうこともあると思います、はい」

あっさりと応じて、柊二郎は腕を組んだ。

「で、早い話が僕があなたの代わりに古本屋に行って、その本を見つけてくればいいということでしょーか？」

「いかにも。頼まれてもらえるであろうか」
いやべつにいいですけどね、たいした手間じゃないしどうせ暇ですから……と柊二郎はむにゃむにゃと言った。
「その礼と言っては何であるが、本は境界守に差しあげる。受け取っていただきたい」
老紳士はなんだかすごく簡単に、不思議なことを言った。
太一は目を瞬かせる。
（だって、それじゃどうしてその本を探してるんだろう。人にあげたってかまわないものだったら）
柊二郎も同じことを考えたのだろう。おやぁ、と呟いて、
「お礼はけっこうですよ。父上の形見をいただくわけにはいきません」
「私が持っていても仕方のないものである」
「それはまた、どうして」
老紳士はちょっと黙り込んでから、言った。
「実は父の本は完成していないのだ。最後の一文が抜けたまま、未完である。だから私は本を探し出して、最後の文を書き加えなければならない。本が完成すれば、私ももう心残りはないのであるから」
柊二郎は考え込むようにしばらく老紳士を見つめていたが、「ああ、そういうことですか」

と呟いた。

「で、お父上はどんな本を書かれたんでしょうか」

「内容は知らないのであるが、父が自分の妻のためにつくった本だと聞いている。だが父の妻は身体の弱い女性で、本ができあがる前に亡くなってしまった」

そうですかと、それには感じ入ったように柊二郎はうなずいた。

「あとは、そうですねえ、本のタイトルとか、装丁がどういうふうだとかわかるといいんですけど」

老紳士は首を左右に振った。それも知らないという。

(内容もタイトルも、どんな表紙とか形とかもわからないって……)

そんな本を、この人はどうやって長い間探しつづけてきたのだろうと、太一はまた不思議に思った。

ところが驚いたことに、

「はい。わかりました。お引き受けしましょう」

柊二郎はけろりとした顔で、うなずいた。

……どうやって⁉

太一は思わず柊二郎を見る。

「ありがたい」

老紳士は初めて、ホッとしたように頬のあたりをわずかに緩めた。
「明日の今頃、もう一度来ていただけますか？　今度は呼び鈴を鳴らしてもらえれば、大丈夫ですから」
そう言ってから柊二郎は、まるでたった今気づいたみたいに、老紳士の膝の上の山高帽を見た。
「いい帽子ですねえ、それ」
「これも父の形見の品である」
「そうですか。――ちょっと拝見」
柊二郎は帽子を受け取ると、とっくり返しひっくり返し眺めて、
「いやあ、僕もこういうのをひとつ欲しいと思っていたんです。お礼ならこっちをもらっちゃダメですか？　あ、ダメですかそうですか。……じゃ、せめて明日までこの帽子、僕に貸してください」
しかし、と老紳士は口髭をもごもごとさせた。
「これは大切な」
「はいはい、もちろん。明日、本と一緒にお返ししますとも」
のらくらしているくせに、妙に押しが強い。
「でも本が見つかれば、この帽子はもう必要なくなりますねえ」

「それは」
老紳士は柊二郎を凝視した。穴のあくほど見つめて、やがて納得したように小さくうなずく。
「では、境界守にお預けする」
どうもー、と柊二郎は気の抜けるような声で言った。

「と、いうことで。——太一君」
玄関で老紳士を送り出したあと、柊二郎はくるりと太一を振り返った。
「はい」
都合のいいことに、明日は国民の祝日です。勤労感謝の日です。勤労して感謝しましょう」
「はあ？」
「古本屋に行って本を探すのを、手伝ってください」
太一はぽかんとして、柊二郎を見た。
「あの……俺も一緒に行くんですか？」
「もちろんです」
柊二郎はニコニコしてうなずく。
「さっき言ったじゃないですか。君のお客さんでもあるんですよーって」
「……」

自分が招き入れた者に対する責任の取りかたを、とっても具体的に知った太一だった。

4

翌日。

「お待たせしました、太一君」

朝ご飯をすませて、玄関の外で太一が待っていると、少し遅れて柊二郎が出てきた。

一目その格好を見て、なんかすごいと太一は思った。

空栗荘の大家が作務衣を着ているのはいつものことだからいいとして、寒いのでその上に綿入れの半纏を着て襟巻きを巻いている。頭には、昨日老紳士から借りた山高帽。おまけになぜか、今時珍しい買い物カゴを手にぶらさげていた。

「あの、大家さん。その帽子……」

「あはは、似合います？」

「買い物カゴ……」

「お露さんに、帰りに豆腐を買ってこいって言われまして」

さあ行きましょうと太一を促して、柊二郎は妖怪の町につづく坂道を、ぺったんぺったんと歩き出した。襟巻きまでしているくせに、足下が素足に雪駄というのがよくわからない。

あとについて行こうとして、太一はあれっと思った。
空栗荘を振り返る。
（いつもなら、絶対に一緒に行くって言うのに）
「ああ、アカネちゃんなら、今日はお留守番をしてもらうことにしました」
柊二郎を見ると、少し先で買い物カゴを振っている。
「たまには僕と太一君と二人でってのも、いいかと思いまして」
（きっとまた、ガラスケースに御札を貼ったんだろうな）
柊二郎のあとを追いながら、太一は思った。ケースの中で市松人形の姿のままプンプンしているアカネの姿が、目に浮かぶようだ。
（帰ってきたら、すごい駄々をこねられそう）
夏には暗いほど濃く茂っていた坂道の樹々も、今は赤や黄色の火を灯すように葉の色を変えている。しばらく来ないうちに、妖怪たちの町もすっかり初秋のよそおいになっていた。
「いい天気ですねえ」
歩きながら、柊二郎は気持ちよさそうに空を見上げた。紅葉の隙間から見える空は、夏のそれよりずっと明るい水色だ。
大家と並んで歩きながら、太一は躊躇いがちに口を開いた。
「……昨日の人って、人間ですよね？」

「んー、太一君にはそう見えましたか？」
「違うんですか？」
「どうでしょう」
謎々みたいな返事だ。
諦めて、太一は別のことを訊いた。
「本は見つかるんですか？」
「どうしてです？」
「だって……中身もタイトルもわからないのに」
それに、あの老紳士が人づてに聞いた話なら、絶対にその本が裏・賽河原町の古本屋にあるという保証もないんじゃないかと思う。もし本が見つからなかったらどうするんだろうと、太一はちょっと心配だったのだ。
「あはは。何とかなりますって」
と、これまた呑気な大家の返事だ。
太一はため息をつくと、最後にもうひとつ気になっていた質問をした。
「あの、境界守ってこういうことも仕事なんですか？」
異界と人間の世界の境界を管理するという仕事が、具体的に何をするものなのか、太一には未だによくわからない。

「頼まれ事ですか？　まあ、気が向いたらですよ。あくまで」
「気が向いたんですか」
柊二郎は買い物カゴを持っていないほうの手を、ぐっと拳のかたちに固めた。
「だって泣かせる話じゃないですかっ。身体の弱い奥さんのために、つくった本ですよ。しかも本ができあがる前に、奥さんは亡くなってしまったんですよ。人としてその奥さんのためにも何とかしてあげたいと思うのが、情というものでしょうっ」
「……」
これはわかりやすかった。要するに、お露さんいわくの「ほだされた」というやつだ。
（大家さん、奥さんと別れたって言ってたから）
何やら心の琴線に触れてしまったらしい。
そうこうしているうちに、二人は町中の通りを歩いていた。
ここでは地図は役に立たない。通りも家も、よく入れ替わってしまうからだ。柊二郎や古都子のように慣れた人間でなければ、迷って目的地にたどり着くこともできない。少なくとも太一がこの町を一人で歩くことは無理だった。
通りには、陽の光が平気な妖怪たちがのんびりと行き来していた。道ばたで将棋やメンコで遊んでいるモノや、蕎麦の屋台にたむろっているモノたちもいる。彼らに人間の決めた休日はあまり関係ないので、それがいつもの風景なのだろう。

「あー、ちょっとお訊ねしますが」
柊二郎が呼び止めたのは、ちょうど目の前を横切ろうとしていた焼き芋屋だった。一つ目小僧が中年になったみたいな妖怪が、リヤカーを引いている。
「おや、柊のダンナでしたか」
一つ目親父は、いっこだけの目を丸くした。
「こりゃまた、お久しぶりで」
「すみませんけど、今日の電車はどこから出るんでしょーか」
電車ねえと呟きながら、妖怪はつるつるの自分の頭を手で撫でた。
「今日は西の二丁目あたりだったと思うがねぇ。近くまで行ったら、もっぺん誰かに訊いてみておくんなせい」
「そうですか。ありがとうございます。……焼き芋ふたつください」
「まいど」
親父が新聞紙に包んだ焼き芋を受け取り、柊二郎はひとつを太一に手渡した。
大きくてところどころ焦げ目のついた芋は、割るとほこほこと湯気をあげた。蜜のように黄色くて、いかにも甘そうだ。
焼き芋屋と別れて歩きながら、柊二郎はもうそれを頬張っている。「太一君もどうぞ」と促されて、指を火傷しそうになりながら、太一も焼き芋を齧ってみた。

「すごい。おいしいです。なんか、スーパーで売ってる焼き芋と全然違うっていうか」
「そうでしょう」
二人で並んで歩きながら、はふはふと食べる焼き芋は本当においしかった。誰かと一緒に、というのが嬉しいことなのだと、太一は空栗荘に来てから知った。
おや、と呟いて柊二郎が唐突に空を見上げた。
「太一君、あそこの家の軒下まで走りますよ」
「え？」
「雨宿りです」
そのとたん、さあっと空気が震えて、足下にぽつぽつと水滴の染みが広がった。
通り雨だ。
慌てて柊二郎の指さした軒下に避難して、太一は空を見る。
（……何だろう、あれ）
青く晴れたままの空から、雨粒が水晶のかけらのように光りながら落ちてくる。一瞬だけあたりが陰って、目をこらすと、何かとても大きなモノの気配がゆっくりと頭上を横切っていった。
あるかなしかの淡い雲のような、透き通った紗布のようなものが、ひるがえりながら。
「あれは四具礼という妖怪です」

柊二郎が焼き芋の残りを齧りながら、言った。
「しぐれ？　って、雨のことじゃなかったんですか？」
「雨のこともありますし、晴れた日に雨を降らせる妖怪の名前でもあります。四具礼は秋から冬にかけて、よくあらわれるんですよ」
「そうなんだ」
綺麗だな、と太一は思った。
朝の光の中に降り落ちる雨も、その雨を降らせる妖怪も。
「最近、何かイヤなことでもありましたか？」
いきなりそう訊ねられ、太一は目を瞬かせて柊二郎を見た。
「どうしてですか」
「なんだか軽ーく滅入ってる感じですから」
「……べつにそんなこと、ないです」
イヤなことがあったわけではないし、滅入って落ち込んでいるわけでもない。
ただ。胸の中に小さな棘が刺さったまま抜けなくて、それがずっとちりちりして気になっているような感じだった。
太一はゴミになった焼き芋の皮と新聞紙を、手の中で丸めた。捨てる場所がないのでそのまま持てあましていると、柊二郎は買い物カゴを差し出した。

「いいですよ、この中で」
「でも」
「どうぞどうぞ」
すみませんと呟いて、太一はカゴの中にゴミを入れる。あとでゴミ箱を探そうと思いながら。
「……俺」
迷ってから、太一は言った。
「イヤなこと、とかじゃないんですけど。……こないだ、鈴子さんから宅配が届いて」
「ああ、新しいお母さんですね」
まただ、と思う。新しいお母さん、という言葉。
「あの人は母親じゃ」
ない、と言いかけて太一はあとを飲み込んだ。「鈴子さん」は母親じゃないと思う。それは事実なのだから。
だけどこれじゃまるで、「鈴子さん」に反発しているみたいだ。子供みたいに、本当の母親を恋しがっているとか、新しい母親を認めないと言い張っているとか、そんなふうに思われそうなのがイヤだった。
「太一君?」
「……鈴子さんは自分が焼いたクッキーを送ってくれたんです」

「それはよかったですね。おいしかったですか？」
「賞味期限が一年もちそうなくらい、固くて甘かったです」
なるほど、と柊二郎は真剣にうなずいた。
「クッキーが固すぎて甘すぎたから落ち込んだんですね。よくわかります」
全然わかってないと思う。
（ていうか、そういう理由で落ち込む人ってあまりいないんじゃ⁉）
「違うんです。そうじゃなくて……鈴子さんのこともクッキーも、どうでもいいんですけど、でも十遠見（とおとおみ）さんと古都子（ことこ）さんが」
「あの二人がどうかしました？」
「二人とも、そのクッキーをまずいって思わなかったみたいなんです。俺、全然意味わからなくて。……十遠見さんたちが何を言っているのか、急にわからなくなって」
どうして自分だけわからないのかが、わからなくて。
そうですかー、と柊二郎は間の抜けた相づちを打った。
「それが気になります？」
「えっと……少し」
空栗荘（からくりそう）の大家はうなずくと、いいことを思いついたとでもいうように、ぽんと手を鳴らした。
「だったら空栗荘の住人以外の人間にも、クッキーを食べてみてもらったらどうですか？　た

とえば学校の友達とか」

「え」

友達、と言われて反射的に采奈の顔が頭に浮かんだ。

「何しろうちの住人たちは、好みがいささかマニアックですからねえ。ほら、時々いるでしょう。肉は腐りかけがいいとか、ヨーグルトは賞味期限切れのやつにかぎるとか言っちゃう人。太一君は腐りかけの肉とか、ちょっとキレたヨーグルトとか、好きですか？」

「えっと、……あまり食べたくないです」

でしょ、と柊二郎は意気揚々とうなずいた。

「でもそれが好きな人だっているんです。味覚なんて人それぞれですからねぇ。だからお友達にも食べてもらって、その人がおいしいと言えば、三対一の多数決でそのクッキーは実際においしいんです。太一君がそう思わないだけで」

「……。でも、もしその人がまずいと言ったら？」

「二対二の引き分けになっちゃいますね。おいしいと思う人もいれば、まずいと思う人もいる。——と、いうことは」

柊二郎はへらっと笑うと、急に気の抜けた口調で、

「問題は味じゃないんじゃないですか～？」

太一はきょとんとした。

「味じゃなかったら、何ですか？」
「さあ」
また、謎々みたいに答をはぐらかされた。なんだか、からかわれているような気分になる。
太一が黙り込むと、大家はさらに突拍子もないことを言い出した。
「いっそのこと、タカハシさんに決めてもらうというのは、どうでしょう」
「は？」
「タカハシさんに、クッキーがおいしいかまずいか判断してもらうんですよ」
なぜここにタカハシさんが出てくるのだろう。……いや、それよりも。
「タカハシさんって、物を食べるんですか⁉」
食事をするどころか、部屋から一歩も出てこないのに。
「うーん。食べているところは見たことがありませんけど～」
「……」
やっぱり、からかわれているのかもしれない。太一はそっとため息をついた。
（結局、たいしたことじゃないってことなんだろうな）
たかがクッキーだ。おいしいかまずいかなんて、深刻な問題じゃない。十遠見や古都子の言葉も、たいした意味なんか本当はなかったのかもしれない。あの人たちと何かが少し嚙み合わなくなったみたいな気がして、それで不安になったけど、傍から見ればきっと笑ってしまうく

らい些細なことなのだろう。

「あの、やっぱりいいです。本当に、どうでもいいことだし」

ぴしゃん、と足下の水たまりで光の粒が跳ねる。

雨がまばらになっていた。見上げても、四具礼の姿はもう空にはなかった。

「ひとつだけ、ヒントをあげましょうか」

ぼんやりと空を見ていた太一は、我に返った。

柊二郎を見ると、同じように視線を空に向けている。

「……ヒントって」

「君にとって大切なこと。そこに近づくためのヒントを、ひとつだけ」

今までとは違う、柔らかな口調で。でも今までで一番意味のわからないことを、柊二郎は言う。

一番、奇妙な謎々を。

「君は『どうでもいい』という言葉を時々使うけど、『どうでもいい』と言われてかまわないものなんて、この世にはひとつもないんですよ。人間も動物も妖怪も、樹や草や虫だって」

「……」

それがヒントなのだろうか。でも一体、何の？

「『どうでもいい』というのは、無関心です。『いらない、必要ない』という意味です。それ

は悪意でさえありません。――でも誰かにいらないと言われた時、どれだけ傷ついて怖い想いをするか、君は知っているはずです」

「……俺、べつに」

傷ついたことなんてないと思う。無愛想とかつまらないヤツとか言われても、それは他人と同じ感情を共有できない自分が悪いのだから、どんなふうに見られても仕方がないんだと思っている。

それなのに――。

（あれ？）

太一は腹を押さえた。

胃の中を氷の塊が沈んでゆくような感じがした。まるで胃が、ぎりぎりと引き絞られてゆくような。この感覚。

これはあの時の、「怖い」という感覚と同じだ。

誰もいない冷たい台所。太一に背中を向けて座っている母親。

――あんたなんか知らない。

あの母親の言葉が、怖くてたまらなかった。だけど、どうして怖いと感じたのか、太一は今もわからない。

触らないで。あっちへ行って。あんたなんか知らない。あんたなんか。

——もういらない。

恐怖は痛みにかわって、きりっと胃にさし込んだ。

と、暖かな手が太一に触れた。胃のあたりを摑んでいる太一の手に、重ねるように。

(あ……)

とたんに痛みが消えて、身体から力が抜けた。

「おや、雨があがりましたねえ。そろそろ行きましょう」

太一からそっと手を離すと、柊二郎は何事もなかったように、のほほんとしたいつもの笑顔と声で言った。

「さて、西の二丁目まで来ましたけど……」

柊二郎は帽子の上から頭を手で押さえて、きょろきょろとしている。

「電車はどこから出るんだか」

「あのお。……こちら側にも電車ってあったんですか?」

遅まきながら太一は訊いた。妖怪の町に電車が走っている図が、どうしても想像できない。

「ありますよ。何を言っているんですか。こちらだって人間の町と同じなんだから、電車くらいあります」

(妖怪が電車に乗るのかな?)

でも、乗らないのだったら電車など必要ないわけで、だからやっぱり利用客というのはいるのだろう。

空栗荘の大家は相変わらず、「どこでしょうね～」と呟きながらあたりを見回している。

「もしかして駅の場所がわからなくて迷っているとか」

「駅がどこにあるかは、普通わかりません。日によって場所が変わりますから」

「は？」

「かつてのさまよえる湖、ロプ・ノール湖のごとく、気分しだいで好き勝手な場所に出現します。さまよえる駅です」

湖は好き勝手な気分で移動しているわけではなかったと思う。断じて。

（駅がその日その日で違う場所にあったら、みんな困ると思うけど……）

ああちょうどよかった、と柊二郎は声をあげた。

「こんにちは、町長さん」

（あ、お魚紳士）

通りかかったのは、魚の身体に人間の手足、その手にステッキを握りシルクハットをかぶった、上品な鮒だった。この町の町長であるところの、鮒大尽である。今日は首もと、というかエラもとにお洒落な白いカシミヤのマフラーを巻いてる。

「これは時国どの。このようなところでお会いするとは、珍しい。今日はどちらまで行かれま

す」

「古本屋に用があるんですけど、駅の場所がわからなくて困ってます。この近くのはずですけどねえ」

それでしたら、とお魚紳士はステッキの握りの部分で道を指し示した。道なりに行って、次の角を右に曲がり、乾物屋と果物屋の間の細道を抜けて……と説明する。

「なに、五分とかかりません」

「どうもありがとうございます。おかげで助かりました」

「いえいえ。空栗荘の主どのには代々、町のものがお世話になっておりますから」

では失礼、とお魚紳士はシルクハットを軽く持ち上げて挨拶すると、尾鰭をひきずってよたよたと歩き去った。

指示されたとおりに行くと、そこには確かに入り口と改札があった。というか、入り口と改札だけしかなかった。

家と家の塀の間のやっと人が入れるくらいの狭い隙間に、地下へ降りる階段と、その手前に改札がひとつ。自動ではなく、青い制服を着たオットセイみたいな妖怪が、切符切りを持って座っている。いかにも急ごしらえだ。

「古本屋まで大人二人。あ、太一君、ここは僕が払っておきますから」

柊二郎が買い物カゴからがま口の財布を取り出して、十円玉を何個か払うと、オットセイの

駅員は緑色の切符にパチンと切れ目を入れて彼に渡した。
階段を下りると、ホームがあった。
（電車って地下鉄……!?）
太一は呆気にとられる。地下への階段、という時点でまさかと思ったのだが。
しかもなんだか年代を感じさせる。ホームの壁は赤いレンガ造りで、古びた木製のベンチがいくつも置かれていた。少し暗い間接照明。つくられて何十年も経っている建物特有の、埃っぽくてくすんだ色合いの地下鉄駅。
「この駅っていつからあるんですか？」
うーん、と大家は首を捻った。
「いつからでしょうねえ。誰も知らないと思いますよ。でもこの昔っぽい感じが、いかにもの味わいがあっていいですよね。これぞまさしく、レトロなメトロ」
「……」
「今のはシャレですけど、おもしろくありませんでした？」
「……お、おもしろかった、です」
黄色い電車がホームに入ってきた。「西の二丁目」とアナウンスが流れる。
がたん、と目の前の扉が開いて、乗り込むと内部もやはりレトロだ。深緑の硬いシート。手すりや窓枠や壁も全部木でできている。ランプのような黄色い照明が、車内を暖かな色に照ら

していた。

動き出した地下鉄の車内に、他に乗客はいない。

「古本屋さんて、賽河原町から遠いんですか？」

たたん、たたん、と振動が伝わってくる。シートに二人で並んで腰掛けてから、太一がそう訊ねると、柊二郎は「いえいえ」と首を振った。

「店は賽河原町にあります」

「え、でも」

「店主が偏屈で、歩いていけないところに店をつくっちゃったんです」

やがて、ぎーっと音をたてて電車が減速すると、真っ暗だった窓の外が明るくなった。次の駅についたのだ。

車内アナウンスが、「古本屋前」と告げた。

階段を上がると、毛玉の塊みたいな駅員が改札にいて切符を受け取った。

地上に出て、太一は目を丸くする。

（ここ、どこだろう）

賽河原町だというけれども、あたりは雲だか霧の中にいるみたいにもやもやとただ白くて、何も見えない。

ただ一軒だけ、目の前に大きな蔵を改築してつくったみたいな店が建っていた。
入り口に『こんにゃく堂』と墨で書かれた看板がかかっている。ヘンな名前だなと太一が思っていると、柊二郎がこそっと囁いた。
「ここの主人は鉄鼠という妖怪です」
「てっそ？」
「お寺の経文を食べてしまうグルメな大鼠です。あ、経文というのはお経を書きつけた書物ですけどね。ところがさすがに仏様の罰が当たって、ある時ひどい腹痛をおこしまして。それ以来ベジタリアンになって、今はこうして古本屋の主人におさまっているそうです」
（だからって、わざわざ古本屋でなくてもいいと思う）
いくらベジタリアンでも、昔のくせでうっかり自分の店の書物を食べてしまうことはないんだろうか。
太一がそんなことを考えている間に、柊二郎はガラスのはまった引き戸を開けて、さっさと中に入っていった。
「こんにちはー」
声をかけると、奥から主人が出てきた。人間くらいの丈で、二本の足で立っているが、確かに鼠だ。墨染めの衣を着て、ひねこびたじいさんみたいな顔をしている。
「空栗荘の主か。何の用だ」

懐に手をつっこんでボリボリ掻きながら、店主は無愛想に言った。
「ええ実は、探している本がこちらにあると聞いたものですから」
太一は店内を見回した。
壁は全部、天井まで高さのある本棚になっている。そこにぎっちりと本が詰め込まれているだけでなく、床の上も足の踏み場もないほどの本の山。右手の奥に木の階段があるが、そこも人がようやく通れるほどの幅を残して、紐でくくった本の束が積んであった。
店の薄暗い電球の明かりの下で、あふれかえった本たちは乾いた埃と古い紙特有の、セピア色の匂いを漂わせている。
「どんな本だ?」
鉄鼠の口調はぞんざいだ。商売けがないのか、人間が好きではないのか、あるいは人間も妖怪もひっくるめて他者とのつきあいを嫌うタイプなのかもしれない。
柊二郎はかぶっていた山高帽をとると、はい、と妖怪に差し出した。
「この帽子の持ち主が書いた本です」
鉄鼠はそれを受け取ると、尖った鼻先を近づけて臭いをかぐような素振りをした。そうして少しの間、考え込むように髭をひくひくと動かしてから、
「おい、倉ぼっこ! そっちのハの棚の一番下、左から三つ目の包みを持ってこい!」
二階に向かって、大声をあげた。

太一は目を丸くした。

（まさか……どの本かもうわかったとか？）

「さすがですねぇ」

柊二郎が言うと、鉄鼠は「ふん」と鼻を鳴らした。

「あんたみたいな客ばかりなら、こっちも商売が楽だ。中身がどうの表紙が何色だのと言われるよりは、こういうものをじかに見せてもらったほうがわかりやすい」

帽子を柊二郎に返しながら、まんざらでもなさそうに妖怪は言う。

（あ、そういうこと）

太一にも、やっとわかった。

どんな本かもわからないのに、どうやって探すのだろうと思っていたら、柊二郎は最初から店主に帽子を見せるつもりだったのだ。そのために、駄々でもこねるみたいにして、あの老紳士から大切な帽子を借り受けたわけだ。

ぱたぱたと軽い足音が階段に響いた。紙包みを抱えて、まだ小学校にあがりたてくらいの小さな子供が、二階から駆け下りてきた。膝丈の短い着物を着た、いがぐり頭の男の子だ。

どのあたりが妖怪なのだろうと思ったら、子供は太一を見てニカッと笑った。とたんに、真っ赤な口が耳元まで裂けて、獣のように尖った歯がずらりとのぞく。

「こら、客にお愛想をふりまいてる暇があったら、さっさとそれをこっちによこせ！」

そうか、と太一は納得した。

（今の……お愛想だったんだ）

鉄鼠に一喝されて、子供はぱくんと口を閉じると、包みを渡してまた階段を駆け上がっていった。

「倉ぼっことは、用心がいいですね」

柊二郎が感心したように言うと、鉄鼠は「まあな」とつっけんどんに応じた。

「火除けのために雇ったんだが、ついでに店の手伝いもさせている」

あとで柊二郎が太一に説明したところによると、『倉ぼっこ』のいる蔵は火事にあわないという言い伝えがあるのだという。

「ほら、こいつだ」

黄ばんだ紙包みを開くと、本が何冊か出てきた。鉄鼠はそのうちの一冊を柊二郎に手渡した。淡いすみれ色の布地で装丁した、薄い本だ。

「ははぁ」

空栗荘の大家はパラパラと本の頁をめくって目を通し、そっと閉じてからうなずいた。

「間違いないようです。――で、これはお幾らですか？」

「金はいらん」

「いえしかしそういうわけには」



「どのみちその本は、売り物にはならん」
ああ、と柊二郎は呟いた。
「未完ですからね」
鉄鼠はじろりと彼を見て、また鼻を鳴らした。
「未完？　とんでもない、そいつはきっちり最後まで完成している。——完成したあとで、本から大切なものが逃げちまったんだ」
「ああ、なるほど」
太一にはさっぱり意味のわからないやりとりのあと、柊二郎は本を小脇に抱え、さっきのお魚紳士のように頭にかぶった山高帽を軽く持ち上げて言った。
「ではこの本はいただいていきます。……ああそうだ、気が向いたらいつでも空栗荘へおいでください。今回のお礼に、うまい酒をごちそうしますよ」
そうかい、と鉄鼠は応じた。ニヤリとしたところを見ると、実は人間嫌いでも妖怪嫌いでもなくて、大家が言っていたようにただ偏屈なだけのようだ。
「気が向いたら行くさ」

「わぉ、見てください、太一君。この本はすごいですよ。表紙は絹張り、しかもそこに印刷でなく手描きで絵が描かれています。……ううん、なんて見事な絵だろう。よほど名のある画家

に頼んだんでしょうねえ。どれどれ……おお、ここにサインがある」

帰りの地下鉄にも、太一たちの他に客は乗っていなかった。シートに腰掛けて、手に入れた本を興味深く調べていた柊二郎は、「うへぁ」と素っ頓狂な声をあげた。

「なんとなんとなんと、北山碧道！　碧道といえば近代日本を代表する絵画界の巨匠！　その肉筆画ですよ！　うーわぁ、これだけでお宝です。おまけに中の紙は最高級の和紙といわれる、雁皮紙！　いやぁ、すごいすごい。これはつくるのに相当お金がかかっていますねー」

すごいを連発されても、ヘキドウもガンピシも知らない太一には今ひとつピンとこない。ただ、本物の絵を表紙に使うなんてそれこそ一冊きりの本でなければできないし、すみれ色を背景に白い可憐な花をつけた枝を配したその表紙は、太一の目から見ても美しかった。

「いいんですか、そんな高い本をもらってきちゃって」

太一が首を傾げると、柊二郎は「いいんでしょう。本人が言うんだから」とすまして答えた。

「人間にとって価値のあるものが、妖怪にとってもそうだとはかぎりません。たとえ巨匠の肉筆画であろうと、高級な和紙を使っていようと、それはあくまで人の価値観で、鉄鼠にとっては意味はなかったんです。彼にとってこれは、ただの売り物にならない本でしかないんでしょう」

（そんなものなのかな）

でも、価値のある本だから欲しいかといわれると、自分が持ってても仕方がないしいらない

やと太一も思うので、やっぱりそんなものなのだろう。
「その本、何が書かれているんですか？」
「内容ですか？　うーん、本人の日記の抜き書きですね。この本、タイトルもありませんし」
（……日記の抜き書き？）
どうしてそんなものを、わざわざ高いお金をかけて本にしたんだろうと太一は思う。
「ほら、ここを見てください」
柊二郎は本の最後の頁を開いて、太一の前に差し出した。
そこには何も書かれていない。空白だ。
その前の頁にはこう書かれてあった。

○月×日
妻は病床で笑う。雪が見たいと唄うように言う。でも雪を見ることは叶いません
でしょうと。先ほど時雨が降った。これまで自分がそばにいてよろしかったのでし
ょうかと、妻は訊いた。死期が近いのだ。私はいつものように黙っていた。
○月×日
本の仕上がりが間に合わないのはわかっていたので、最後の頁を先に妻に見せた。
妻はよろしかったのですねと言った。私は何も言わなかった。妻はそれでも微笑ん

でいた。ああ、本などいらなかったのだ。本ができあがるまでと思ったのは、私の惰弱だ。もっと早くにこうすればよかった。最後の頁だけでよかったのだ。

夜。時雨が去るのとともに妻は逝った。

たたん。たたん。レトロな地下鉄の振動が身体に伝わってくる。

「その最後の頁が、こうして空白になっちゃってるんですよ」

柊二郎は本を閉じると、綿入れ半纏の懐に押し込んだ。

「じゃあ、やっぱり未完なんですね」

「そういうことになりますねえ」

（あれ、でも）

太一は不思議に思った。

――最後の頁を妻に見せた。

とあるのだから、鉄鼠の言ったとおり、本の中身はちゃんと完成していたはずだ。日記の、奥さんが亡くなるくだりだけは、あとからつけ足したのかもしれないけれど……。

「着きましたよ、太一君」

肩をつつかれて、ぼうっとしていた太一は我に返った。

電車はいつの間にか、「西の二丁目」駅に到着している。太一は慌てて立ち上がると、柊二

郎を追いかけてホームへ降りた。

空栗荘へ帰る道すがら、道ばたの蕎麦屋の屋台――店の親父は鉢巻きをした威勢のいいダルマで、ダルマなのに手足があったりするのがちょっと謎だ――に寄って遅い昼ごはんを食べ、そのあと太一も以前に見かけたことのあるアマガエルの豆腐屋から、木綿豆腐を三丁買った。

ところが、もう少しで空栗荘というところまで来て、またも雨が降り出した。

上空を巨大な気配がふたたび横切ってゆく。

「うわぁ、本！　本が濡れる～！　巨匠の肉筆画と高級和紙が～～！　太一君ちょっと、この買い物カゴをお願いします！　僕は断じてこの本を雨から死守しなければなりません！」

「は、はい」

柊二郎は半纏を脱いで、頼まれ物の本と借り物の帽子をその中に包み込むと、抱きかかえた。

太一は豆腐の入った買い物カゴを受け取って、あたりを見回す。が、あいにくと近くに雨宿りできそうな軒はない。

「今日の四具礼はなんだか張り切ってますね～。いや、それはいいんですけれども～」

雨宿りの場所を探すよりも、このまま空栗荘に戻ったほうが早い。二人して、午後の陽射しに燦めく雨の中を、走った。

「おんやぁ？」

と、ふいに柊二郎が立ち止まった。
「太一君、ほら」
半纏ごと本と帽子を抱きしめたまま、空栗荘の大家が指さした先で。
しゃらん。
涼やかな鈴の音が響いた。
空栗荘めざして走っていた彼らの行く手から、行列がやってくる。
しゃら。しゃら。
目にも艶やかな行列の先頭は、人力車に揺られる花嫁と花婿だ。花嫁は錦の打ち掛けに角隠しの婚礼衣装、隣の花婿は紋付きの羽織に銀糸の袴。その後ろにしずしずと、羽織袴や晴れ着姿の媒酌人と親族がつづく。
だがさらさらと光る雨の中、近づいてきた行列を見れば、人間ではない。
「……狐ですけど」
太一のぽかんとした声に、柊二郎は当然とばかりにうなずく。
「狐ですよ」
人間そっくりに婚礼の装いで行列しているのは、白い狐たちであった。
「狐の嫁入り？」
「はい。天気雨の時に通り過ぎるのは、狐の嫁入りと決まっています」

行列が目の前にさしかかった。

車の上で花婿は誇らしげに胸をはり、花嫁ははにかむように俯いている。親族の大人たちはみな真面目くさった顔で歩いているが、最後尾にくっついてきた子狐たちは、柊二郎と太一を見つけてクスクス、きゃっきゃと声をあげて笑った。

金、銀、錦の華やかな色が、目の前を通り過ぎてゆく。

行列を包みこむように、あたりに白い小さな花びらが舞っていた。目をこらしてよく見ると、降り落ちる雨は狐たちに触れた瞬間に、衣装を濡らすかわりに花びらとなって、きらきらと漂うのだ。

綺麗だな、と太一は思う。

人の世界とは違って、異形たちのいるこちら側には、なんてたくさん、綺麗なものがあるのだろう。

「狐の嫁入りって、本当にあったんだ……」

「もちろん」

「人間の世界でも、これって見えるんですか？」

「見えますよ。空が晴れているのに雨が降った時には、まれにこの行列と行き逢うことがあります」

半纏を雨からかばうように抱きしめて、柊二郎は微笑した。

「でもね。これは人間が見てはならないものです。あちらの、人の世界ではね」
「え、どうして」
太一はちょっと驚いて訊いた。
「そういう、昔からの決まり事なんです。人間は狐の嫁入り行列を見てはならない、というのは。百鬼夜行を見てはならないのと同じことです。――ねえ、太一君。本来、人間が妖かしの世界をのぞき見ることは、命を失っても文句をいえないくらい危険なことなんですよ」
この晴れやかな異形の祝いの行列は、人にとっては不吉なもの。異形の姿をかいま見て、異界と交わってしまうことで、人は命を落とすこともあるのだと。
どれだけ近くにあるように見えても、本当はそれくらい、人と異形の間は隔たっていると。――柊二郎はそう言っている。
それは、太一にはまだ、よくわからないことだったけれども。
いつしか婚礼の列は行き過ぎて、道の果てでふわりと消えた。気がつけば雨もあがり、舞っていた花びらだけが、名残りとなって地面を白く濡らしていた。

5

約束通り、昨日と同じ時刻に老紳士は空栗荘にやって来た。
昨日と同じに団欒室に客を迎え入れて、柊二郎は頼まれていた本を渡した。
「はい、これです」
受け取って、老紳士は目を見開いた。まるで生き別れていた肉親と出会ったような、驚愕と喜びが半々になった顔だ。
「おお……おお……これだ。父のつくった本……間違いない。ああ、ありがたい」
ありがたいありがたいと呻くように言いながら、震える手で本を胸に抱きしめる。そうして椅子から腰を浮かすと、老紳士は柊二郎と太一に向かって、深々と頭をさげた。
「感謝する。ようやくこれと巡り会うことができた」
「ずいぶん長い間、その本を探しておられたようですねえ」
笑って、空栗荘の大家は言った。
「そう、探していた。長い、長い間」
「でもこれでもう、心残りはなくなりましたね」
「いかにも心残りはもうない。これで……これで、やっと」

最後の言葉は、空気にふわりと混じり込んだ。
――やっと、戻れる。
え、と太一は呟いた。
ぱたり。
本が落ちた。たった今まで老紳士が座っていた、ソファの上に。
最初から誰もそこにはいなかったかのように、老紳士は消えた。フロックコートに身を包んだ厳めしいその姿も、ソファの背もたれに立てかけてあったステッキも。瞬きひとつのうちに。
（えっと……？）
三つばかり呼吸をしてから、ようやく太一はぽかんとした。
隣に座っていた修二郎が、「おや、しまった」と呟く。
「帽子を返すのを忘れてしまいました」

団欒室のドアが開いて、お露さんが顔をしかめて入ってきた。手に、湯呑みを載せた盆を持っている。
「もう少しゆっくりしていきゃいいものを。せっかく茶を淹れたのに、無駄になっちまったじゃないか」
大丈夫ですよ僕が二人分飲みますからーなどと言いながら、柊二郎は立ち上がると、落ちた

本を拾い上げた。
ぱらぱらと本をめくって、
「ようやくこれで本も完成、……というより、元通りになったわけです」
あの、と太一は声をあげた。
「何でしょう、太一君」
「……人間じゃなかったんですか？」
「人間がこんなふうに消えたら、大事です」
「……じゃ、妖怪？」
「はずれ。残念ながらちょっと違います」
「言霊さ。そうだろう？」
テーブルに盆ごと湯呑みを置いて、お露さんが素っ気なく言うと、柊二郎は大きくうなずいた。
「はい。大当たり」
「コトダマって」
わけがわからずに繰り返した太一に、お露さんは肩をすくめて、
「言葉や文字によほどに強い想いがこもると、そいつは命を宿して言霊という妖かしになっちまうんだよ」

（強い……想い？）

それはたとえば、器物が魂を宿して付喪になるようなものだろうか。アカネのように。太一がいつか見た、でんでん太鼓のように。

太一はまだ半信半疑で、老紳士が座っていたソファを見つめた。

「じゃあ、あの人は言葉や文字が人間に化けてたんですか？　……俺、絶対に人間だと思ってて……父親の話だってしていたし」

「言霊も付喪も、人間にうんと近いところにいるモノたちだ。他の妖かしたちと違って、最初から人間そっくりに姿を真似ることだって不可能じゃないさ。アカネにしたって、他人が見たら人間の女の子としか思わないだろうよ。――おや、しまった。そういえば、あの子の封印を解くのを忘れていたよ。今ごろおかんむりに違いない」

怒ってガラスケースをぶち壊さなきゃいいけどね、やれやれ……とぶつぶつ言いながら、お露さんは部屋を出て行った。

「はい、太一君」

柊二郎は本を開いて、太一の前に差し出した。

「これがあの人の正体です」

（あ……）

受け取って、太一は目を瞠る。

本の最後の頁。空白になっていたはずの、その部分に。
文字が綴られていた。
活字ではない。ペンで書いた直筆だ。右上がりのクセのある、四角張った字だった。

『　ありがとう。良江。ありがとう。ありがとう。

田代正太郎　』

「これが……？」
ええ、と柊二郎はうなずいた。
「消えてしまっていたその文字が、彼です」

「どうにもこの田代氏というのは、無骨な人だったみたいですねぇ」
柊二郎はしみじみと言った。
「名士で資産家でしたっけ？　地位も金もいくらでも持っていたはずなのに、愛する妻に大切な言葉のひとつも伝えられなくて、わざわざこんな本をつくってしまうんですから。『ありがとう』なんて、一言口にすればすむことだったでしょうに。多分、一生に一回も、奥さんに言

うことができなかったのでしょうね。不器用というかなんというか」

まあ、男としてそういうのはわからないでもないですけどねと、遠い目をして呟く。

「本の中身もね、自分の日記の中で奥さんについて書かれた部分だけ、抜粋してあるみたいですよ。奥さんがこんなことを言って笑ったとか、二人で庭に咲いた花を見たとか、日常のごく他愛ないことや会話を、田代氏は几帳面に書き留めていたんですね。淡々と書いてありますけど、いつもちゃんと奥さんを見ていたってことでしょう」

それが、想いというものなのだろうか。

柊二郎の話を聞きながら、太一はじっと最後の頁を見つめていた。

ありがとう、の文字を。

――妻はよろしかったのですねと言った。

最後の日記に書かれていた文章。

良江という人は、この最後の頁を読んで、微笑んで逝った。

（よかった……）

言葉は伝わったのだ。きっと。

「しかし、こうなるともう、本というより恋文ですねー。そりゃこっ恥ずかしくってタイトルなんてつけられませんよ。ほんっと奥さんを愛していたんですねえ。その『ありがとう』の部分なんて、口に出せなかったぶん、もう気持ちがこもりまくっちゃって」

柊二郎は湯呑みを取って、茶を一口飲んだ。
「しかもそこだけ手書きですからね。おかげで、その数行が言霊の妖かしに化け、本から抜け出てしまったんです。で、その頁だけ空白になってしまったと」
太一は顔をあげて、大家を見た。
「抜け出てって、……どうして？」
「そりゃあまあ、命を持ってしまったからには、一カ所にじっとはしていられなかったんでしょう」
「でも、だったらどうしてもう一度この本を探していたんですか？」
「そこが居るべき場所だから、とでも言いますかねえ。字として生まれた言霊だから、最後は字に戻らなければならない。彼らはそういう妖かしです。――ところがもとに戻ろうとした時には、田代氏はすでに亡くなっていて、本もどこかへいってしまっていたんでしょう。それで、探していたんです」
「じゃ、父親って言っていたのは」
「田代氏が生みの親であることに間違いはありませんし。――でもね、それだから彼は、自分であちら側に行くことができなかったんですよ」
「え……？」
「言霊は人間の思念から生まれて、人の『気』を強くおびてしまっているモノです。むしろ人

間よりも、妖怪と交わることは難しいかもしれません。それで僕のところに来たんです」
「――大家さんは、もしかして最初からあの人の正体を知っていたんですか？」
まあなんとなく、というのが柊二郎の答だった。
「多分、見た目は生前の田代氏の姿をそっくり真似ていたのでしょうけどね。でも彼は、そこに座っていてもコートを脱がなかったでしょう？」
「あ、はい」
「あのコートの中は、多分カラッポだったんだと思います。本当に見た目だけで、中身までは真似できなかったんです。だからコートは、脱ぎたくても脱げなかった」
（そうだったのか）
太一はそっと本を閉じた。
――ああ、本などいらなかったのだ。
そんなことに、最後の最後に気づいた。この本をつくった田代正太郎という人物は。
巨匠の絵も、最高級の和紙も、本当は必要なかった。――奥さんにとっては、ありがとうの一言だけで、きっともう十分で。
十分、想いは伝わって。
「この本、どうするんですか」
柊二郎は太一の手から本を取って、うーむと考え込んだ。

「お礼に僕にくれるって言ってましたから。ここの団欒室の本棚に置いておきましょうか」
「お宝じゃないんですか？」
地下鉄での柊二郎のはしゃぎっぷりを思い出して、太一はちょっと意地悪かなと思ったけど、言ってみる。
「お宝ですよ」
すました答が返った。
「言霊の棲む本。僕にとっては、そういう価値です。——ああ、ミヨシ君にうっかりこの本を祓ったりしないように言っておかねば」
それ以前に読書なんてするタイプじゃありませんけどね彼はー、などと呟きながら、柊二郎は本を棚に差し込んだ。
「こういうラブラブなものを読むのは、やっぱり女性でしょーかね」
「古都子さんですか？」
あまり恋愛小説なんて読むタイプには見えないけど、と太一が思っていると、
「お露さんだって女性ですよ。一応」
当人が聞いたら張っ倒されそうなフォローを、柊二郎はした。
「ところで、太一君も気をつけたほうがいいですよ」
「え？」

「想いのこもった手紙やなんかは、ある時突然言霊に化けて、逃げ出しちゃったりするかもしれませんから。そうならないよう、用心用心」
　空栗荘の大家は、茶目っ気たっぷりに言って、笑った。
「大丈夫です。俺、そんな手紙もらったことありませんから」
「おや、そうなんですか？」
「はあ。……うわあっ？」
　いきなりだった。背中にどかっという衝撃を感じて太一はうつ伏せに床に転んだ。
「たいちたいちたいち――！　おんぶっ！」
「……」
　アカネが背中に乗っかっていた。
「おや、アカネちゃん。今日も元気ですね」
　柊二郎がニコニコと付喪の少女に笑いかける。
「べーっだ。アカネは柊二郎なんか嫌いだもん！」
　これはもちろんガラスケースに閉じこめられたままだったことを根に持っているからで、アカネは可愛い顔をくしゃくしゃにして、柊二郎に舌を出した。
「あはは。アカネちゃん、そのままじゃ太一君が立ち上がれませんよ。それじゃまるで、おんぶお化けです」

「アカネはそんなお化けじゃないもん！」
アカネはぷんぷんして、太一の背中から降りた。
「いてて……」
「太一、遊ぼーっ」
ようやく身体を起こした太一に、付喪の少女はきゅっとしがみつく。おかっぱの毛先が頬に触れて、くすぐったい。
「あのさ、アカネ。頼むから『おんぶ』は先に一言、言ってからにして」
「うんうん。ねえ太一、だるまさんが転んだ、しよ！」
「えっと、二人でだるまさんが転んだは、ちょっと無理っていうか……」
「じゃ、通りゃんせ！」
「もっと無理。つか、不可能」
もごもご言っている太一の手を引っ張って、アカネは団欒室から駆けだして行った。

二人が部屋を出て行ったあと、床に赤いリボンが落ちているのを見て、柊二郎は「おや」と呟いた。クッキーの袋に結んであったこのリボンは、どうやらアカネのお気に入りになったらしい。このところ姿を見せる時には、いつも頭につけて出てくる。
多分それが、さっき太一に飛びついた時に、ほどけて落ちてしまったのだろう。

柊二郎はリボンを拾い上げると、目の前でふらふらと揺らした。
「……君があの言霊の妖かしを人間だと思ったのは、あれが人の大切な『想い』そのものだったからですよ、太一君」
誰もいなくなった部屋で、空栗荘の主は呟いた。
「あの本にこめられた想いにちゃんと気づいたところまでは、上出来だったんですけど。……いざ自分のことになると、なかなかうまくいかないようですねぇ」
少しだけ切なげにそんなことを言って、柊二郎はリボンをそっとテーブルに置いた。

ところで。
余談であるが後日、大家が言うところのラブラブな『言霊の棲む本』を愛読したのは、十遠見だった。自称拝金主義者の彼が、実は恋愛小説マニアのロマンチストでもあるというのは、今のところ誰も知らないことである。

二章　帰り花と忘れ音の時

1

「阿川君！　お願いがあるの！」
放課後。帰り支度をしている太一のところに、采奈が何やら思い詰めた顔で近づいてきて、言った。
「手形とらせて！」
「……は？」
手形？
ぽかんとした太一の目の前に、墨汁の容器がにゅっと突きだされた。
「これを塗って、紙にぽんと押すだけでいいから。でもって、理由は訊かないで。お願い！」
「ええぇ？」
理由を訊くなと言われましても。

「俺の手形なんて、どうするの？」
うっと栄奈は呻いた。
「それは、あのそれは……し、資料にするの。今書いてる小説の」
わたわたと手を振りながら言う。蓋が閉まっているとはいえ、持っている墨汁がこぼれたりしないか、見ていてハラハラする。
「たとえばっ。主人公が女の子の場合好きな男の子と握手したり手を繋いだりする場面があった時にその子の手がどれくらい大きいとかあったかいとかやっぱりディテールは大切でそれがないと嘘くさくなっちゃって書いたやつ何も知らないんだなとか読み手に思われちゃったらもうアウトっていうかっ」
すごい。息つぎなしでそれだけ言った。
（でも、手の大きさはともかく、あったかいとかは手形じゃわからないと思う）
「だ、ダメ？」
栄奈は墨汁の容器を握りしめて、太一を見上げる。
（あ、そっか）
太一は合点がいった。こないだバスの中で、栄奈がじっと彼の手を見ていたのは、太一の手の大きさを知りたかったからだ。
「別にいいけど……墨じゃなきゃダメなの？」

「あ、絵の具のほうがよかった？」
「そうじゃなくて。手の大きさがわかればいいなら、コピー機使えばいいんじゃないかな」
言ってみたら、采奈は「あ」のかたちに口を開いた。
「あああぁ、そっかあ――！　コピーとればいいんだ！　墨を塗ったら魚拓になっちゃう――!?」
魚ではないので、魚拓にはならない。
とりあえず、一緒に帰って途中のコンビニでコピーをとることになった。

「んんん、やっぱり思ったよりも大きい。手形とって正解」
太一の「手」をコピーした紙をまじまじと見つめて、采奈はぶつぶつと呟いている。くりくりした目が、怖いくらい真剣だ。
「……あのさ、和泉」
「あ、指、けっこう長いんだ」
「あの……」
「うーん。だったら模様はもっと増やしたほうがいいのかな。ううーん。それともいっそ無地でシンプルなほうが――」
寄ったのは地元のコンビニだった。自分で言い出したこととはいえ、紙ではないものをコ

ピーするのはなんだかヘンな感じで、太一はいけないことでもしているみたいに、思わずあたりを見回してしまった。おまけに采奈がそのままコピー機の前から動かないものだから、店員がさっきからちらちらとこっちを気にしているのがわかる。

「和泉ってば」

「とにかく。これさえあればカンペキ！」

采奈はぐっと拳を握ると、紙を大切そうにノートにはさんでカバンにしまった。

で、ようやく気づいたように、

「あれ？」

まわりを見回して、赤面した。

「ご、ごめん、阿川君」

「いいけど」

「お礼に、スペシャル肉まんおごるね！」

「べつに……お礼なんて」

「もしかしてピザまんのほうがいい？　あ、それともおでんのほうが好きとか？」

結局、太一は肉まん、采奈はピザまんを選んで、賽河原町行きのバスを待つ間、バス停のベンチに腰を下ろした。

「そういえば、阿川君と一緒に帰るのって初めてだね」

湯気のたつピザまんに幸せそうに齧りつきながら、栄奈は言った。

「うん」

方向が同じなのだから帰りも一緒になりそうなものだが、学校が終わるとすぐに帰る太一と違って、栄奈のほうは放課後も残って他の女子とおしゃべりをしていたり、仲の良い友達とどこかの店に行ったり、所属している文芸部に顔を出したりと、何かと忙しい。確かに、こんなふうに二人で帰るのは初めてだ。

「これ、おいしー！　あったかーい。ふかふかっ。阿川君のは？」

「うん。……おいしい」

「阿川君は、冬休みはいつ頃家に戻るの？」

一瞬、肉まんが喉につまりそうになった。

「どうして？」

「え、だって。お正月は普通、家族と過ごすでしょ？」

「……考えてないっていうか……まだ」

多分、家には帰らないだろうと、太一は思う。年末も、正月も。

年の暮れに他の住人たちが帰省するかどうかは聞いてないけど、大家とお露さんは空栗荘に残っているだろうし、タカハシさんは確実にいる。休みの間、太一だけ追い出されることはないはずだ。

家のことを思い出すと、息がつまりそうになる。啓介も、きっと無理に帰って来いとは言わないに違いない。

「ほら、休みまでにまだいろいろやることあるし。期末テストとか」

そう言ったら、采奈はうなずいて、そうだよねテストあるよね、と大きなため息をついた。

バスはなかなか来なかった。時間よりも遅れているみたいだ。

肉まんを食べ終えて、太一は足下に置いたカバンを見た。

（やっぱり……和泉に訊いてみようかな）

実はカバンの中に、例の「鈴子さん」のクッキーが入っている。

（すごく、バカバカしい気がするけど）

柊二郎は「学校の友達にでも食べてもらえばいい」と言った。半分くらい冗談ぽい。だから、こんなふうにわざわざクッキーを学校に持ってくるのも、実際に采奈に訊いてみることも、本当をいえば太一は迷ったのだ。采奈が手形のことを言い出さなければ、きっとこのまま持ち帰って、彼女には何も言わないで終わったと思う。

（わざわざ訊かなくても、絶対にまずいにきまってる。固いし甘すぎるし）

こんなことにこだわっている自分はヘンだと思う。

気にするほどのことじゃないと、一度は思ったのに。あの日の十遠見や古都子との会話で一瞬感じた不安が、相変わらず小さな棘みたいに、今も胸の中でちりちりしている。

——不安なんて、感じたくない。空栗荘は太一にとって、ただひとつの居場所だから。あそこの住人たちは、外の人間たちと違っていつもきっと自分を受け容れてくれるのだと、信じていたいから。

「あのさ。ちょっと訊きたいんだけど……」

「ふぐぅ?」

ピザまんを頬張っていた栄奈は、その最後の一口を慌てたように飲み込んだ。太一に向かって、身を乗り出す。

「うん。なになに?」

「……たとえばさ、俺がまずいって思うものを他の人がおいしいって言うのって、どういうことだと思う?」

栄奈はきょとんとしてから、

「うーんと、好き嫌い? 私は、ええっと、ネギがダメかな。味とか匂いも苦手なんだけど、ネギって熱々のを口に入れると、時々中身が飛び出してきて火傷しそうになるでしょ? ネギが料理に出てくるともう泣きそうになるよ。でもうちのおばあちゃんは、冬の鍋はネギが一番おいしいって言うんだよね」

「あ、うん。……クッキーだったら?」

「えー、クッキーはおいしいよ? 阿川君はクッキー嫌いなの?」

そうじゃなくて、と太一は口ごもった。
思い切ってカバンを開けて、中からクッキーの入ったビニール袋を取り出す。采奈は目をぱちくりとさせた。
「ええっ、どうしたのこれ⁉」
「これは――」
言いかけて、そのまま言葉につまった。
なぜか、采奈に「鈴子さん」のことは言いたくないと、急に思ってしまった。父親が再婚したことや、その再婚相手のこと。母親は太一が九歳の時に父と離婚して、家を出て行ったこと。太一が空栗荘で下宿生活を始めた理由。――どうしてだか、そんなことは采奈には知られたくないと思った。
両親の離婚も再婚も、太一にとってはそれこそどうでもいいことだったけれど、采奈はそうは思わないかもしれない。何しろ、ある人たちにとっては、太一は「かわいそうな子」らしいのだ。「母親がいなくてかわいそうに」という言葉を、太一は親戚や近所のおばさん連中の口から何回か聞いた。自分がなぜそんなふうに他人に憐れまれるのかさっぱりわからなかったから、その時は何とも思わなかったけれども。
采奈に彼らと同じ目で見られるのは、イヤだ。
（……どうしてなのかな）

太一はそっとため息をついた。
采奈には言えないことが、どんどん増えてゆく。
「あっ、わかった――！」
引っ込みがつかなくなって太一がまごまごしていると、采奈が声をあげた。
「それ、阿川君が焼いたんでしょ？」
「え」
「で、自分では失敗したかもって思って、自信ないんだ？　うんうん、わかる、そういうのって」
「……う、うん」
ひょいと横から太一の顔をのぞき込んで、采奈は無邪気な笑顔だ。つられるように、太一はうなずいた。どのみち、他に言い訳は思いつかない。
「すごい、阿川君。料理とかつくるの好きなの？　あ、もしかしてあの人の影響？　えっと、十遠見さんだっけ。ケーキ焼くのが上手な人」
「え、まあ」
「ねえ、私も食べたい！　いっこもらっていい？」
うなずいて太一が袋を差し出すと、采奈はさっそくひとつつまんで口に入れた。
「固いだろ？」



「平気。私、歯は丈夫だから」
「甘すぎるし」
「甘いの、好きだもん」
采奈は頬を膨らませ、しばらくもぐもぐしていたが、どうにかこうにか飲み込んだ。そうして、えへっと笑った。
「おいしいよ」
「……」
太一は彼女を見つめた。
「大丈夫。全然オッケー」
「これが？」
まさか、本当においしいわけがない。なのに采奈は、
「もっと食べていい？　わぁい」
嬉しそうに、さらにクッキーを頬張った。どうやら、嘘じゃないみたいだ。
「おいしいの？　本当に？」
「うんっ。だって阿川君が、頑張ってつくったんだもん」
（あ……）
――問題は味じゃないんじゃないですか。

柊二郎の言葉を思い出した。そのとたん、太一の胸の中に得体の知れない苦いものが広がった。

多数決だとか、本当はおいしいかまずいかとか、そういうことじゃない。

栄奈はこのクッキーを太一が焼いたものだと思うから、「おいしい」と言ったのだ。それくらいは、太一にもわかった。

柊二郎の言ったことが、少しだけ、わかった。

「え、あれれ、阿川君？」

太一はクッキーの袋を摑むと、いきなりカバンに押し込んだ。

「ごめん」

目を丸くしている栄奈に言った。

「今度、もっとちゃんとしたの持ってくるから」

自分がつくったことになんか、しなきゃよかった。

嘘なんか、つかなきゃよかった。

胸の中の苦いものを噛みしめるように、太一は唇を噛んだ。

栄奈がこんなことで喜ぶなんて、思わなかったのだ。考えていたのは、自分のことだけだった。

「わぁ、本当？　約束だよ。次も絶対に味見させてね！」

采奈は笑うと、ぴょんとベンチから立ち上がった。
「あ、バス来た！」
だいぶ時間に遅れて、ようやく賽河原町行きのバスが到着した。

空栗荘に帰ると、太一はクッキーを袋ごと、送られてきた宅配の箱に入れて本棚の一番上に載せた。「鈴子さん」の素っ気ない手紙も一緒に中に入れた。
捨ててしまおうかとも思ったが、さすがにそれは気が咎めたので、せめて見えないところに置いておくことにした。
――もう忘れよう。考えるのはよそう。
気にするようなことじゃないんだと、今度こそ太一は自分に言い聞かせた。
ぐずぐずといつまでもこだわっているから今日みたいに、采奈に対してささやかな罪悪感を抱いてしまったように、おかしなことになるのだ。
モヤモヤした気分も小さな不安も、このまま忘れてしまえばいい。そうすればきっと、空栗荘での彼の生活は、これまでどおり平穏で気楽なものになるはずだった。

2

十二月になると、学校の空気もなんとなく落ち着かないものになる。期末テストが近いからだ。

各教科の範囲が発表されて、部活も休みになると、太一のクラスでも休み時間に教科書を広げたり単語の暗記を始める生徒が出てくる一方で、「どうしよう、全然勉強してない～」「私も私も」といったおさだまりの会話が飛び交うようになった。

太一もこのところ、夕食後は一応真面目にテスト勉強に取り組んでいる。

ずば抜けて点数がいいわけでもないけど、平均点を下回ることもない。得意科目もないが苦手科目も特にないという、要するに「かろうじて中の上くらい、一番目立たないランク」というのが、太一の成績だ。

アカネには「テストが終わるまで遊べないよ」と言ってある。付喪の少女はちょっと拗ねながらも、勉強している太一の後ろで一人でクレヨンで絵を描いたり折り紙をしたり、でもやっぱり時々は太一にまとわりついて困らせたりした。

そんなふうに十二月の毎日がゆるゆると過ぎていって、そしてある日。

太一は、風田レンとケンカをした。

その日はたまたま夕食の時に、住人のほぼ全員――つまり、大家とタカハシさん以外――が食堂に顔を揃えた。普段は仕事で戻るのが遅くなったり、部屋にいても食事をとる時間はまちまちだから、同じ時間帯にみんなが集まるというのは珍しいことだ。

夕食の献立はアジの南蛮漬けに具だくさんのけんちん汁、ポテトサラダ。南蛮漬けは甘酸っぱくてピリっと唐辛子がきいていて、骨まで食べられるほど柔らかい。けんちん汁もポテトサラダも、よくある料理なのにお露さんがつくると魔法のようにおいしい。

で、その夕食の最中に、例によってミヨシと十遠見が言い合いを始めた。

「――せやから、あの世とアンドロメダ大星雲やったら、絶対にあの世のほうが遠いにきまっとる！　アンドロメダは、見ようと思うたらこの目で見ることもできるんやし、宇宙船さえあれば人間もいつかは行けるかもしれへん。けど、あの世は死なんことには絶対に行かれへんやろ！」

ミヨシが、がつがつと口いっぱいにご飯を頬張りながらわめけば、

「逆に言えば、あの世は死ねば誰でも行けるということだ。２３０万光年も離れた場所に、人類が必ず到達できる保証はない。少なくとも私やおまえにとっては、宇宙の彼方よりもあの世のほうが、はるかに近いわけだ」

いかにも上品な箸使いで南蛮漬けをつまみあげた十遠見が、メガネの銀縁をきらりと光らせ

て応酬する。
「アホ。俺が言うとるのは距離のことや。アンドロメダと地球の間に、あの世があるんかい。地獄や極楽が望遠鏡で見えるんか⁉」
「なんとまあ、寺の息子にあるまじき発言だな。信心が足りないんじゃないのか。親が泣くぞ」
なんか、傍で聞いているとしょうもない議論である。もっとも太一の知るかぎり、ミヨシと十遠見はいつもたいてい、つまらないことでケンカをしている。
「……なんで言い争いになったんですか？」
隣にいる古都子に太一がこそっと訊ねると、
「んー、いつものことよ。もう一年くらい、二人で同じことを議論しているの。で、いつも決着がつかないわけ。……だって、あの世とアンドロメダ星雲とどっちが遠いかなんて、誰にも答えられるわけがないんだし」
古都子はケロリとして、ポテトサラダを口に運んだ。
「でもどうして、アンドロメダ……？」
「べつに、北極星でもプレアデス星団でも褌奪い星でも、なんでもよかったんじゃない？あの二人はケンカするネタが欲しいだけだもの」
くすくすと古都子は笑った。

（……褌奪い星……って、なに？）

太一としては、そのネーミングのほうが気になる。ちなみに、蠍座にある星の名前だ。

そのあとひとしきり、深遠なのかくだらないのかわからないテーマの口論をつづけたあげく、急に飽きたのか、ミヨシは話題を変えた。

「ところでおまえ、暮れと正月はどないすんねん？」

「例年通り、ここで待機だ。暮れは暮れで、雑用で駆り出されることが多いからな」

「へぇ。ま、国民の皆さんの税金で食わせてもろとるんやし。頑張れや、公僕」

「ろくに税金を納めてなさそうなヤツに言われたくはない」

涼しい顔で切り返した国家公認術者に、うっさいわ、とミヨシは毒づく。

「そういうミヨシこそ、たまには家に帰ったら？」

古都子が空になった食器を脇に押しのけて、ちょっとお行儀悪くテーブルに頬杖をついた。

「アホ言うな。盆暮れ正月に寺に帰ったら、ただのワーキングホリデーやないか。ヘタしたら実家におる間中、寝る間もないくらいこき使われるわ。前は大晦日いうたら、除夜の鐘も俺がついとったんやで」

「わー、煩悩が落ちるどころか、逆に増えそう」

「どういう意味やねん」

あーあ、と古都子は笑いながらため息をついて見せた。

「そうすると、今年も代わり映えしない顔ぶれで年越しってことね」
「そういうたら、おまえ――」
言いかけて、ミヨシはすっくと立ち上がった。何をするのかと思えば、ご飯のおかわりだ。ついでに、カウンター越しにお露さんにけんちん汁のおかわりも頼んでいる。どちらも三杯目だ。
で、ご飯茶碗とお椀を両手に持って席に戻ると、ミヨシはつづきを口にした。
「今年は帰省するて言うてへんかったか？」
「そのつもりだったけど、うちの親、今年はグアムで年越しですって。帰ってこなくていいって言われちゃった」
「うぉ、グアム⁉　もしかしておまえんとこの親、大金持ちか？」
「今日び、グアムに行く程度で大のつく金持ちという発想はどうかと思うが」
十遠見が呆れたように鼻を鳴らす。
（なんだ、みんな正月も空栗荘にいるんだ）
太一はちょっとホッとした。でもこの会話の流れは、なんとなくヤバい。
本当はご飯をおかわりするつもりだったけど、やめにする。早いところ食事を切り上げて、試験勉強を理由に部屋に引き上げようと、急いで口を動かし始めたとたん、
「太一は家に帰るんやろ？」

やっぱり言われてしまった。

「いえ……帰らない、です。帰って来いとも言われてないし」

「そうなんか」

冬休みになったら当然、家に帰ると思われていたらしい。ミヨシの怪訝な声と、他の住人たちの「おや？」という視線に困って、太一は口ごもった。

「父は再婚して初めての正月だし……夫婦水入らずのところを邪魔しても悪いかな、とか思うし……みんながいるんだったら、俺も正月の間ここにいようかなって」

家に帰って『家族』に気を遣って適当に会話をあわせて、まずい食事を我慢して、そんなふうに息苦しくて疲れる時間を過ごすよりも、空栗荘にいたほうがずっと気楽だ。

みんなの前で口にしたことで、太一はあらためて決めた。

（年末も正月も、家には帰らない）

ここの住人たちと一緒にいる時間のほうが、暖かくて楽しい。だったら、無理して嫌なほうを選ばなくてもいいと思う。

「アホ。なんてことを言うんや！」

いきなり、ミヨシにじろりと睨まれた。もともと顔が怖いので、睨まれるとさらにおっかない。

「え……」

「正月に帰らへんかったら、お年玉をもらわれへんやろ！」
「お、お年玉？」
人生の一大事のように言われて、太一はぽかんとする。
「そう、お年玉は大切だ。何しろ不労所得だからな。働かずして金を得られることがいかに素晴らしいか、大人になれば身にしみてわかる。私も、もしお年玉がもらえるのなら、有給休暇をとってでも正月に家に帰りたいくらいだ」
有給休暇というあたりが、いかにも十遠見である。
「十遠見さんまで」
大の大人が二人して、大真面目にお年玉にこだわっているのが、ちょっとおかしい。
呆れた、とやっぱり頬杖のままで古都子が言った。
「二人とも、子供じゃあるまいし。大人の正月の醍醐味ってものを忘れてない？」
「何やそれ」
「きまってるわ。箱根駅伝よ！」
高らかに言い切った古都子に、ミヨシがなんでやねん、と脱力したように呟く。
（知らなかった……。ハコネのファンだったんだ、古都子さん）
ともあれ、よかったと太一は思った。
太一が休みの間も空栗荘に残ることについては、すんなりと受け容れてもらえたみたいだ。

ミヨシがお年玉のことしか言わないのは、それ以上の問題はないということだろう。あれこれ詮索されたり反対されたりしたら、どうしようかと思っていた。

「お年玉は生活費と一緒に送ってもらうって手もありますから。……じゃ、俺、試験の勉強があるので先に部屋に戻ります」

食器を載せたトレイを持って、立ち上がろうとした時だった。

それまでずっと黙っていたレンが、口を開いた。

「家に帰ったほうがいいと思うよ」

「え？」

太一は驚いてレンを見た。トレイを持ったまま、思わずまた座り込んでしまった。

レンは目を伏せたまま、箸を動かしている。他の住人たちはもう夕食を終えているというのに、食欲がないのか、それとも途中で手を止めていたのか、ずいぶん時間をかけて食事をしていた。

――そういえばレンが年末年始をどうするのか、誰も訊かなかった。それは、訊くまでもないことだったから。

植物と意思の疎通ができるほど感応力の強いレンは、他人の心の中の痛みまでも、ダイレクトに感じ取ってしまう。辛い苦しい悲しい……彼の中に流れ込んでくるそんな人間の負の想いは、実際に「痛み」となってレンを苦しめる。

おかげでレンは、人の大勢集まる場所にはいられない。太一と年がひとつしか違わないのに学校に行っていないのは、おそらくそのあたりの理由もあるからだろう。柊二郎が暗示をかけたとかで、今はとりあえず普通に生活しているが、暗示の効力があるのは賽河原町にいる時だけ。つまり帰省するどころか、彼はこの町から外に出ることもままならない。

「君は家に帰るべきだと思う」

いつも穏やかで優しい眼差しのレンが、今は目をあげて太一を見ようとはしない。さっきよりもきっぱりと、繰り返した。

「……どうして？」

やっと、太一は言う。

他の住人たちは口を閉ざした。食堂の空気がいきなりぴりっと張りつめて、そのままゆっくりと温度が下がってゆくように、太一には感じられた。

「なんか言い訳してたけど、本当は君は、ここに逃げていたいだけだから」

「――」

太一は息をつめた。レンの口調は柔らかかったが、言葉は錐のように尖っている。数秒の時間差をおいて、それが胸にずきりと刺さった。

逃げていたいだけだから。ここに。空栗荘に。

「それ、どういう意味……？」

舌が重く粘りつく。

「君がここに越してきた時、お父さんも一緒にいたよね。お父さん、君のことを心配していた。心がものすごく痛かったんだ。でも君は、そんなことに全然気づいていなかった。まるっきり無関心みたいだったから、ヘンだなってあの時思ったんだ」

レンはようやく目をあげた。何かを決意しているような、硬い顔を太一に向けた。

「君は他の人のことなんか、何も見てないよ。見てないくせに、都合のいいようにばかり考えている。それで何かうまくいかなくなると、全然考えようともしないで、仕方がないどうでもいいって投げ出すんだ。お父さんのことだって、あの時どうでもいいやって思っていたんだろう？　――でもそういうのって、おかしいよ」

太一は頭の中が真っ白になった。指が震えて、トレイを持つ手に知らずに力がこもる。

なぜレンがこんなことを言うのだろう。

年が近くて、すごく仲がよくなったわけではないけれども、クラスの連中よりもよほど気軽に話ができる相手。太一が知るかぎり、レンはいつも優しい空気をまとって、おっとりと静かに笑っているような人間だった。

なぜこんなことを言うのだろう。

……なぜ。こんなことを言われなければ、ならないんだ？

心臓が沸騰したように激しく音をたてていた。それと一緒に何かが――熱をおびたどす黒

いものが、ざわざわと太一の胸の中に広がっていく。これは何だろう、一体？

「俺が休みの間、ここにいるのはダメってこと？　他の人たちはいいけど、俺は帰れっていうわけ？」

「そんなこと、言ってないよ」

「じゃ、何だよ。全然、意味わからないし」

ざわ、ざわ。黒い塊はいっそう熱をおびて、膨れあがる。胸を灼いて、喉もとまでこみあげてくる。

「おかしいって何？　父さんのことは、レンさんには関係ないだろ⁉」

レンはぎゅっと唇を結んだ。それから、大きく息を吐き出すように、言った。

「痛いんだよ。君の中に傷があって、そばにいるとそれがすごく痛いんだ。何がそんなに怖いの？　何から逃げてるの？　自分で何も気づこうとしないで、見たいものしか見ないで、ここにいたらそのままでいられるから気が楽だなんて、おかしいだろ。そんなの、君にちゃんと関わろうとしている人間に対して、すごく失礼だよ」

ぐらぐらと目の前が揺れた。黒い塊は、今にも堰を切って口からあふれ出そうとしていた。

思い出した。焼けつくような目がくらむようなこの感情は——怒りだ。もう長い間、太一はこんなふうに誰かに、何かに怒りをおぼえることも忘れていたのだ。

「——なんだよ、それ。だったら、そばにいなきゃいいだろ！　わけわかんないよ。もしか

して、他人の感情だけじゃなくて、頭の中で何を考えているかまで全部読めちゃうわけ⁉　それであああしろこうしろって、いちいち他人に指図してんのかよ！」

違うよ、とレンは苦しげに言った。蒼白な顔で、痛みをこらえるように胸のあたりを手で摑んでいる。

「だいたい、人のことを言えるのかよ！　自分だって――」

ダメだ、と頭の片隅で叫ぶ声がある。顔も目も喉も熱くて、自分の心臓の鼓動がうるさくて、何も聞こえなくて考えられないのに、頭の中の一部分だけが妙に醒めていて、これ以上は言うなと自分に向かって叫んでいる。

「自分だって、ここに逃げ込んだんじゃないか！」

違う。

レンの事情は、太一とは全然違う。望んでも望まなくても、レンは空栗荘でしか暮らせない。賽河原町にしかいられない。ここにいなければ、他人の「痛み」に押し潰されて、いつかきっと壊れてしまう。

そんなことは、太一にもわかっているのだ。

なのに止まらない。言葉が。

相手を傷つけてやりたいという残酷な衝動と一緒にあふれて、止まらない。

「他人に、そんなふうなことを、言うから」

ダメだ、ダメだ、ダメだ、言っちゃダメだ！
「そんなふうだから、レンさんは、他の人間から――」
ダメだ！　やめろ！
その時いきなり、怒鳴り声が響いた。
「ちょっとあんたたち、何をしているんだい⁉　長居したってかまわないけどね、空になった食器は先にカウンターに持ってこいって、何度も言っているだろう。いつまで経っても洗い物が片付きゃしないよ、まったく！」
見ればお露さんが厨房からカウンター越しに、怖い顔をして食堂にいる面々を睨んでいた。
「――」
言葉のかわりに、太一は喘ぐように息を吐いた。何度も。
立ち上がると、手にしていたトレイをカウンターに突っ込むように置いて、振り返りもせずに食堂を飛び出した。

「アホか。何しとるんや、おまえは」
太一の足音が遠ざかるのを聞きながら、ミヨシがため息まじりに言った。
すみません、と小さな声で言って、レンはまた箸を動かし始めた。
「謝ることやないけどな。――ほとんど食うてへんやないか。嫌いなんか、南蛮漬け？」

「いえ。そんなことないです」
箸を持つレンの手がかすかに震えていた。血の気のない顔のまま俯いて、さっきよりも小さな声で言う。
「ケンカなんて、初めてしました」
「そらそやろ」
目の前を通り過ぎて行くだけの、赤の他人の想いまで感じ取ってしまうのだ。自分に対して怒った相手がぶつけてくる激しい感情は、レンにとってはその何倍ものダメージであるに違いない。
ミヨシはレンを横目で睨むように見ていたが、がしがしと自分の頭を掻くと、立ち上がって席を移った。テーブルをはさんでレンの正面に、腰を下ろす。
「太一か。あいつがそばにおったら、食欲も出ぇへんくらい痛むんか」
「……痛いのもそうなんですけど、彼のはもっと複雑な感じで……重いような息苦しいような、なんだか胸よりも胃のあたりが、冷たい手でぎゅっと摑まれるみたいになるんです」
そう、と呟いたのは古都子だ。考え込むように首を傾げて、
「太一君のは、そういう痛みなんだ」
「彼のそばにいると、時々それを強く感じて。でも僕は黙っていようと思っていました。我慢できないことじゃないから。……彼だってきっと言われたくないと思ったし」

「なら、なんで言うたんや」
「それは……」
レンは唇を噛んだ。ついに諦めたように、箸をテーブルに置いた。
「……彼は僕のことを、ただ大人しい、いい人だって思っているみたいなんです。面と向かって言われたことはないけど、そう思ってるってことはわかります。それがイヤだったんです」
「なんで」
「僕は、いつも笑っているだけのいい人なんかじゃありません。ちゃんとそういうこと、わかって欲しかった」
だって、と消え入るような声をレンは漏らす。
「彼は最初に会った時に、他の人間みたいに僕のことをヘンなヤツだって言わないでくれたから」
ミヨシは困ったように、また頭をがしがし掻いた。
「それで無理して、またぶっ倒れたらどないするねん。こっちが迷惑や、アホ」
「……すみません」
くすっと古都子が笑った。
「またでた。ミヨシの心配性」
「なんや」

「いいんじゃない？　ダメージを受けることくらい本人が一番わかっているんだし、レンはそれを覚悟の上で、太一君とケンカしたんでしょ。倒れたら、看病くらいいくらでもしてあげるわよ。私はむしろ、レンが我慢して黙っているよりよかったと思うけど？」

「うー」

ミヨシが渋い顔で唸ると、それまでまるきり他人事の顔で食後のお茶を飲んでいた十遠見が、口を開いた。

「ケンカには二種類ある。止めたほうがいいケンカと、止めないほうがいいケンカだ。今回は後者だな。とことんやりあって、結末は感動的に、肩を組んで夕日を見るなり海に向かって相手の名前を叫ぶなりする、あれだ。――まあ、最後が少々度を超したが、お露さんがさすがに年の功で、絶妙なタイミングでフォローをいれてくれた」

「……海に向かって叫ぶって、どっちかというと恋愛物のパターンじゃない？　ケンカ相手の名前を叫んでたら、気色悪いと思うけど」

「俺はとことんおまえとやりあいたいとは思うとるがな、肩組んで一緒に夕日を見る気はないで、十遠見」

古都子とミヨシの反論のあとに、お露さんの声がつづいた。

「ふん。年の功は余計だよ」

厨房から出てきたお露さんは、レンの前に湯気のたつカップを置いた。ホットミルクだ。

「食事が食べられないなら、せめてこれだけでも飲んどきな。いつもはお残し厳禁だけど、今日は大目に見といてやるよ。食欲がない時に、無理矢理食べ物を腹におさめるのは、かえって毒だからね」

すみませんと何度目か口にして、レンはミルクのカップに手を伸ばした。

「あとで太一にも持っていってやろうかね」

「あいつは飯、食っとったろ？」

お露さんはしかめっ面で、ミヨシに肩をすくめて見せた。

「腹の問題じゃないよ。太一は太一で、ケンカの仕方なぞわかっちゃいないようだったからね。パニックを起こしてるんじゃないかね、今頃」

まったく面倒な子たちだよ、とぶつぶつ言いながら、お露さんは厨房に引き返していった。それを見送って、

「でも、そっか」

古都子が、感慨深げに呟く。

「太一君も、あんなふうに怒るようになったんだ……」

自分の部屋に飛び込むと、太一はドアをバタンと閉ざした。タカハシさんに叱られそうだが、今はそこまで気が回らなかった。そのまま、ドアに背中をつけてずるずると床に座り込む。

頭はやたらカッカしてるのに、手足は震えるほど冷たい。さっきまで荒れ狂っていたどす黒くて熱い塊が、今は胸の中で凍りついて、息が苦しいくらい鋭くて痛くて重いものになっていた。

太一は座ったまま抱え込んだ膝に、額を押しつけた。

（……俺、ヘンだ）

どうかしている。レンに対して怒りをおぼえるなんて。他人に、他人の言ったことに、腹が立つなんて。

いつもなら何も感じないで、適当に聞き流していたはずだ。

一体、どうしてしまったんだろう？

今まで、誰に何を言われても平気だった。何を言われても仕方がないんだと思っていた。自分は他の人たちと同じ感覚も感情も共有することのできない、心の中の大切な部分のネジが外れてしまっている人間なのだから。

――君は他の人のことなんか、何も見てないよ。

――全然考えようともしないで、仕方がないどうでもいいって投げ出すんだ。

そんなことは知らない。レンが何を言っているのか、わからない。

太一は膝を抱える腕にぎゅっと力をこめた。

でも、だったらなぜ、レンの言葉にあんなに頭にきたのか……。

（ヘンだ、ヘンだ、ヘンだ）

何かがズレはじめていた。

外ではうまくいかないことでも、空栗荘でならちゃんとやれる気がした。妖かしと関わる日常が、新鮮で珍しくて、危険なこともあるけど楽しくもあった。他の人間が知らない不思議なことを自分だけが知っている、そのことがちょっと嬉しかった。

何より、外の人間と違ってここの住人たちとは会話が通じる、彼らならちゃんと自分を理解してくれるという安心感があった。

なのに。

どうしてだろう。最近、みんなの言っていることがよくわからない。

（……謝らなきゃ）

ぼんやりと、太一は思った。

レンに謝ろう。きっと太一はしくじったのだ。知らないうちに、そんなつもりはないのに、何かでレンを不愉快にさせていたに違いない。きっと、いつものように。

（ごめん、俺が悪かったって言えば……）

謝ってしまえばいい。謝って、許してもらって、それで終わりになるはずだ。

よりによって他の住人たちもいるところであんな言い争いをして、もしかしたらミヨシや古都子や十遠見にも嫌なヤツだと思われたかもしれない。ここの人たちには嫌われたくない。だ

から、早く謝らなきゃ。

「――」

太一は丸めていた背中を伸ばして、顔をあげた。

照明も暖房もつけていない部屋は、暗くて寒い。怒りの熱が冷めていくにつれて、しんしんと寒かった。

その冷たい暗がりの中で、太一は歯を食いしばった。

（謝りたくない）

唐突に、自分でも驚くほど強く、そう思った。

（謝っちゃいけない）

今は、まだ。

意地になっているんじゃない。ただ今、悪かったごめんと太一が言うのは、何かが違っているような気がする。

――何かうまくいかなくなると、全然考えようともしないで

――そんなの、君にちゃんと関わろうとしている人間に対して、すごく失礼だよ。

考えよう。

うんと、考えよう。レンの言った言葉。その意味。どうしてレンがそんなことを言ったのか。なぜそれで、自分があんなに腹を立てたのか。

どうせ自分にはわからないと決めつけて、それで終わらせてしまったら、いつもと何も変わらない。変わらないままだったら、この空栗荘という居場所まで、このまま失ってしまうかもしれない。どうしてだか、そんな気がしてならない。

だから考えて、一生懸命に考えて、何かひとつでも答が出たら、レンに言おう。

ごめん、と。

彼を怒らせたことにではなく、傷つけてしまったことに。

きっとレンは気がついている。

あの時、太一が何を言おうとしたのかを。

――そんなふうだから、レンさんは、他の人間から

お露さんの声が聞こえなかったら、間違いなく太一はそのつづきを口にしていた。

――頭がヘンだとか気味が悪いとか言われるんだ。

（最低……）

レンが傷つくのがわかっていて。……傷つけようとして。

言わなければならない。必ず、伝えなければ。

レンのことを気味が悪いなんて思わない。頭がヘンだなんて、嘘つきだなんて思わない。これまでも、この先も、絶対にそんなことは思わない。

だってレンは言ってくれたのだから。

太一に。——そばにいてくれて、ありがとうと。
心臓のあたりが、ぎゅっと痛くて、なんだか泣きたくなった。
リリ、リリ、リリ、と窓の外でかすかに虫の声がした。
寒くなって、虫たちはもうとっくにいなくなったと思っていたのに。その声はまるで最後の一息のようにか細く、ほんのいっとき囁くように鳴いて、夜の闇の中に消えた。

3

それは期末テストの初日に起こった。
学校が終わって帰宅する途中、いつものように停留所でバスを降りて空栗荘へと歩き出してから、太一は異変に気づいた。
そこは見慣れたいつもの帰路ではなかった。
(……ここって、もしかして……賽河原町の裏側のほう⁉)
間違いない。なんとなれば、太一の目の前には土を踏み固めたような、今どき舗装もされていない道路が広がっており、そこを石のお地蔵さんがゲラゲラと笑いながら横切っていったからだ。名前も見たまんま、『笑い地蔵』という妖怪である。
(でも、どうしてだろう……?)

またも妖怪の町のほうで、バスを降りてしまったらしい。初めて太一が賽河原町を訪れた時以来、二度目のことだった。逆に言えば、あれきりこんなことは起こらなかったのに。

そういえば、と太一は思った。

おかしなことは、実は数日前から起こっていた。レンとケンカをした、翌日から。

外出するつもりで——もちろん人間の町のほうに——玄関の戸を開けると、なぜだか妖怪の町のほうに繋がっていた、ということが何回かあったのだ。

空栗荘の玄関は、人間の世界と異形の世界の、両方に通じている。好きな時に、好きなほうに出て行ける。行き先がわかっていれば、間違ったほうに出ることはない。少なくとも、今までは。

まあその時は、一度戸を閉めてまた開けたら、ちゃんと人間の町に繋がったので、問題はなかったのだが。

（空栗荘はどっちだろう？）

太一は歩きながら、あたりを見回した。

（誰かに道を訊かなきゃ……）

だけど妖怪といえど知らない相手に声をかけるのは、太一にとってはかなり勇気のいることだったので、できれば顔見知りに会いたかった。クロ爺とか、のっぺらぼうの警官とか、狢とか。

そんなことを考えながら、しばらく闇雲に歩いていると、
「とおぉふぅ、がんもどきっ！」
ラッパの金属的な音色とともに、アマガエルの豆腐屋が自転車を手で押しながら、こちらにやって来るのが見えた。とりあえず、知っている相手だ。
「あの……」
幟（のぼり）が近くまで来たところで、太一は人間大のアマガエルに声をかけた。——いや、かけようと口を開いたのだが、それより早くに別の声が豆腐屋を呼び止めた。
「おじさん、豆腐一丁！」
「あいよ！」
太一はきょとんとした。通りには他の妖怪の姿はないのに、声が間近で聞こえたからだ。
次の瞬間、さらに仰天（ぎょうてん）することが起こった。
自転車を止めて振り返った豆腐屋が、いきなり何者かに勢いよく投げ飛ばされたみたいに、ポーンと地面に転がったのだ。
ついでに自転車もひっくり返って、もったいないことに荷台の豆腐をあたりにぶちまけた。
「うきゃ⁉」
とたんに「きゃははは！」「わーい、ひっかかったー！」と子供っぽい歓声があがって、文字通りの黒い影が幾つも、地面をすべるようにして逃げて行った。

「なんてことしやがる！　悪ガキどもが！」

ようやく立ち上がった豆腐屋は、カンカンになって怒鳴った。売り物を台無しにされたのだから、当然だ。

「尻尾もとれねぇおタマっこが！　悪さばかりしやがって、今度見つけたらただじゃおかねえぞ！」

（おタマっこって……？　あ、オタマジャクシか）

察するに「嘴の黄色いひよっこ」と同じ意味だろう。アマガエルなだけに。

「大丈夫ですか？」

近寄って声をかけると、それで初めて気がついたように、豆腐屋はギョロリと太一を見た。

「おや、あんたは空栗荘の」

急にバツの悪そうな顔をして、潰れた豆腐を水掻きのついた手でせっせと片付け始める。見ているだけというわけにもいかないので、太一も自転車を起こしたり木箱を荷台に載せたりして、手伝った。

「やぁ、すいませんねえ。人間さんの手をわずらわせるなんざ。……やれやれ、今日の稼ぎがこれでパーだ」

「今の、何だったんですか？　なんか影みたいでしたけど」

「ええまあ、影走りっていう性悪のガキどもでしてね。今日はやたらあちこちで、悪さをして

回ってるようで」

自転車の後ろに立てた幟をおろしながら、アマガエルは忌々しげに首を振った。

「影の中にこっそり隠れて、知り合いの声色を真似て声をかけてくるんでさ。こちらがうっかり返事をしようものなら、今みたいなことになるって寸法で。あんたもお気をつけなすったほうが、いいですよ」

「はあ」

「ところで何かご用で？　豆腐はこれこの通り、今日はもう売れなくなっちまいましたが」

「いえ、豆腐じゃなくて……」

空栗荘に帰りたいけど道がわからないと言うと、

「ああ、それなら方角はあっちでしょう。この道を真っ直ぐ行って、ああ行ってこう行って」

かなり大雑把な道案内だが、方角がわかっただけでも、とりあえず助かる。

「ありがとうございます」

「そんじゃ、あっしはこれで。これからもよろしく、ご贔屓に」

豆腐屋がキコキコとペダルを踏んで遠ざかって行くのを見送ってから、太一は空栗荘をめざしてまた歩き出した。妖怪の町では、バス停から下宿先までがやたら遠いのが、なかなか不便だった。

（えっと、ああ行ってこう行って……）

気がつくと、なんとなく見覚えのある場所にいた。古めかしい木造の平屋がずらりと並んだ、狭い通りだ。

木の電信柱が立っていたり、手押しポンプの井戸やコンクリートのゴミ箱があったりと、こちらの町はやたらセピアがかった昭和レトロな感じがする。しかしこの通りの風景は、それよりさらに一昔前の空気が漂っていた。何しろ塀や窓の格子やら、すべてが飴色に変色した木で造られている。

（文化財みたい……って、前にも思ったけど。いつだっけ？）

すぐに思い出した。というのも、

「ちょいと、にーさん！」

いきなり横合いから、女の顔がひょいと覗き込んできたからだ。

「さっきから呼んでるのに、何をぼーっと歩いてるのさ!?」

日本髪を結った女は、きれいな細い眉をしかめて太一を睨んでいる。ぷん、と白粉の匂いがした。

太一は振り返った。

女の身体は五メートルほど後ろにある。そこから細くて白い首がにゅるりと伸びていて、本人の顔は太一のすぐ目の前。

「どうも、こんにちは」
太一は顔を正面に戻すと、ろくろっ首に挨拶した。
「にーさん、一人かい？　何をしてるのさ、こんなところで？」
女は太一の詰め襟の学生服をじろじろと見た。言いながら顔はふわりと浮いたまま、首を縮めて身体のほうがこちらに歩いてくる。ろくろっ首って最長何メートルくらい首が伸びるんだろう、と太一はどうでもいいことを思った。
「学校からの帰りなんですけど……」
バスを降りたらこちら側に迷い込んでいた、と事情を説明すると、ろくろっ首は赤い唇を歪めて笑った。
「相変わらず、ボンヤリだねぇ」
ようやく身体が追いついて、女の顔がすぽんと肩の上におさまる。
「走って追いかけるより、このほうが早いもんでね」
と、妖怪はうなじのほつれ毛を指先でなおしながら言った。今日は臙脂と茶の細い縞柄の古風な着物を着ている。首を伸ばしてさえいなければ、色っぽい美人だ。
「それでこれから空栗荘に戻るところかい？」
「はい。でも道がよくわからなくなって……豆腐屋さんに聞いたんだけど」
「おや、あの親父もいい加減だね。ちょいと回り道だよ。まあ、たいした距離じゃないが」

ろくろっ首はふふっと笑った。
「最近はこの界隈も、前ほど空栗荘から離れちゃいない。この道を出て大通りに沿ってしばらく行くと、煙草屋があるからその角を曲がるんだ。そのまま西に向かって歩いていれば、じきに空栗荘につづく坂に出るはずさ」
「あ、はい。すみません」
ぺこりと頭を下げて歩きだそうとした太一を見て、ろくろっ首は肩をすくめた。
「お待ちよ、にーさん。何のためにあんたを呼び止めたと思っているのさ」
「はい？」
「ひとつ頼まれておくれでないかい。ついでに柊のダンナに届けてもらいたいものがあってね。急ぎの用件なんで、にーさんがちょうど通りかかってくれて助かったよ」
そう言うと、ろくろっ首は手に持っていた徳利と胸元から取り出した手紙を、太一に押しつけた。徳利の口には、栓がしてある。
「これ、何ですか？」
徳利は氷のように冷たくて、触れたとたん、太一はぶるっと身震いした。
「大事なものさ。子細はその手紙に書いてあるから、中身を知りたきゃあとで柊のダンナに訊いておくれ。……それでね、にーさん」
ろくろっ首は、唇の端を吊り上げてニィっと笑った。

「いいかい、徳利の蓋は絶対に開けちゃいけないよ。開けるときっと、面倒なことになるからねえ」

ついでと言われると確かに断る理由はないので、太一は受け取った徳利と手紙をカバンに入れて、帰り道を急いだ。徳利はそのまま持っていると指が凍えそうだったし、大通りはけっこうたくさんの妖怪たちが行き来していて、うっかりぶつかって落としでもしたら大変だと思ったのだ。

徳利の中身は気になったけど、開けるなと言われるものを開けると浦島太郎の玉手箱のようなことになるのはわかりきっていたので、栓をとって中を確かめるつもりは毛頭なかった。

（なにしろ妖怪からの預かり物だし）

ろくろっ首の言ったとおり、大通り沿いにしばらく歩くと大きな煙草屋があった。店先のガラスケースの中に、刻み煙草の包みや大小の煙管やマッチの箱がきれいに並べられているのを見ながら、太一は角を曲がった。——その時。

「にーさん、にーさん！」

後ろから声をかけられて、あれ、と太一は思った。ろくろっ首の声だ。

「はい？」

どうしたんだろうと思って振り返ったら、誰もいない。

首を傾げたとたん、足下の影の中から黒い手がにゅっと伸びて、太一の踝を摑んだ。次の瞬間、ものすごい力で持ち上げられて、視界がぐるんと回った。

「わあ」

悲鳴をあげた時には、投げ飛ばされて背中をしたたかに地面に打ちつけていた。手から離れて一緒に宙を舞ったカバンが、少し離れたところに落ちて、ガチャンと嫌な音をたてる。

痛みよりも地面に叩きつけられた衝撃でクラクラしている太一の耳に、子供のような甲高い声が響いた。

「アハハハ！」

「ひっかかったぁ！」

「やーい、バーカ」

やられた。影走りだ。

（そういえば、知り合いの声を真似するって言ってたっけ……）

ついでに、以前にも似たようなことがあったのを思い出す。声をかけられても相手を確かめないうちは返事をしてはいけないと言われていたのに、うっかり「はい」と答えてひどい目にあいかけた。夏の盆の祭りの時のことだ。

もしかすると異形には、返事をした相手には悪ふざけをしてもかまわないという約束事でもあるのだろうか。

（……これからは気をつけよう）

「やいやいやいやい、てめえら！　悪さもたいがいにしやがれ！」

いきなり、仰向けの太一の視界を派手な格子柄の着物がよぎって、同時に怒鳴り声が聞こえた。

影走りたちが、わっと四散する。逃げ遅れた一人だか一匹だかが、下駄でぎゅっと踏まれて「きゃっ」と声をあげた。

「さっきはよくも釣りの邪魔をしてくれたな。おかげで魚がみんな逃げちまった。どう落とし前をつける気でい!?」

（あ、もしかして）

格子柄と声の調子におぼえがあった。太一はもぞもぞと身体を起こすと、声の主に挨拶をした。

「あの。こんにちは」

「いよぅ、空栗荘の兄さん。久しぶりじゃねぇか」

影走りをぐりぐりと踏みつけて、それでようやく溜飲が下がったのか、狢は下駄をどけた。逃げていく影にはもうかまわず、太一に向かってニヤリとしてみせる。

いつものように若い男の姿に化けているが、今日は煙管と虫籠のかわりに、釣り竿と魚籠を持っていた。

「災難だったな。大丈夫かい？」
「はい」
太一は立ち上がって、制服についた土をはたいた。幸い、ちょっと擦り向いたくらいで怪我はない。
で、カバンのことを思い出した。
（そういえばなんか、ガチャンて音がしたような……）
遅まきながら嫌な予感がして、地面に転がっていたカバンを拾い上げた。
（割れて中身が出ちゃってたら、どうしよう）
そんなことになったら、ろくろっ首に怒られるに違いない。そう思いながら、急いでカバンの口を開けたとたん。
ぶわっ！
中から白くてモヤモヤしたものが、噴き出した。
「うわ」
その煙だか蒸気だかわからないものは、まるで生き物みたいに空中で渦を描いたかと思うと、いきなり太一めがけて襲ってきた。
……いや。襲ってきたのかと、思ったのだが。
「え……？」

次の瞬間、太一は目を丸くした。
なんと正体不明の白いモヤモヤは、そのまま狙いさだめたように、彼の口の中にすぽんっと飛び込んだのだ。慌てて手で口を押さえたが、もう遅い。
えっと、と太一は思った。
(もしかして俺、飲んじゃった?)
カバンを抱えたままあたりを見回したけど、空中にはモヤモヤの残りカスもない。きれいさっぱり、太一が飲み込んだ——もとい、太一の中に入ってしまっていた。
「くしゅん!」
ひやり、と身体が冷えて、思わずくしゃみが出た。
「おいおい、兄さん。そいつは知り合いかい?」
たてつづけにくしゃみをしている太一を見て、狢は呆れたように言う。
「いえ、初対面です。……くしゅん!」
というか、対面もしてないと思う。
見ると案の定、カバンの中で徳利は粉々になっていた。つまりあの白いモヤモヤが、徳利の中に入っていたモノである。
「今の、妖怪ですか?」
「まあそうだろうなぁ」

「俺、飲んじゃいましたけど……？」
「てかそりゃ、取り憑かれたってことじゃねぇのかい」
狢は釣り竿で自分の肩をぽんと叩くと、冷静に指摘した。
……取り憑かれた？
太一はまじまじと狢を見る。
そうして、言った。
「でも、なんで俺に取り憑いたんですか？」
「それをオイラに訊かれても」
その時であった
『きゃあぁぁぁ――！』
太一の頭の中で、いきなり悲鳴が響いた。
『うそやだ何これっ!?　男？　あんた男なのっ？　ええぇ、どうして男なのよ――!?』
声は女性――というより、まだ若い少女のものだった。

4

「おや。なんだってあんた、こっちから帰ってきたんだい？」

妖怪の町の側の庭を掃除していたお露さんは、狢と一緒に戻ってきた太一を見て、顔をしかめた。

理由はわからないけどバスを降りたらまた妖怪の町にいて……と、太一が口ごもりながら言っていると、狢が横から気短かに割り込んだ。

「そんなことより、お露婆さん。この兄さん、妖怪に取り憑かれっちまってるぜ」

「なんだって？」

「早いとこ柊のダンナに知らせてやんな。でなきゃ、兄さんはいつまで経っても空栗荘にゃ入れねぇ」

あ、そうか、と太一は思った。

妖怪は許しがなければ空栗荘の敷居を越えることはできない。つまり妖怪に取り憑かれてしまった太一も、同じく勝手に中に入ることはできないということだ。

ろくろっ首に頼み事をされたところから経緯を説明して、太一は預かっていた手紙をお露さんに渡した。

「詳しいことは、これに書いてあるらしいんですけど……」

「で、あんたに取り憑いたのはどんな妖怪だい？」

「全然わかりません」

「ふん？」

お露さんは、受け取った手紙をとっくりと眺めた。なるほど、とうなずく。
「ご丁寧に手紙に封印がしてあるね。こりゃ、大家以外は中を読めないわけだ。……まったく、ろくろっ首もそんなに大切な用件なら、自分の足で来りゃいいじゃないか」
ぶつくさ言って、お露さんはじろりと太一を見た。
「あんたも、人が好いのもたいがいにしな。こういうことには素人なんだから、妖怪の頼みなんざほいほい引き受けるもんじゃないよ」
「すみません」
またお人好しと言われてしまった。
「どれ、大家を起こしてくるからそこで待ってな」
「……やれやれ。ダンナはまた寝てるのかい」
お露さんが玄関に姿を消すと、狢は「しょうがねえな」とばかり首を振った。釣り竿を肩に担ぎなおして、太一に向き直ると、
「じゃ、オイラはこれで失礼するよ」
「え、でも」
せっかく来たのに、と太一は目を瞬かせる。
「どのみちオイラは中には入れねぇし、わざわざダンナに許しをもらって敷居をまたぐほどの用件でもねえさ。詳しいことは、あとでろくろっ首に訊きゃあいいことだ」

今日は虫籠を持っていなかったので、道案内をさせる蝶も蛍もおらず、どうやら自分で太一をここまで送ってくれたらしい。

「お手数かけて、すみませんでした」

「いいってことよ。ま、乗りかかった船ってやつだ。助けが必要なら、いつでも声をかけてくんな」

ぶらぶらと坂を下っていく狢の背中を見送って、太一はため息をついた。

(ろくろっ首が言ってた『面倒』って、こういうことだったのかな)

しかし自分で徳利の蓋を開けて中をのぞいたわけではないので、どっちかというとこれは災難の部類だと思う。

「……ねえ。君さ、何の妖怪?」

玄関前にぽつねんと一人残された太一は、無駄だと思いつつも、自分の中にいるモノに話しかけてみた。

しかし、答えはない。

最初に声が聞こえたあと、何を訊いてもこの調子で、うんともすんとも反応がなかった。怒っているというか拗ねているというか、落ち込んでいるというか。そういう重ったるい感情の波だけは、かすかに伝わってくるのだが。

(もしかして、十遠見さんやミヨシさんみたいな霊能力者じゃないと、ちゃんとした会話はで

きないのかな）

さっきのはまぐれで、太一にも声が聞き取れただけなのかもしれない。それにしたって、どうして男なのかと言われましても。

とにかく、取り憑いた相手は返事をしないし、手紙はお露さんが言ったように太一には読むことはできなかったし、空栗荘に戻るより先に徳利が割れたことを伝えにろくろっ首の家に行ったけど当人はいないし――この時間なら多分、湯屋にでも行ったのだろうと狢は言っていたが――で、事情はさっぱりわからないままだ。

困ったな、と太一は思う。

（明日もテストなのに）

妖怪に取り憑かれたまま学校に行って、大丈夫なものだろうか？

お露さんはなかなか戻って来なかった。きっと、寝ぼけている大家に手を焼いているに違いない。

手持ち無沙汰に庭を眺めていて、太一は冬枯れた庭にぽつぽつと色鮮やかな花が咲いていることに気づいた。黄色に紫に薄紅色。とうに枯れたはずの秋の野草たちだ。

（今日もあったかいな）

このところ、冬だというのにずいぶん暖かい日がつづいていた。外出するのにコートもマフラーもいらない。特に日中の気温は二十度近くまであがって、ちょっと激しく動くと汗ばむほ

どだ。

まるで秋のさなかに逆戻りしたような陽気だから、花たちも勘違いしたのかもしれない。十二月に入ってすぐは一気に冷え込んだ日もあって、そのまま寒くなるのだと思っていたから、この季節外れの暖かさは妙な感じだった。まあ、数日のことだとは思うけれど。

「こういうのって何て言うんだっけ。えっと……小春日和？」

思わず独り言を言うと、

『バカね。普通は十一月の言葉でしょ、それって。こういうのは、地球温暖化にともなう異常気象っていうのよ！』

急に、ぽんと叩きつけるような声が返った。やっぱり頭の中に直接響くみたいに。

「地球温暖化……」

いや、それはともかく。

「なんだ、ちゃんとしゃべれるんだ？」

『どうでもいいでしょ。あんたに関係ないんだから、そんなこと』

関係は大ありだと思うけど。

ひどくツンツンした調子で言って、声の主はまた黙り込む。なんだか、ぷいっと横をむかれてしまったみたいな感じだ。

人間だったらすぐにそばを離れればいいことだけど、相手が自分の中にいるとなると、こう

いう反応に対してどうしたらいいのか、太一にはよくわからない。
「どうして俺に取り憑いたの？」
今まで話しかけても返事をしなかったのは、しゃべれないからではなく、太一のことを無視していたからしい。
だからまた答えないかも、と思ったら、
『言っておくけど、好きで取り憑いたんじゃないからね！　まさか男だなんて、思わなかったのよ。あたし、男って嫌い。無神経だし鈍感だし、嘘つきだし！』
さらにつっけんどんな声が返った。
（嘘つき？）
それにしても勝手に取り憑いたくせに、こんな文句を言われるのは、なんか理不尽だと太一は思う。
「あのさ。だったら、いつまでも俺に取り憑いていなくてもいいと思うんだけど。このままだと、俺も困るし」
『……ない』
「え？」
『……だからっ！　一度入っちゃったら、自分じゃ出られないの！　どうやったらこの身体から出られるのか、あたしにもわからないんだってば！　そうでなきゃ、言われなくてもとっく

にあんたから離れてるわよ！』

「えええ!?」

ガラガラ……と玄関の戸が開いた。

「いやぁ、どうも遅くなってすみません」

寝ぼけた声で言いながら、柊二郎が姿を見せた。

その後ろから顔をのぞかせたお露さんが、「蹴飛ばさなきゃ目を覚まさないってのは、どういう了見なんだい」と小声で文句を言っている。

「とにかく、事情はこれでわかりました」

大家は、手にしたろくろっ首からの手紙を、ひらひらと振って見せた。

「いやはや太一君、どうもとんだことに巻き込まれましたねえ」

「はあ」

「いいですか、心して聞いてくださいねー。ゆゆしきことですよー。君に取り憑いたのは、なんと！　雪女です」

「ゆ……」

雪女？

「しかも、ただの雪女じゃありません」

柊二郎は、ふわっとアクビをすると、



「溶けた雪女です」
「は？」
緊迫感のない声で、とんでもないことを言われてしまった。
「雪女って、溶けるものなんですか？」
「溶けますよ。春になって雪や氷が溶けるように、気温があがって暖かい場所にいつまでもいたら、雪女も溶けて蒸発します」
「蒸発ですか」
「失踪のことじゃありませんよ。理科の時間に習った、気化のほうです」
柊二郎から「お許し」が出たので、太一はやっと空栗荘に入ることができた。
で、食堂でお露さんの淹れてくれたお茶を飲みながらの、この会話だ。夕食にはまだ早い時刻なので、食堂に他の住人の姿はない。
「雪や氷みたいに溶けるんだったら、普通は水になるんじゃないんですか？」
「いえいえ、これがどういうわけかそのまま固体から気体になっちゃうんです。ナフタリンみたいなものです。これを昇華作用と言います」
「はあ」
防虫剤と同列にされた雪女は、またも無視を決め込んでいるのか、ずっと黙ったままだ。

柊二郎は、ずずっと茶をすすった。
「だから雪女は、春が来ると山の中や地下の氷室にこもって、寒くなるまで眠って過ごすらしいんです。昔話の中には、人間の男性と結婚して何年も一緒に暮らす雪女の話もありますが、それはごく一部の例外でしょう。ということで」
空栗荘の大家は湯呑みをテーブルに置くと、持っていた手紙をふたたび広げた。
「どうやら君の中にいる雪女も、冬になって氷室から出てきたまではよかったんですけど、この数日予想外に暖かい日がつづいたものだから、うっかり溶けちゃったらしいんですよ。で、それをたまたま見つけたろくろ首が、このまま放っておくわけにもいかないからと、気化した雪女を徳利に詰め込んで、僕のところに届けようとしたんです」
ろくろっ首はあれでなかなか姐御肌で面倒見がいいですからねー、と柊二郎は言うが、だったら最後まで自分で面倒をみてほしかった、と太一は思った。
「――ところがその徳利が割れちゃったから、中から溶けた雪女が出てきて、そこにいた太一君に取り憑いてしまったと。経緯はそういうことですね」
太一はカバンから出てきた、白くてモヤモヤした煙みたいな蒸気みたいなもののことを思い出した。
（そっか。雪女って、溶けるとああなるんだ）
「でも、どうして大家さんに？　溶けた雪女を、大家さんに届けてどうにかしてくれってこと

ですか?」

「どうにかしてくれってことです。ここに書いてあります」

柊二郎は広げた手紙を、太一の前に押し出した。

「封印は解いたので、もう君にも読めますよ」

太一は文面を見つめた。

「すみません。全然読めません」

だって墨で書いてあるうえに、達者な崩し字だ。古文書の解読ができる人じゃないと、読めないと思う。

え、読めませんかそうですか……と呟いて、柊二郎は手紙をまた引き寄せると、その部分を音読した。

「――というわけで柊のダンナ、この子がもっぺん冷えて固まっちまう前に、型を見つけてやっておくれな。それもできるだけ美人にしてやっておくれ。頼んだよ」

太一は目を瞬かせた。

「型って何ですか?」

「ええっとですねえ。その前に、――ねえ太一君。気化した雪女が冷えて固まったら、どうなると思います?」

「もとに戻るんじゃないんですか?」

「いえいえそれが、残念ながら。たとえばグラスの中の氷が、溶けたあともういっぺん凍ったら、もとどおりの四角い氷に戻ると思いますかー？」

太一はのんびりとまた茶をすすっている柊二郎を、まじまじと見つめた。

「……あの。それってつまり」

「人型になるかどうかもあやしいものですね。もしかしたら、ピカソの絵みたいになっちゃうかもしれません」

ピカソの『泣く女』みたいな雪女。想像してみたら、かなり前衛的だった。

「というわけで、雪女も溶けたら一度型に入れて、固めなおさなきゃいけないんです。で、その型というのは人間です」

「――」

「雪女は、溶けると人間の女性の身体に取り憑いて、その人そっくりの姿になって復活するんですよ」

つまり雪女が人間に取り憑くというのは、型を取るために身体の中に入るという意味らしい。なんだか、タイ焼きとか人形焼きっぽい。

「それって、取り憑かれた人間のほうは困らないんですか？」

「ちょっと悪寒くらいはするかもしれませんけど、長くてもせいぜい二、三日のことですし、本人は取り憑かれても気づかないことのほうが多いみたいですね。害はないので、問題はあり

ません。なにしろ気化しちゃった雪女には、妖怪としての力はまったくないそうですから。それに比べれば、風邪のウイルスのほうが、よほどタチが悪いというか何というか」

どうやら、いつぞやのヒダルガミや獏みたいに、お腹が減って動けなくなったり眠ったまま目が覚めなかったり、といった迷惑なことはなさそうだ。

ところで根本的な問題が、残っていた。

「雪女は、取り憑いた相手そっくりの姿になるってことですよね」

「ええ、そうです」

「俺、男ですけど」

柊二郎はしばし太一を凝視してから、棒読み口調で応じた。

「あー、このままだと雪男になっちゃいますねー」

いや雪男は違うだろう。いろいろと。

「雪女が取り憑くのは、当然ながら女性ときまっています。男に取り憑いたなんて、過去に事例がないんですよね。どういうことなのか、僕にもさっぱりわかりません。——ということで、これはご本人に訊いてみないと」

柊二郎はこほん、と咳払いをすると、太一を見た。いや、今までも見ていたのだが、今度はその瞳の奥をのぞき込むように、真顔になった。

「えー、もしもし。そこの雪女さん。僕は境界守の時国柊二郎といいます。まず、あなたのお

名前を教えてもらえませんか」

『……』

返事はない。

太一が首を振ると、柊二郎はうなずいて言った。

「あなた、太一君の身体から出られないって言ったそうですね。次の寒波が来るまでに何とかしないと、このままだと本当に雪男になってしまいますよ？　心は女でも身体は男。それでもいいというなら、こっちもべつにかまいませんけど、あなた本当に雪男でかまわないんですか？」

太一の頭の中で、ため息が聞こえた。

『……名前なんて、知らなくたっていいじゃない』

ものすごく拗ねた声だ。部屋のすみっこで背中を向けて座っていたのが、素直になれなくて、チラッとちょっとだけこっちを見た、みたいな感じ。

太一が彼女の言葉を伝えると、柊二郎はニッコリとした。

「名前のやりとりをするというのは、ひとつの契約です。名前も知らない相手では、僕にできることはとても限られてしまいます。……何よりこれは、あなたが僕を信頼するかどうかの話ですから」

『……りっか。六つの花って字で、六花』

「それは綺麗な名前ですねえ。六花は雪の別名でしたね」
硬い花の蕾が、ふわっと少しだけほどけたような感覚があった。名前をほめられて、雪女は——六花はちょっと嬉しかったらしい。
（なんでこんなことが、わかるんだろう）
自分の中の、自分のものではない感情の動きに、太一は戸惑った。
「では六花さん。あなたはどうして太一君に取り憑いたんですか？」
だって、となんだか言い訳するような声。
『女の人に見えたんだもの』
「あー、太一君。何も彼女の言葉を、口調までそっくりそのまま伝えてくれなくていいです。君の口から女の子の言葉を聞くのは、かーなーりおかしな気分ですので」
「はあ」
それで、と柊二郎はいささか複雑な表情で、また六花に話しかけた。
「女の人に見えたって……、でも太一君はどこからどう見ても男の子ですよ？」
『だって本当だもの。取り憑いてから男だって気がついたの』
（あ、だからか）
どうして男なの、と六花が叫んだ理由がわかった。取り憑くまで、太一のことを女性だと思い込んでいたからだ。

とにかく六花が言うには――徳利から飛び出して、ふと見ると目の前にすごく綺麗な女の人が立っていた。それで迷わず取り憑いたら、全然別人で、しかも男だったから驚いたらしい。

「なるほど。なんかちょっと心当たりがあるような……。六花さん、その女の人ってどんな感じでした？」

『パッと見ただけだから、あんまりよく覚えてない。でも髪が長くて、それを後ろで括っていて、着物を着ていて、それからそれから……、あ、そうだ。人形を抱いていたわ。大人なのにヘンなのって、一瞬思ったの』

人形。

太一と柊二郎は顔を見合わせたまま、なんとなくうなずきあってしまった。

「ばあちゃんだ……」

「やっぱり、初緒さんでしたか」

『何それ。どういうこと？』

ええとですね、と柊二郎は気の毒そうに言った。

「あなたが見たのは、太一君のおばあさん……というか、亡くなったおばあさんが太一君に残した想いみたいなものです。太一君を守ろうとする初緒さんの強い想いが、彼女の姿になって最初に六花さんには見えてしまったのでしょうね。ちなみに人形を抱いているのは、彼女の職業が傀儡師だったからです」

そうだった、と太一は思う。

（ばあちゃんは、俺のことを守ってやるって言ってくれてたから）

祖母のことを思い出すと、いつも太一は暖かな気持ちになる。彼女の『想い』は、たとえばミヨシみたいな力のある人間の目には、太一のまわりに散ったキラキラした光のようにも見えるらしい。

『う……、つまりあたしの早とちり？』

どよん、と暗い気持ちが伝わってきた。

（あ、落ち込んだ）

本当にわかりやすい。

「いえまあ、誰にだってよくある勘違いですから」

柊二郎がヘタな慰めを口にする。

「では、これからが本題です。解決しなければならない問題は二つあります。——ひとつは六花さんを溶けた雪女のまま、太一君の身体から離すこと。もうひとつは、あらためて六花さんが取り憑くことのできる、つまり型になる相手を見つけること。それもなるべく早く。気温が下がって、太一君そっくりの雪女ができあがる前にです」

まずすべきことは、天気予報の確認だった。

「憑き物落としの要領で、何とかなりゃいいんだがね」
お露さんが布巾で手を拭きながら、厨房から出てきた。ご飯が炊けたばかりの炊飯器の蓋を開けて、水気をとばすためにしゃもじでかき回す。
そろそろ夕食の時刻だ。いつの間にか、窓の外は真っ暗になっていた。
「けど間が悪かったね。ミヨシはいつもの周期で部屋で寝込んでいるし、十遠見は出張で二、三日は戻って来ないよ」
おや、と柊二郎は声をあげる。
「相変わらず十遠見さんは忙しいようですねぇ」
「この時期は、特にね。冬至が近いから」
今度はポットにお茶をつぎ足しながら、お露さんはふんと鼻を鳴らした。
「一年のうちで一番陽の短いその日には、陰の気がきわまって万物の生命力がもっとも衰える。その前に、用心してしっかり邪気祓いをしておかなきゃならないってことさ。さもなきゃ病気やら事故やらの、大盤振る舞いになっちまうからね」
「だから冬至にはカボチャを食べて柚子のお風呂に入るんですよ。知ってました、太一君？」
「え、いえ」
ご家庭でできる簡単な邪気祓いです、と柊二郎は真面目くさって言ってから、
「でも仮に憑き物落としと同じ方法で雪女を落とす術があったとしてですね、あの二人にまか

せるのは、別の意味で心配なんですよねぇ。十遠見さんは時間外勤務ということで幾らふっかけられるかわかりませんし、ミヨシ君は力業ですからヘタすりゃ六花さんをどこかに吹っ飛ばすか、消しちゃうかもしれません」

『無節操暴走お祓い男』、もしくは『半人前』の異名をもつミヨシは、能力はあってもその力をうまくコントロールすることができないらしい。よく無茶をやらかしては、その反動で月に一度は熱を出して寝込んでいる。

つまり一月のうち数日、ミヨシは術者としてはまったくの役立たずになるわけで、それを周期と空栗荘の者たちは言うのだ。

「うまいことその雪女を太一から落としたところで、そのあとはどうするんだい。そのへんの通行人に内緒で押しつけるわけにはいかないだろ」

「そうなんですよねえ。しかも雪女の型にふさわしい美女となると、条件はさらに難しいわけですから」

お露さんはテーブルの横まできて、ニヤリとした。

「なんだったらアタシの身体を貸してやったってかまわないよ。これでも昔は、小町娘と評判をとったものさ」

「そんな応仁の乱くらい昔のことを言われましても」

「ああ？　なんだって？」

頭のてっぺんをがつんとゲンコツで殴られて、「あたた」と柊二郎は悲鳴をあげる。
『男と老婆……うう、究極の選択だわ』と六花が呻くように言ったことは、賢明にも太一は黙っていた。
「ところでもう食事の支度はできているんだけどね。あんたら、このまま夕食にするかい？」
「うー、たんこぶが。お露さん、今日のメニューは何ですか」
よほど痛かったのか、涙目で自分の頭をさすりながら、柊二郎は訊ねた。
「鶏の唐揚げに大根とほたてのサラダ、なめこと三つ葉の味噌汁、瓜のぬか漬けだよ」
「いいですねえ。すぐにいただきます」
「だったら手を洗っておいで。太一は制服を着替えてきな。……とにもかくにも、どんな面倒事があったって、人間は腹一杯食べてりゃ何とかなるもんさ」
お露さんは力強く言うと、厨房へ戻って行った。

「あら、柊さん？　今日はどういう風の吹き回し？」
太一と柊二郎が夕食を食べ始めてすぐ、古都子が帰ってきた。普段はあまり顔を出さない大家が食堂にいるのを見て、目を丸くする。
「大家たるもの、たまには住人の皆さんと親睦を深めることも大切だと思いまして」
「うわぁ、殊勝。ものすごくアヤシイわね」

柊二郎がすまして答えると、古都子はクスクス笑いながら、おかずのトレイとご飯をよそった茶碗をテーブルに運んできた。太一たちのそばに座る。
「何かあったんでしょ？」
「はあ、まあ」
太一が雪女に取り憑かれたことを柊二郎が説明すると、古都子は箸を動かしながら、感心したように太一を見つめた。
「すごいわ、太一君。男で雪女に取り憑かれるなんて、きっと史上初よ」
全然嬉しくないんですけど、と太一は思う。
「そうすると、今、太一君の中に雪女がいるわけね。私、雪女に会うのって初めて。私の声、聞こえているかしら」
古都子は太一に向かってひらひらと手を振った。
「こんにちは。よろしくね」
『……こ、こんにちは』
もじもじしたような返答があった。なんか、大人の女の人に対して、小さな女の子がちょっと気後れしているみたいな。
あれ、と今さら太一は思った。
「あのさ。君、歳いくつ？」

『な、何よ急に。……五十二歳』
「五十二歳⁉」
おやあ、と柊二郎が声をあげる。
「とすると、六花さんは人間でいうと中学生くらいですか」
「え、そうなんですか？」
「ええ、雪女はだいたい八十年で成人すると聞いていますから」
妖怪の成長の仕方って、よくわからない。
（中学生くらいの女の子……？）
あらためて、太一は呆気にとられた。
確かに、時々反応が妙に幼いなと思っていたけれども。
（なんか……一番よくわからない年齢っていうか）
高校生の太一にとって、中学生くらいの女の子というのは、普段まったく関わりのない年齢層だ。ただでさえ他人とのコミュニケーションの取り方がわからないというのに、相手は太一の身体の中にいるのだから、どう扱っていいのか困る。困ってもどうしようもないけど。
などという太一の内心など知るよしもなく、
「とにかくそういうわけで、どうしたものかと悩んでいまして」
柊二郎がご飯をもぐもぐしながら、古都子にぼやく。

「だったらいっそのこと、うちの師匠に相談してみるというのはどうかしら」
瓜の漬け物を箸でつまみ上げて、古都子はいかにもあっさりと言った。
「おや。甚五郎さんに何か画期的なアイデアでも？」
古都子の師匠である左甚五郎は、妖怪の町に住む木彫り職人だ。もとは彫ったものに命が宿って動き出すといわれるほどの伝説の名工だったが、古都子いわく今はもう人間をやめているらしい。ちなみに代表作は、日光東照宮の眠り猫である。
「確かうちの師匠、前にも雪女のために型を彫ったことがあるって言ってたから。詳しくは知らないけど、型が必要ってことはやっぱりその雪女も、溶けてしまったんだと思う。つまり師匠くらいの名人が彫ったものなら、雪女が取り憑くにしたって、何も人間の女ではなくて木彫りの像でもかまわないってことじゃない？」
おお、と柊二郎は感動したようにうなずいた。
「甚五郎さんの腕前なら、それこそ生きた人間そっくりの出来栄えだったでしょうしねえ。なるほどなるほど」
しかもどんな美女もお望みのままですしー、などと言っている。
「だから彼女が次に取り憑く相手に困っているなら、師匠にまた型を彫ってくれるよう頼んでみるのも、手だと思う」
「しかし甚五郎さんは引き受けてくれますか？　なにかとお忙しいでしょうし」

「その点は大丈夫。この頃うちの師匠、やりがいのある仕事がないってぶーたれてるから。事情を説明すれば、きっとおもしろがって引き受けてくれると思う。で、師匠がその気になれば、木像のひとつやふたつ、仕上げに三日もかからないわよ」

「――というわけで、六花さんとしてはどう思います？」

『い、いいわよ。あたしはべつにそれでも』

という返答を太一が伝えると、古都子は笑ってうなずいた。

「じゃ、明日にでも師匠に伝えるわ。心配しないで、まかせておいて。――あ、そうだ。何か注文はある？　どんなタイプの顔が好みとか」

『べつに、綺麗につくってくれれば』

「じゃあ、あとは十遠見さんが出張から戻るのとミヨシ君の快復を待って、六花さんを太一君の身体から引っ張り出す一番いい方法を考えることにしましょう」

柊二郎はニコニコと太一――と六花――に笑いかけた。

「……ということで、太一君。しばらくはいろいろ不便かもしれませんけど、これも何かの縁と思って、六花さんの面倒をみてあげて下さいね。六花さんも、あまり太一君に迷惑をかけちゃダメですよ？」

予報では、少なくともあと二、三日は暖かい日がつづくらしい。

太一はため息をついた。

期末テストは雪女憑きのままで乗り切ること決定、だ。

「今日はずいぶん長っ尻じゃないか」

食事が終わって、太一と古都子がそれぞれの部屋にひきあげると、お露さんが厨房から出てきて炊飯器のご飯で握り飯をつくり始めた。

「ええ、まあ。たまにはね。……それ、ミヨシ君のですか？」

一人食堂に残ってのんびりと茶を飲んでいた柊二郎が、訊ねる。

「ああ。あとで唐揚げと一緒に持っていってやろうと思ってね。まったく、どれだけ熱があったって二人分はたいらげるからね、あの男は」

ミヨシ君らしいですね、と柊二郎は微笑した。

「レン君はまだですか？」

「なに、もうじき帰ってくるだろう。花屋は店が終わっても、何かと雑用があるから」

「太一君とレン君はケンカをしたようですね」

「ふん。聞いたのかい？」

「……なんとなくね、わかりますよ。空栗荘で起こっていることくらいは」

大家ですから、と柊二郎は呟く。

「二人ともこれまで他人とケンカなんざしたことがないから、不器用なもんだったよ」

「あはは、初心者マークつきのケンカですか。……しかし、レン君がねえ。あの子は他人と親しくなることなんか、もうすっかり諦めてしまっているみたいだったのに。いやぁ、こういうのは楽しいですね」

「何を勝手なことを言ってるんだろうね、このグータラ大家は」

お露さんは手際よくつくった握り飯を皿の上に置くと、呆れたように柊二郎を見た。

「問題は太一だよ。今日みたいに裏側から帰ってくるってのは、どうしたもんかね。……ここへ来て、だいぶマシになったと思っていたのに」

「迷っているんでしょう」

柊二郎は茶を一口飲んで、言った。

「何をだい」

「太一君は多分、いろいろなことに気づき始めています。今まで見えていなかった、大切なことにです。でも気づくことには勇気がいるから、心のどこかではまだ逃げようとしている。前に進もうとする反動で、無意識に後ろを向いて、自分にとって居心地のよさそうなところに逃げ込もうとしてしまっているんだと思います」

「あちら側にかい」

「ええ」

お露さんはため息をついた。

「どうしてあっち側のほうが居心地よく見えちまうんだろうねえ」
そうですね、と柊二郎はまた呟いた。
「太一君にとって異形たちよりも怖いものが、こちらの現実にあったからでしょう。――でも」
微笑してつけ加える。
「迷うようになっただけ、太一君は一歩前進したんだと僕は思いますよ。だからね、お露さん。今日みたいなことがあっても、きっとそんなに心配しなくても大丈夫です」

「レンとは仲直りした？」
食堂を出て階段のところで別れ際、古都子にそう訊かれた。
「え……、いえ、まだ……あれからレンさんに会っていなくて」
ギクリとして、太一は下を向く。
嘘ではない。あのケンカ以来、レンとはすれ違いがつづいていて、顔をあわせていなかった。そのことに太一は、少しホッとしてもいたのだ。
レンに言われたことの意味を、ちゃんと考えなければいけない。それはわかっているけど、考えようとすると頭の中がぐるぐるして、テストの問題が全然解けない時みたいに、焦っても何もわからなくて、結局答が出せないまま先延ばしにしてしまっていた。

「そう」
それ以上何も訊かず、古都子はうなずいただけだ。
「じゃね。おやすみ」
いつもの笑顔で手を振って、行ってしまった。
何も言われないのがありがたいような、なんだか肩すかしのような気分で、太一はそれを見送った。そういえばあのケンカのことは、あれきり誰も何も太一には言ってこない。なんやかや言われたらきっと煩わしいと思うだろうけど……でも。
「はぁ」
思わずため息をついたら、
『はあぁ』
一緒に、六花のため息が聞こえた。
「……どうしたの？」
階段をあがりながら、太一は声をかけた。自分のため息はともかく、六花がどうしてため息をつくのか、わからなかった。
『あの人、綺麗よね。雪女になったらすごく似合いそうだわ』
うっとりした声だ。
「古都子さんのこと？」

確かにイメージはぴったりだと思うけど。

『いいなー。あたしも大人になったら、あんなふうになりたい。美人で大人っぽくて落ち着いてて、女らしいけどヘンにベタベタしてなくて、自立してるって感じ。お姉様って呼びたくなっちゃう』

「……あ、そう」

よく理解できない。

「じゃあさ、古都子さんみたいになりたいんだったら、木像をつくってもらうより、あの人に取り憑けばいいんじゃないかな」

古都子なら、頼めばOKしてくれそうな気がする。

ところが六花は、ひどく呆れたように言った。

『そんなの、できっこないじゃない。あの人に取り憑くなんて、無理』

「どうして」

『あの人の後ろに、なんだかおっかないモノがいて、こっちを見ているんだもの。すっごいギョロギョロした目で。あんなのがいたら、誰だってあの人に取り憑くなんてできないわよ』

おっかないモノ？

「古都子さんの後ろに？　何が？」

『わかんない。なんだか大きな影みたいにしか見えなかったから』

太一は首を傾げた。
これまで古都子と一緒にいて、六花が言うような違和感や怖さを感じたことなど、一度もない。
「それって、悪いモノ？」
違うわ、と六花は即答した。
『ただ怖いだけ。あの人のこと、守ってるのかも。とにかく、ヘタに近づいたらがぶっと噛られちゃいそう』
「ふうん」
本当にそんなものがいるのだろうか。古都子の後ろに？　なぜ？
（考えてみたら古都子さんも不思議な人なんだよな。……人間なのに、妖怪の町の工房に毎日通ってるし）
ちらとそんなことが頭をかすめたけど、すぐに、まあいいやと太一は思った。
（だってここは空栗荘だし）
ここの住人は、謎で不思議で当たり前なのだ。——と、いつものように納得して、自分の部屋に入った。
照明をつけたとたん、
「太一——っ！」

「わっ」
いきなり出現したアカネに勢いよく飛びつかれて、太一は思わず畳に尻餅をついた。
「ねえ太一、てすと終わった？　もうアカネと遊べるっ？」
「ご、ごめん、まだ……今日と明日はダメ」
いてて、と顔をしかめながら立ち上がると、アカネはぷくんと頬を膨らませた。
ああビックリした、と六花が声をあげる。
『この子、あんたの子？』
「そんなわけないだろ。アカネは付喪だよ」
『あ、ほんと。よく見たら、人形だった』
アカネは、きょとんと太一を見上げた。
「太一、誰とお話ししてるの？」
「六花。雪女だけど、今は俺に取り憑いてるから頭の中で声が聞こえるんだ」
「りっか？」
付喪の少女はさらに目を丸くした。太一の手をぎゅっと摑んで、
「りっかは、太一の中にいるの？　それで太一とお話ししてるの？」
「うん」
「じゃあ、アカネはりっかと遊ぶ！」

「だーめ。六花は身体がないから遊べないの」
「しりとりする！」
その手があったか。
しかしどのみち、太一を巻き込むことにかわりはない。
『あたしはいいけど？　どうせ暇だもん』
「俺、明日も期末テストあるから」
『きまつてすとって、何？』
太一は胸いっぱいの空気を、ため息にして吐き出した。
「とにかくダメだよ。テストが終わるまで遊べないって、言ったろ？」
アカネの目線にあわせて身を屈めると、頭を撫でてやる。
「やだやだ。つまんない」
「えっと、それじゃ、……明日、アカネに風船を買ってきてやるから」
「風船？　アカネにくれるの？」
たちまちパッと顔を輝かせて、アカネはぴょんぴょん跳ねた。
「わーい、風船！　太一が買ってくれるって言った！」
「だから勉強の邪魔はしないこと」
「うん！」

『ふぅん。子供って単純』

画用紙とクレヨンを取り出して、上機嫌で一人遊びを始めたアカネを見て、六花は鼻を鳴らすように笑った。

「六花だって子供だろ？」

『失礼ね。それに、どうして呼び捨てなのよ⁉』

「あ、ごめん。えっと……六花、さん？」

『べつにやめろとは言ってないでしょ。呼びたければ、勝手に呼べば⁉』

かまわないのなら、どうしていちいちつっかかるのだろう。

妖怪だからだろうか。女の子だからだろうか。それともそういう性格なんだろうか？

ぼうっと考えていたら、

『あのね』

六花がまたちょっと怒ったふうに、声をかけてきた。

「何？」

『あたしも太一って、呼ぶからねっ』

「あ、うん」

『それでね、あの……それで』

六花はちょっと口ごもってから、

『……ごめん』
「え？」
急にしおらしく謝られて、太一は驚いた。
『本当は、悪いことしたなって思ってるの。太一は関係なかったんだし、あたしが勝手に早とちりで取り憑いちゃったんだし、すっごい迷惑なのはわかってるから』
「――」
『と、とにかくこれで謝ったからね！　ごめんなさいって言ったんだから、もう二度と謝らないからね！』
「う、うん」
素直なんだかそうじゃないんだか、全然わからない。でも彼女が太一に対して悪いと思っている気持ちは、伝わってきた。
「べつに、いいよ。そんなに長い間じゃないんだし」
もしかすると、六花のほうが太一より何倍も不安で戸惑っているのかもしれない。身体が溶けてしまって、取り憑いた相手は男で、しかも自分ではそこから出られないのだから。
（ちょっとくらい不便でも仕方ないかな）
そんなことを考えながら、太一は流しに置いてあった洗面器を取り上げた。石けんやシャンプーやタオルを中に放り込む。

『それ、何するの？』
「先に風呂に入ってこようと思って」
『――お風呂!?』
悲鳴みたいな声が、キンと頭の中を駆けめぐった。
『ダメ、絶対にダメ！　お風呂なんか入らないで！　ぜーったい、イヤ！』
「ええ？」
思わず太一は、耳を押さえた。もちろんそんなことをしても、意味はないのだが。
「どうして？　あ、もしかしてお湯が苦手だとか？　雪女だから――」
『ち、違うわよ！　どうせ蒸発してるんだから、今さら熱いの苦手なんて言わない！　でもお風呂はダメなのイヤなの困るの！』
なんだか泣きそうな声だ。
「困るって……」
『あたしは、身体の感覚はないけど、目と耳は太一のを共有しているの！　つまり見えるし聞こえるわけっ、わかる!?』
それはわかるけど。
『もう、バカ、無神経！　だから、お風呂になんか入ったら、み、みみみ見えちゃうんだってば！　全部!!』

「……あ」
ようやく意味がわかって、洗面器を抱えたまま太一も硬直した。
しまった。そういうことか。
「でも、六花がいる間ずっと風呂に入らないわけにはいかないし……、こういう時、他の雪女はどうしてるわけ？」
『問題ないでしょ。女に取り憑くんだもん』
「あ、そうか」
前例なし。
「……」
『……』
「……あのさ」
お互い気まずく黙り込んだあとに、仕方なく太一は言ってみた。
「見えなきゃいいんだろ？　風呂とか着替えとかトイレとか、とにかく見られて困る時は、俺がずっと目をつぶっているっていうのは……どう、かな……？」
『う……、うん』
長い沈黙のあとに、渋々といったように声が返った。
『し、仕方ないわよね。あたしがドジを踏んだせいなんだし。――で、でもね、いい？　そ

うときまったら、絶対絶対、目をつぶっててよ。途中で目を開けたりしたら怒るからね！　あとで殴るわよ！』

これで何度目か、太一はため息をついた。

（やっぱりものすごく不便かも）

こうなったら、古都子の師匠という人が一刻も早く雪女の型を彫ってくれるのを、願うばかりだった。

5

翌日。

「おはよ、阿川君」

この頃采奈は、朝のバスの中でもよく話しかけてくるようになった。

「今日もぽかぽかしてるね。なんだか冬じゃないみた……い……？」

語尾が疑問形なのは、太一が制服の上にコートを着ているからだ。

「もしかして今日、寒い？」

「そんなことないけど。――くしゅん！」

「あ、風邪？」

「う、うん。そうかも」
嘘でなく風邪っぽいのは、雪女に取り憑かれているせいかもしれないし、昨日風呂に入って湯冷めしたせいかもしれない。
もっともわざわざコートを着てきたのは、いくら昼間は暖かくても夕方あたり急に冷え込んだりしたら困るからだ。型が出来上がるまでは、うっかりして六花が冷えて固まったりしないように気を配らなければならない。
「それにどしたの、そのほっぺたの絆創膏？」
「昨日、風呂場で転んで」
目をつぶったまま風呂に入るのは、実に至難の業だった。何度もうっかり目を開けそうになって、そのたびに六花に『きゃーっ、ダメー！』と叫ばれてしまった。
「和泉こそ、目が赤いけど」
「あ、こ、これ？」
采奈は慌てたように、吊革につかまっていないほうの手で自分の目をこすった。
「えへへ、ちょっと遅くまで起きてたから」
「テスト勉強、頑張ってんだ」
そういえばテスト前にも何度か、采奈は遅刻しかけてチャイムぎりぎりで教室に飛び込んできたことがあった。きっと毎晩、遅くまで勉強しているのだろう。

「う、うんっ、ほら私、普段は勉強ぜんっぜんしないからっ。そのぶん、やらなきゃいけないことがたくさんあるっていうか、中間テストも点数めちゃくちゃだったし、それで期末は頑張らないとヤバいかなっなんて……っ」

「ふぅん」

『ふ――――ん』

太一が相づちを打つのと一緒に、六花の声がした。

『ねえ。この娘、だあれ？』

「しっ、人前では話しかけない約束だろ？」

采奈がえっと目を丸くした。

「あ、和泉に言ったんじゃないから。今のは独り言」

「う、うん」

六花はとりあえず黙ったけれども、そのあとしばらく、頭の中でクスクスと思わせぶりに笑っていた。

次に話しかけてきたのは、バスが終点に着いて、采奈が例によって「じゃ、学校でね」と走って行ったあとだった。

『あの子、かわいー。目がくりくりっとして、ふわふわの子犬みたい。あたし、あの子だったら取り憑いてもいいかなー』

「和泉はダメだよ」
自分も駅に向かって歩きながら、太一は素っ気なく言った。
『どうして？　黙っていれば、あたしが取り憑いたなんてどうせわからないわよ』
「そんなあいつを騙すみたいなこと、もっとイヤだ」
クスっとまた笑い声が響く。
『太一は、ああいうタイプが好きなんだー？』
「え？」
『だって太一、嬉しそうだったもん。あの子を見た時、胸がふわんってあったかくなったもの』
太一は人目を避けて、改札の少し手前で足を止めた。
「和泉は特別だから」
『うんうん』
「友達なんだ」
『……』
一瞬、空白のような沈黙があった。
そうしてすぐ、六花は思い切り力の抜けた声で、
『……あのねえ。そこまで言っといて友達？　何それ。バカ？』

「何が？」

『特別な存在なら、普通は彼女のことが好きって話になるもんじゃない⁉』

太一は面食らった。

「……ごめん。俺、好きってどういうことか、よくわからない」

まだ、わからない。

『好き』というのが、自分の中のどんな感情のことを言うのか。

祖母が言ったように、誰かのことを「気持ちのいいあったかい場所で笑っていてくれればいい」と願ったことはない。栞奈が言うように、「その人といつも一緒にいたくて、そばにいなかったら寂しくて会いたくなる」こともなかった。

だから、きっと自分は、まだ誰のことも「好き」ではないのだと思う。

でっかいため息が聞こえた。

『……もういい。なんか太一って、しょーもないわ』

ぷりぷりと怒って、六花はそれきり黙り込んだ。

（なんで怒ってるんだろう）

首を捻っていると、改札を抜ける人の動きが慌ただしくなった。電車が来る。太一は慌てて、ホームへと走った。

期末テストの二日目は、どうにか無事に乗り切った。六花が約束を守って、学校ではおとなしくしていてくれたからだ。

放課後、太一は帰り道の途中の雑貨屋で、アカネのために風船を買った。

陽射しは今日も暖かで、肌に触れる風が柔らかい。数日前まで、北風に身を竦めていたのが嘘みたいだ。

『きまつてすとって、つまんない。みんなでずっと黙って紙に何か書いてるだけなんて、何が楽しいのよ?』

よほど退屈だったらしく、ぶつぶつ文句を言っていた六花が、急にあっと声をあげた。

『見て、ツツジの花!』

歩道の植え込みのツツジが、濃いピンク色の花をぽつぽつと咲かせている。太一は足を止めた。

「ツツジって、今頃咲くんだっけ?」

『違うわよ。何も知らないのね。ツツジは春に、桜が散ってから咲くの。——だからこれは、帰り花よ』

「帰り花?」

『季節外れに咲く花。冬でもこんなふうに暖かいと、花が季節を間違えちゃうんだって。このツツジ、きっと今は春だって思ってるの』

うきうきと、不思議なくらい嬉しそうな声だ。
「ツツジが好きなの？」
『そうじゃないけど、……花が咲いてるところ、初めて見たから』
「初めて？」
『うん。本で見たことがあるだけ。いつも、ツツジの咲く頃にはもう眠っているもの』
ああ、そうかと太一は思った。
雪女は冬に咲く花しか知らない。春に、夏に、秋に咲く花々を見たことがない。
一生、ずっと。人間よりもはるかに長く、生きたとしても。
太一は屈み込んで、ツツジに顔を近づけた。そのほうが六花も、よく見えるはずだから。
『ねえ、ツツジって甘い蜜が出るんだって』
「へえ」
『花を採って、付け根のところを吸うの。やってみて』
「え……？」
『ねえ、お願い。あたしも花の蜜を吸いたーい。きっとおいしいだろーな。だからやって。早く早く』
ねだられて、仕方なく太一はツツジを指で摘んで、口にくわえた。
言われたとおりに花を吸うと、舌先にかすかに甘い味が広がった。

『わぁ、あまーい』
「わかるの？」
『――なんてね。嘘。身体の感覚がないんだから、味なんてわかるわけないじゃない』
なんだか、目の前でぺろっと舌を出されたような感じだ。
ふと見ると、犬を散歩させていた初老の女性が、ぽかんと花をくわえたままの太一を一瞥して、呆れたような顔で通り過ぎて行った。
（ひょっとして、からかわれたのかな）
慌てて花を捨て立ち上がったとたん、クスクスと笑っていた六花が、ぽつりと言った。
『でも、ちょっとくらいは、甘いのわかるかなって思ったんだ』
「――」
『あのね。あたし、花を見に行ったの。……身体が溶けちゃった時』
「花を？」
植え込みを離れて歩き出しながら、太一は訊き返す。
『本当はね、あったかい間は氷室に戻ってなきゃいけないって、わかってたんだけど。でも少しだけ、一度だけ、冬には咲かない花が咲いているところが、どうしても見たかったから』
「それで、花を見たの？」
ううん、とため息をつくような声が返った。

『見なかった。その前に溶けちゃった』

「そう」

『しょうがないよね。だって、雪女だもん』

六花が身体を取り戻す時には、時期はずれに咲いた花たちは、多分もう枯れているだろう。その花を摘むことも、ツツジの蜜を自分で味わうことも、彼女にはできない。

冬しか知らない雪女が、他の季節に咲く花を望むのは、それがけして叶わないことだとわかっているから、少し哀しかった。

その胸の中の小さな痛みが自分のものなのか、それとも流れ込んでくる六花の感情なのか。——太一には、わからなかったけれども。

その夜、夢を見た。

空一面に、花びらが舞っている。薄紅や白、黄色に水色。冷気の中に凛と咲く、冬の花々の鋭く鮮やかな色ではない。ふわりふわりと淡く柔らかな霞のように、それらは風に乗って、掴み取ろうとどれだけ手を伸ばしても、届かなかった。

あと少し、あと少し。花びらに触れようとした指が、やがて陽の光に透き通り始めた。腕が肩が頭が胸が足が、空気に溶けるように消えてゆく。

身体がなくなる怖さよりも、花を掴めないことのほうが切なくて、消えてしまった手をいつ

までも空に伸ばしていた。
それは、多分……そうきっと、六花が見ていた夢だったのだろう。

6

「行ってきます」
翌朝、玄関を出た太一は、門の前で植木の手入れをしているレンの姿を見つけて、思わず立ち止まった。
レンもすぐに気づいて、気まずそうに目を伏せる。
（今日はバイト、休みなのかな）
いつもなら、レンはとうに出かけているはずの時間だ。
（……どうしよう）
こんな時は、本当にどうしたらいいのかわからない。
「おはよう」と声をかけたほうがいいのだろうか。でも、レンはまだ怒っているかもしれない。だったら、黙って通り過ぎたほうが――。
迷って迷って、でもいつまでもそこに立ちつくしているわけにもいかなくて、太一はカバンを胸に抱きしめて歩き出した。ぐずぐずしていると、バスに乗り遅れてしまう。

結局、何も言えないまま、レンの傍らを行き過ぎた。

「ごめん」

と、小さな声が、足下を睨んで歩いていた太一の耳に届いた。

（え……？）

「言い過ぎたって思ってる。あんなこと、言うんじゃなかった。……嫌な思いをさせて、ごめん」

消え入りそうなレンの声が、背中でまた聞こえた。

太一の足が止まった。門の手前で。

地面を睨んだまま、唇を噛む。

（謝られたら困る）

太一はまだ謝ることができない。——だって、何ひとつまだ答を見つけていないから。

（何か言わなきゃ）

でも、どう言えばいいのかわからない。レンに返せる言葉が何もない。

どうしよう。——どうしよう。

このまま黙っていたら、次には口をきくきっかけを失って、もう二度と本当に謝ることさえできなくなるかもしれない。

「……あの」



言いかけて、太一は大きく息を吸うと、思い切って振り返った。
「教えて欲しいんだ。レンさんならわかると思うから……樹や草に訊いたら、きっと」
「何を？」
レンはちょっと驚いたように、目を瞠った。
またひとつ、太一は息をつく。勇気を振り絞って言った。
「帰り花の咲いている場所。それも、できるだけたくさん咲いているところ」

今日は昨日よりも少しだけ寒い。明日には北風が吹いて、気温は平年並みに戻ると、天気予報で言っていた。
学校が終わると、太一は空栗荘へは帰らず、そのままレンに教えてもらった花の咲く場所へと向かった。
そこは賽河原町の外れにある、古い民家の敷地だった。崩れかけた塀の中には樹や草が野放図に伸びた広い庭があり、とうに住人のいなくなった木造の家屋が置き去られたように建っている。
半分崩れかけた家を取り壊さずにそのままにしてある理由はわからないが、不思議と廃屋であってもそこは荒れた感じはせず、むしろ透き通って清々とした空気に満ちていた。
敷地に一歩入ったとたん、町の喧噪は遠ざかって、あたりはしんと静まった。陽射しが降り

落ちて、樹木の濃いところでは木漏れ日が踊っている。穏やかで、気持ちのいい場所だ。
『ここ……すごい』
六花が声をあげた。
そこにはまるで、季節がないみたいだった。
足下にはレンゲにタンポポ、冬枯れたはずの草むらに新しい緑が萌えて、家の周辺には赤紫のホタルブクロや黄色の菜の花が揺れている。
さらに視線を移せば、日だまりには深紅とピンクの秋桜。野菊。オシロイバナ。
樹木も見事だ。桜がぽつぽつと薄紅の花を灯し、その傍らには山吹の黄金とユキヤナギの白。傾いた軒から、小ぶりとはいえ藤が紫の房を幾つも垂らしていた。
どれもが仮初めの陽気に帰ってきた花たちだ。
『太一、月見草が咲いてるわ！　夏の花だって、知ってる？　すごぉい、思ったよりも大きな花！』
六花がはしゃいでいる。ふわふわと浮き立つような気持ちが伝わってくる。
（本当に花が好きなんだ……）
嬉しいというのは、こんなに暖かでくすぐったい感情なんだなと、太一は思う。
（よかった）
せめて、彼女に花を見せてやることができて。

たとえ昨日の夢のように、手を伸ばしても、けして触れることのできないものだとしても。

庭石に腰を下ろすと、足下でバッタがぴょんと跳ねた。小さな蝶が、花に絡みついて踊るように飛んでいる。ああ虫もいるんだと思ったとたん、庭の片隅の藪から、チチ、チチ、とか細い音が響いた。

『忘れ音』

六花が言った。

「ワスレネ？」

『うん。冬になって、それでもまだ生きていた虫たちが、暖かい日にはまだ秋だと思って鳴くの。でももう弱っているから大きな音は出せなくて、あんなふうに小さな声で鳴いているの。帰り花と同じ。季節外れに鳴く虫の声が、忘れ音』

「ふうん」

帰り花と忘れ音。どちらの言葉も、綺麗だけれどどこか寂しい。

春をひたすら待ちわびるものと、秋の終わりとともに尽きてゆくものと。ほんの一時のこの陽気が過ぎれば、消えていってしまうものたちだから。

（かわいそう）

（ずっと暖かければいいのに）

ふいに、きゅうっと胸を絞られるような悲しさがこみあげて、そんなことを思ってから、太

一はあれっと首を傾げた。
（そっか。これは六花の……）
六花の想いだ。季節を外した花や虫を憐れんで、寂しいと思ったのは。声には出さなくても否応なく伝わってくる彼女の感情に、うっかり引きずられてしまったらしい。
なんだか妙な感じだなと、太一は思った。
嬉しかったり、悲しかったり。自分の中でこんなふうに感情が大きく揺れることは今までなかったので、ずいぶん戸惑う。
「ずっといつまでも暖かかったら、雪女に戻れないだろ？」
言ってみたら、慌てたような声が返った。
『そんなこと思ってないわよ！　当たり前じゃない！　ずっと暖かかったら、溶ける雪女が続出よ。ストップ地球温暖化だわ』
それは北極の氷が溶けて死活問題のシロクマも、同意見だろうけど。
「あ、でも、例外もあるんだろ？」
『何よ』
「大家さんが言ってた――人間の男と結婚して、何年も一緒に暮らしていた雪女がいるって。それだと夏も溶けないでいられるってことじゃないの？　六花だって人間と結婚すれば、もしかしたら……」

一年中好きなだけ花を見て、自分の手で触れられる。人間と暮らすことだけが条件ではないのかも知れないけれど、でも六花の望みが叶う方法はもしかしてあるんじゃないだろうか。

そう思ったのに、六花の反応は冷ややかだった。

『ふーん。じゃあ太一があたしと結婚してくれるの？』

「しないけど」

『……なんで即答なのよ⁉』

ぶちっと何かがキレたような感覚。一瞬おいて、怒声が頭の中に響いた。

『だから男って嫌い！　無神経、バカ、鈍感、嘘つき！　あたし、結婚なんか絶対にしないんだから！』

どうして怒るんだろう？

「その、最後の嘘つきっていうのがわからないんだけど……」

『じゃあ教えてあげるわよ！　雪女は人間の男と結婚したって、一生一緒になんかいられないの』

「どうして？」

『いつもいつも、男のほうが約束を破るからよ！　ある日吹雪の中で、死にかけている男と運命の出会いを果たしたとするでしょ。おまえを殺さないかわりに、自分と会ったことはけして他人に言ってはいけないって言うと、男はわかったって約束するの。ところが後日、人間の女

のふりをしてその男のところへ行って、結婚して何年か経つと、必ず男はしゃべっちゃうのよ。――昔、自分は吹雪の中で雪女に会ったことがあるって。その女がおまえに似ているって！　あれだけ言わないって約束したくせに、ぜったいにっ、言うの。そういう法則になっちゃってるのっ！』

「へ、へえ」

『妖怪だってバレたら、もう一緒になんて暮らせないじゃない。そしたら二人の関係は破綻よ。あたしの一番上の姉様なんて、子供が二人もいたのに、泣く泣く子供を置いて男と別れなきゃいけなかったんだから！　信じられない、約束のひとつも守れないなんて、男ってどうしてそう無神経な生き物なの⁉』

すごい剣幕でまくしたてられて、太一は「んん」と曖昧な相づちを打つしかできなかった。

『だからあたし、男は嫌い！　一生結婚なんかしない！　でも太一はここに連れて来てくれたから、感謝してるからね。どうもありがとうっ！』

怒りまくっているついでに、感謝されてしまった。

『もしあたしが太一に、あたしと会ったことは誰にも言わないでって言っても、太一は絶対にしゃべっちゃうわよ』

「そんなことないと思うけど」

『嘘。信じられない』

「六花が約束しろって言うなら、言わないよ」
雪女はちょっと黙り込んだ。しばらくしてから、
『ふ――――ん。バカ』
なんだかわからない反応をした。
そうしていきなり、
『あ、太一、あそこ行って。玄関の横の窓の下！　ほら、三色スミレ！』
たった今まで怒っていたくせに、また楽しそうに笑った。
（わけがわからないや）
どうしてこんなに、ころころと感情が動くんだろう。妖怪だからか女の子だからか、それとも六花だからなのか、太一には未だに謎だ。
風が立って、かそけく足下の草を揺らした。
陽射しの暖かさと裏腹に、ひやりと肌に冷たい風だった。

テストが終わったので、夜はアカネの相手をして遊んでやった。買ってきた風船を膨らませていると、
「おい」
部屋のドアを叩く音がして、開けるとミヨシが顔を付きだした。

寝間着に半纏を羽織っている。仏頂面なのはいつものことだが、まだ少し顔色が悪い。
「ミヨシさん？　起きていいんですか？」
「熱はもうひいた。人を重病人みたいに言うな。――それより、外、見てみ」
「外？」
ミヨシが不機嫌に顎をしゃくったので、カーテンを開けて窓の外をのぞいてみた。
太一の部屋は前庭に面していて、空栗荘の門が見える。暗くて初めはわからなかったけど、しばらくして、その門のあたりをうろうろしている人影に気づいた。
「あ……和泉？」
「さいなだぁ」
一緒に窓にへばりついていたアカネが、叫んだ。
「どうしたんだろ」
「知るかい。さっきからずっと、あそこであしとるんや。おかげで気になって、おちおち寝てられんわ。なんとかせい」
「なんとかって……」
ミヨシはじろりと太一を睨んだ。
「どうせおまえに会いに来たんやろ。さっさと行ったれ」

「――やっぱり、やめとこ。ご飯食べてるかもしれないし、お風呂に入ってるかもしれないし、それに学校でも会えるのにわざわざこんなとこまで来て、図々しいとかおかしなヤツとか思われるかもしれないし」

胸に風呂敷包みと紙袋を抱きしめた格好で、栞奈はくるっと踵を返した。そのまま何歩か空栗荘の門から離れて、立ち止まった。

「でも学校で、これをいきなり渡すのはマズイよね。誰かに見られるかもしれないし、阿川君だって迷惑かもしれないし、同じ迷惑ならいっそここで渡しちゃったほうが……っ」

さっきからこの繰り返しで、門の前を行ったり来たりしているのである。

「あああ、どうしよう。……そうだ、十円玉を投げて裏か表かで決めればいいんだ。表だったらこれを渡す、裏だったらもう帰るって……うん」

「ねえ」

「うそ、お財布の中に五百円玉しかないっ。うぅ、なんかくじける……で、でもいいや、もうこうなったら、ちょっとおっきいけどこの五百円玉で」

「和泉ってば」

「え、何？　――きゃあぁ!?」

振り返った栞奈は、目の前に立っている太一を見て、悲鳴をあげた。

「何してるの？」

「あ、阿川君、あのその……これ！」
栄奈は持っていた風呂敷包みを、太一にぐいと押しつけた。
「おばあちゃんが魚の味噌漬け、親戚が正月に！」
「は？」
「ち、違う。そうじゃなくて、これはうちの親戚が送ってくれた自家製の魚の味噌漬けなの。毎年お正月用にって届けてくれるんだけど、たくさんあるから空栗荘の皆さんにもお裾分けで持っていきなさいって、おばあちゃんが。ほら、タケルのことでお世話になったから、お礼に」
太一は受け取った風呂敷包みを見た。
「えっと、そうすると、大家さんかお露さんに渡せばいい？」
「うん」
どうやらお届け物で来たらしい。でもそれなら、どうしてすぐに訪ねてこないで、門の前をいつまでもうろうろしていたのだろう。
（べつに、話をするのは俺じゃなくてもよかったと思うし）
「じゃ、おやすみ。阿川君」
「あ、うん。おやすみ」
栄奈は手を振って、走り出した。

そしてすぐに、立ち止まった。
まるで深呼吸するみたいに肩を上下させると、くるりとこちらを振り返る。早足で戻ってきて、手にしていた紙袋を太一に差し出した。
「あの、これ。……プレゼント」
夜目にもはっきりわかるほど、顔を赤くして栄奈は言った。
「え？」
「た、誕生日の」
そういえば、もうじき太一の誕生日だ。
「くれるの？　俺に」
「うん」
太一は紙袋を受け取った。千代紙のような綺麗な袋には、栄奈が自分で結んだらしいリボンがついていた。
「ええっと。……開けていい？」
「うん」
紙袋をのぞくと、中に入っていたのは、
「手袋？」
「ち、ちち違うから！　それ、軍手だから！」

軍手？

でも、毛糸の軍手ってあるだろうか。

「……軍手って」

「ほら掃除とか荷物運びとかに使うヤツ」

それは知っているけれども。

「軍手だから、一回使って汚れたら捨てていいからね。遠慮なく、ぽいってしちゃって。年末の大掃除にでも使ってね！」

「でも」

「それじゃ、本当におやすみなさい！」

太一が何か言うより先に、采奈は駆けだした。相変わらず、今にもコケそうな危なっかしい走り方だ。今度は振り返りもせず、あっという間に行ってしまった。もしかしたら、角を曲がったあたりで本当にコケたかもしれない。

あとに残されて、太一はぽかんとする。

しばらく手元のプレゼントの袋と、采奈が走って行った方角を見比べたあとで、呟いた。

「……でも、どうして軍手なんだろう？」

お露さんに届け物を渡したあと、太一は部屋に戻ってプレゼントを袋から取り出した。畳に

座って、じっくりと眺める。
「どう見ても、手袋だと思うんだけどな」
采奈が「軍手」だと言い張るそれは、暖かそうなグレーの毛糸で編んであった。甲の部分には白い雪の模様がついている。
手編みらしく、ところどころで編み目が不揃いだ。
（……ていうか、軍手と手袋の違いって何だっけ）
確かに軍手は使い捨てのイメージがあるけれど。
「太一、これ、さいなの匂いがする！」
アカネが彼の腕につかまって、のぞき込んだ。
「うん。和泉にもらったから。でも、匂いって？」
「あのね。ふわふわな匂い。お日様みたいにあったかい匂い」
「ふぅん」
『……ぶっ』
頭の中で突然、六花が吹き出した。今までずっと我慢していて、でもついにこらえきれずに笑いだしたみたいな感じだ。
『あははは、おっかしー。手編みの軍手だって。ありえなーい』
きゃらきゃらとひとしきり、賑やかに笑ってから、雪女は言った。

『それ、手袋よ。あの子が太一のために編んだの。きまってるでしょ』
「だけど、和泉は軍手だって」
はあ、と大きなため息が聞こえた。急に大人びた口調で、
『もう、わかってないわね』
「何が？」
『あの子、きっと太一のためにそれ、一生懸命編んだのよ。手袋って、編むの難しそうだもん。でもね、その一生懸命を押しつけられるのって、相手にとっては負担かもしれないでしょ？』
「そう……なのかな」
『そうよ。一生懸命やりました頑張りました、だから認めてください自分の努力にみあうだけ応えてくださいって、そういうの、頼んでないんだし迷惑って思う人もきっといるわよ。もしかしたらこれを渡しても、太一は嬉しくないかもしれないし、逆に困るかもって、あの子は思ったんじゃない？　でもどうしても渡したくて、それで軍手だって言っちゃったの』
「軍手ならいいの？」
うん、と六花はまた笑いを噛み殺すような声で言った。
『だって、使ってすぐに捨ててかまわないものなら、あとに残らないし、もらったほうも気を遣わなくてすむもん。それなら渡しても迷惑じゃないでしょ？　……ぷぷ、でもでもやっぱりおかしいー。きっとぐるぐる考えすぎちゃって、わけわかんなくなっちゃったのよ。だって、

誕生日に軍手をプレゼントする人なんて普通、いないもーん。あはは』

太一は、手袋を手にはめてみた。

大きさはぴったりだ。

（これ……もしかして）

前に、采奈に頼まれてとった手形。小説の資料だとか言っていたけど、本当はこのためだったんじゃないだろうか。手袋を編むために、太一の手のサイズを知るために。

六花が言うように、これを編むのはきっと大変だったと思う。だって、この出来はどう見ても、編み物が得意な人間の作品とは思えない。

（いつ編んだんだろう）

期末テストがあったのに。

学校に遅刻しかけたり、目を赤くしていたり、遅くまで起きているって言っていたから、きっとテストの勉強を頑張っているんだと思っていた。——でも、もしかすると本当は、そうじゃなくて。

『それ、かっこいいよね。あったかい？』

「うん」

同じだ、と太一は思う。

昼間、六花が廃屋の日だまりで花を見ていた時に伝わってきた感情。同じものが、今は太一

の中にもある。

ふわふわと浮き立つような、くすぐったい気持ち。

嬉しいということ。

不思議だった。手袋なんて、店で買ってくればもっと綺麗でちゃんとしてるし、采奈だってわざわざ無理して編まなくてもそのほうがずっと楽だったはずだ。

それなのに、この手袋をもらったことが、太一は嬉しい。

「――」

ちり、と急に胸の中で何かが跳ねた気がした。小さな痛みが。

（あれ？）

前にも似たようなことがあった気がする。それは……。

――頑張ってつくってくれているのに、なぜそんなことを言うんだ。

父の啓介の言葉。

「鈴子」さんの料理のまずさに閉口して、「無理につくらなくても、外で出来合いのものを買ってくれば」と言った太一に、啓介は怒った。

間違ったことは何も言っていない。買ってきたもののほうがおいしいし、「鈴子」さんだって無理して料理をつくらなくても出来合いを買ったほうが楽なはずだ。そう思ったから言ったのに、なぜ怒られるのか太一にはその時、わからなかった。

（あのクッキーの時も……）

——どうせ送ってくるなら、手作りなんてしないで、店で買ったものにしてくれたらよかったのに。

——太一君は、そんなふうに思うんだ？

（俺……）

胸の痛みは、まるできゅっと引っ掻かれるみたいだ。

（ひどいこと、言ったのかな）

だって、もし今栄奈に「手袋なんて買えばいい」と言ったら、それはとてもひどいことだと思うのだ。

もしそんなことを言ったら——きっと、栄奈は傷つくだろうから。

「太一、どうしたの？」

紙袋のリボンをいじって遊んでいたアカネが、小首を傾げて彼を見た。

「え、なんでもない」

「ねえねえ、このリボン、アカネに結んで」

「……うん」

リボンの結び方なんてわからなかったけど、古都子がやっていたのを思い出して、見よう見まねでアカネの髪に結んでやった。

やっぱりあまり上手にはできなかったけど、金色のリボンはアカネのクリーム色のワンピースによく合って、付喪の少女は嬉しそうに笑った。

『ちょっと、急に落ち込まないでよ。こっちまで気分が暗くなるでしょ！』

けんけんと六花の声が響いた。

「落ち込んでなんか」

『落ち込んでますー、沈んじゃってますー。何よ、たった今まで手袋もらって喜んでたくせに。じめーっとしちゃって。間借りしてるあたしの身にもなってよね。浮かれたり滅入ったり、ころころ変わって、ほんっと子供なんだから』

悪いが六花に言われたくない。

『世の中、取り返しのつかないことって、そんなにはないわよ。えっへん、五十二年生きてるあたしが言うんだから、間違いないわ』

「雪女がうっかり溶けちゃって、おまけに男に取り憑いたのは？」

『う……、そんなにはって言ったでしょ。たまにはあるのよ』

胸が痛い想いをした時、その痛みを消す方法があるなら、それは取り返しがつくということなのだろうか。

太一は手袋をはめた指を目の前で広げた。

――君は他の人のことなんか、何も見てないよ。

自分が何を見ていなかったのか、もう一度考えたらわかるだろうか。
ずっと先延ばしにしていた、その答を見つけられるだろうか。
（家に……）
太一は唇を噛んだ。
（家に帰ろうか）
父とその再婚相手に、家に帰ってもう一度会ってみよう。
空栗荘（からくりそう）に来てから初めて、太一はそう思った。

7

ありがたいことに翌日は土曜日で、学校は休みだった。
予報どおり、朝から北風が吹いて気温はいきなり平年並みに戻った。どんよりと曇って陽射（ひざ）しがないからよけいに、寒々しい。
「明日はもっと寒くなるらしいですよ。寒気が南下しているそうですから」
「はあ」
「あ、太一君。ミカン食べます？」
「いえ、いいです」

「ちゃんとコタツに入って、ぬくぬくしていてくださいね。何があっても身体を冷やさないように。もし六花さんが固まっちゃったら、今までの苦労が水の泡ですから」
「あの、大家さん」
「はい」
「ていうか、暑いんですけど」
どういうことかというと、太一は今、柊二郎の部屋で褞袍を着せられ、毛糸の帽子までかぶせられて、コタツに入っている。朝食がすんだとたんに、有無をいわさずここに引っ張り込まれたのだ。部屋はストーブと火鉢でがんがんに暖められているので、ちょっとした我慢大会みたいである。
「もう少しの辛抱です。さっき、工房に行った古都子さんから連絡がありましたから」
「え、それじゃ……？」
「はい。六花さんの型になる木像が仕上がったそうですよ。今頃、こっちに向かっているはずです」
柊二郎はすまして言った。彼のほうは薄い作務衣を着ているだけなので、褞袍でダルマみたいに着ぶくれている太一よりは、よほど涼しいに違いない。いいですねぇ日本の冬、などと呟きながら、自分も太一と差し向かいでコタツに足をつっこんで、幸せそうにミカンを食べている。

「六花さんもお疲れさまでした。でもせっかく太一君と仲良くなったのに、お別れするのは残念ですねえ」

『べつに、ちっとも残念じゃないわよ』

六花が意地っ張りに、つんとした声で答える。

「あははー、そうですか」

火鉢の五徳の上で、鉄瓶がしゅんしゅんと湯気をあげている。

「太一君。暇ならババぬきでもします？」

「二人でですか」

「んじゃ、花札」

「やったことありません」

「じゃ、六花さんと三人でしりとり」

発想がアカネと同じである。

「ではいきますよ。雪女。『な』です」

「ナメクジ」

『ちょっと何よ、「じ」って。――じじい』

「女の子がそんな言葉を使っちゃダメですよ。いなりずし」

しばらくそんな調子でしりとりをつづけてから、



「あ、そうそう。君の身体から六花さんを引き離すのは、ミヨシ君にお願いすることにしました。十遠見さんはまだ出張先ですから、戻るまで待っているわけにもいきませんし」

それに十遠見さんだとぼったくられますからね、と柊二郎はつけ加えた。

「大丈夫なんですか？　ミヨシさん、昨日はまだ顔色がよくありませんでしたけど」

「彼はたいてい二、三日は寝込んでますけど、そのあとはケロリとしてますよ。心配しなくても、今日あたりはもう絶好調。……そのあたりがまあ、逆に不安でないこともないですけど」

何しろ力まかせなうえにどこか大雑把ですからね彼はー、六花さんを吹っ飛ばして消しちゃったりしないようよく言っときましたけどー、などと大家はむにゃむにゃ言っている。

急に玄関のほうが騒がしくなった。すぐにお露さんがやって来て、

「古都子が帰ってきたよ。――なんだい、蒸し風呂かねこの部屋は」

「おお、待ってました！」

柊二郎はのそのそと部屋を出て行って、賑やかな話し声を引き連れて戻ってきた。なんだか大人数いるみたいだ。

「はい、こっちにお願いします」

柊二郎のあとからやってきたのは、狢だった。布をかぶせた木像を抱え上げている。つづいて姿を見せたのは、ろくろっ首とクロ爺。カラスはばさっとコタツのテーブルに舞い降りると、太一の目の前でカアカアと笑った。

「おまえさん、雪女に取り憑かれたそうじゃの。ヒダルガミの時といい、よくよく妖怪に憑かれやすい体質とみえる」

どうして妖怪たちがここにいるんだろうと、太一は首を傾げながら、

「……今日は玄関から中に入っちゃって、かまわないんですか？」

「駄賃じゃよ。見物したいと言ったら、今日のところは空栗荘に入ってもいいと柊二郎から許しがでての」

すっかり見世物あつかいだ。

最後に古都子とお露さんが部屋に入ってきた。

「木像をどうやって空栗荘に持ってこようかと思っていたら、クロ爺が狢を呼んできてくれたの。ここまでリヤカーで運んでもらって、助かったわ」

古都子の言葉に、柊二郎は「どうもお手数をおかけしましたねえ」とニコニコと妖怪に礼をのべた。

「なに、たいした荷でもねえしな。そっちの兄さんにも言ったこったが、こいつは乗りかかった船ってね。そもそもその場に居合わせた縁てやつさ。もっともろくろっ首は、頼みもしねぇのに勝手について来やがったんだけどもよ」

狢が肩をすくめると、ろくろっ首はふんと鼻を鳴らした。

「言ってるよ、トンチキが。もとはと言えばアタシのせいなんだから、にーさんに一言詫びを

いれなきゃ筋が通らないじゃないか」

ひゅるりと首を伸ばして、ろくろっ首は太一の顔をのぞき込んだ。

「ふふ。すまなかったねぇ、にーさん。狢からすっかり聞いたよ。まさか影走りのやつが、にーさんにまでちょっかいかけるなんて、思わなかったものだからさ」

「い、いえ」

太一が慌てて答えると、ろくろっ首は赤い唇を艶っぽく歪めて笑った。

「でもまあ、よかったよ。これで収まるところに収まりそうじゃないか。ねえ、あんた」

と、これは六花に話しかけたらしい。

はい、と雪女は殊勝に答えた。

『ありがとうございます。姐さんにはお世話になったのに、ちゃんとお礼を言っていなくて』

「そんなことはいいさ。礼ならここの人間たちに言うんだね」

太一から六花の言葉を聞いて、ろくろっ首はニィっとまた笑って首をもとに戻した。

「で、こいつは本当にここでいいのかい？」

狢が、床の間の前に据えた木像を眺めて訊いた。木像にはまだ布がかけられたままである。

ええ、と古都子はうなずいた。

「太一君もこっちへ来て。六花さんに見せてあげなきゃ」

言って、布に手をかけると、はらりとそれを取り去った。

布の下から、甚五郎が彫り上げた像があらわれる。
おお、とその場にいた全員が声をあげた。
感動とは別の意味で。
「……」
「……」
「……」
そのあと、みんなでなんとなく無言になる。
「わあ、とってもビミョーな空気」と古都子。
「……なんだね、これが雪女の型かね？」
お露さんがまず、呆れたように言った。
「あー、オイラにゃその、高尚なことはわからねぇんだがよ。こいつは彫りかけの棒っきれじゃねぇのかい」
狢が小指の先で耳の後ろを掻きながら言えば、ろくろっ首とクロ爺もそれぞれ首を捻っている。
「アタシにも目鼻と手足のついた棒っきれにしか見えないねえ」
「ううむ」
実際それは、人間を象った像というには、ずいぶん中途半端なものだった。大きさは太一よ

りも少し丈が低い。木から大急ぎで彫りだしたみたいに、荒々しい鑿のあとまでそのままだ。頭の部分に顔の造作はしてあるが、でもどんな顔というほどきちんと彫ってあるわけではない。手足はかろうじて手と足とわかる程度で——要するに美しい女の姿以前に、妖怪たちが言うように、人間のかたちをした棒きれというほうが正しいシロモノである。

「ええと、古都子さん。これはもしかすると、心が清く純粋な者にだけものすごい美女に見えるとかそういう呪いのかかったアイテムですか？」

柊二郎が目をぱちぱちさせて、そんなことを言う。

「そうですって言ったら？」

「僕は心が清いので、だんだん美しい乙女の姿に見えてきました。……あいたっ」

真顔でうそぶいた大家の後頭部を、お露さんがゲンコツで殴った。

「そんなわけないだろ。古都子、どういうことなんだい？」

「うん。太一君はどう思う？」

「え……」

古都子はくすくすと笑っている。訊ねられて、自分にも棒のようにしか見えないと、太一が答えようとした時だった。

『これ、あたしだわ』

六花が突然、さも驚いたように言った。

太一はぽかんとして、もう一度木像を見た。
「どういう意味？」
『だから、あたしなんだってば』
（まさか、雪女ってもともとこんな棒みたいな姿だとか⁉）
それはちょっと……いやまあ、いいけど。
「あの、六花がこれは自分だって言ってますけど」
伝えたら、案の定、全員が絶句した。
ただ一人、古都子は平然と「正解よ」とうなずく。
「あなたにはこれが、溶ける前の自分の姿に見えるのね？」
『ええ』
直接訊かれて、六花はきっぱりと答える。
「すごいわ。さすが師匠」
「ええとですね、古都子さん。こっちにはさっぱりなんで、そろそろタネ明かしをしてもらえませんでしょうか」
柊二郎がぽりぽりと頭を掻いて言った。
「あ、ごめんなさい。——つまりこの木像は、雪女に新しい姿をあたえるためのものじゃなくて、以前の姿に戻すためのものなの」

「以前の、ということは、溶ける前の六花さんの姿ですか」
「そう。いくら溶けてしまったからといって、生まれもった顔や姿を失って別人のものに変わってしまうのは、やっぱり寂しいことじゃない？　少なくとも、師匠の理屈としてはそうなわけ。だから六花さんがもとの姿を取り戻せるよう、念をこめてわざとこういう像をつくったのよ。むしろ自分の好きなイメージで精巧な木像を仕上げるほうが、楽だったと思う」
なるほどね、とお露さんが納得顔で言う。
「ということは、この像の見てくれはこんなでも、雪女が取り憑いて身体が固まれば、ちゃんと本来の顔と姿になれるってことなんだね」
「ええ」
「――けどよ。確かにあんたの師匠の腕はてぇしたもんだが、それでもなぁ。本当に大丈夫なのかい？」
狢が疑わしげに口をはさめば、ろくろっ首も心配そうに、
「そうだよ。もし万が一、こんな棒っきれみたいな姿のままで固まっちまったら、どうするのさ」
大丈夫、と古都子はにっこりした。
「師匠が前にも雪女のために像を彫ったって話は、柊さんや太一君にはしてあるけど、その時もこの方法でもとの姿に戻したらしいわ。それに、六花さんにはもう自分の姿が見えているわ

けだし」
「ふぅむ」と、クロ爺が呆れたような感心したような声で唸った。「なんとも奇天烈な男じゃの、甚五郎は」
「六花も、新しいのよりもとの姿のほうがいいの？」
こっそりと太一は訊いてみた。
『戻れるなんて思ってなかったから、全然考えてなかったけど。……うん。やっぱり戻ることができるなら、もとの自分の姿がいいな』
少し間をおいて、大きくうなずくような六花の声が返る。
うん、と太一も言った。
「きっとそうだね」
『あのね、太一』
「何？」
『……ううん。やっぱりいい。なんでもない』
「さて。そうすると六花さんにはこちらの像に移ってもらうことになるわけですが。そのためにはまず、太一君の身体から離れてもらわなくちゃいけません。――六花さん、太一君、覚悟はいいですか？」
柊二郎に言われて、

「はあ」
覚悟って何のことだろうと思いながら、太一はうなずいた。
「ではお露さん。こっちはOKですので、ミヨシ君を呼んできてください。彼は、部屋にいるはずですから」

「――なんや、おまえら」
柊二郎の部屋に来てまず、妖怪たちを見てミヨシは顔をしかめた。
「大家も一緒になって、なにコタツでなごんどるねん」
というのも柊二郎と妖怪が、みんなで見物人よろしくぬくぬくとコタツを囲んでいたからである。カラスのクロ爺が、上掛けからちょこんと黒い頭だけをつきだしているのがご愛敬だ。
「よう、ミヨシ坊。あいっかわらず可愛げのねえ面だなあ」
煙管を片手にくつろいだ様子で狢が言えば、ろくろっ首とクロ爺もすかさず、
「そうだよ。たまにはアタシらに愛想のひとつも言ったって、ばちはあたらないだろうにね」
「おまけになんじゃい、その格好は。術者がこういう場で、セーターに半纏はなかろう。他が半人前なら、せめて服装だけでも一人前にしてみたらどうじゃ」
三者三様にからかわれ、ミヨシは「こいつらいつかまとめてお祓いしたる」と歯ぎしりして呟いた。

で、次に木像を見て、何か――多分みんなが最初に思ったのと同じことを――言いかけたのを、

「その問題はもうすんでいるんだよ。言いたいことはわかるし、あとでゆっくり説明してやるから、さっさと始めな」

お露さんが二度手間とばかりに、ぴしゃりとさえぎった。

「じゃあ太一君、準備はいい？」

木像の横に立つ古都子に言われ、覚悟同様、準備もよくわからなかったのでまごまごしていると、

「褶袍を脱いで帽子をとって、こっち座れ」

ミヨシにぐいと襟首を摑まれて、太一はその通りに木像の前に座った。

「あのー、ミヨシ君。前にも言いましたけど、くれぐれもお手やわらかに。六花さんは人間で言えば、まだ女子中学生なんですからね。うら若き乙女はデリケートなんです」

コタツから声をかけた柊二郎を、ミヨシは横目で見て、

「わかっとる。一番安全な方法でやれて言うんやろ」

木像の前に正座している太一の背後に立った。

「よっしゃ。歯ぁ食いしばれ」

「え？　歯？」

『……太一、あの』
その時、六花の声がした。
『あのね、あたしね』
最後まで聞くことはできなかった。
「ほな、いくで――！」
気合いとともに、ミヨシは後ろからどかっと太一を蹴飛ばした。
「うわっ」
背中に足形がつきそうなほどの衝撃に、太一は座ったまま前につんのめって、畳に貼りついた。
そのままげほげほとむせて、少しばかり呼吸困難になる。
「ごほっ、げほっ！　……あ？」
一瞬、驚いて本当に息が止まるかと思った。
ぶわっ。
白いもやもやしたものが、太一の口から噴き上がった。蒸気のような、煙のような。
溶けた雪女が。
それは空中で渦を描き、束の間まるでのぞき込むように太一の顔の前で揺れていたが、やがて。

吸い込まれるように、木像の中へと消えていった。
「すんだで」
ミヨシはポンポンと手をはたく仕草をして言った。
「……あんたね。そりゃ蹴り出したって言わないかい？」
お露さんがげっそりしたように、まず思うところを述べた。つづいて、コタツにへばりついたままの大家が、
「あのー、一番安全な方法って言ってませんでした？」
「これが一番手っ取り早いし、安全な方法やろ。ヘタに術なんぞ使うより、よっぽどな。その証拠に雪女も無事、太一から離れよったし」
「しかし中身は無事でも、外の身があまり無事でなかったような」
「大丈夫、太一君？」
まだ畳の上で潰れている太一の傍らに、心配そうに古都子が屈み込む。
「は、はい。なんとか」
そうか覚悟ってこういうことか。でもそれだったら先に言っておいてほしかったと、太一は思った。
「やれやれ。どこまでいっても力業な男じゃのう」
「まったく乱暴だねぇ。女にはもうちょっと優しくすることを覚えないと、あれは先々苦労す

るよ」

「オイラ、何があってもあいつにだけは祓われたくねえ」

ひそひそ。妖怪たちは聞こえよがしに囁きあっていたが、

「――うるさいで、おまえら！」

ミヨシに剣呑に睨まれて、素知らぬ顔で口をつぐんだ。

「いてて……」

太一は背中がずきずきするのを我慢して、身体を起こした。

「六花？」

呼んでみたけど、当たり前だけどもう何の反応もない。

そっと心臓のあたりを押さえた。きっと六花は彼に取り憑いてから今までずっと、そこにいたのだと思う。だって、胸の中が急に、ぽかりと隙間が空いたような気がするから。

目の前の木像を見上げる。もちろんその像がしゃべりだすこともなかった。

「あとはこれを外に出して、一晩か二晩そのままにしておけば、無事に固まると思うわ。――ミヨシ、外に運ぶのを手伝ってくれる？」

古都子がてきぱきと指示する。

なんで俺やねんと文句を言いながら、ミヨシは木像を抱え上げた。

「で、どこに置いとくんや」

「んー、そうね。日当たりがよすぎても困るから、置くとしたら北側ね。ねえ、柊さん、そこの縁側の外でいいかしら。この部屋はちょうど北向きだし、誰かの姿がいつも見えていれば、六花さんも寂しくないと思う」

「それはかまいませんけど」

と、そろそろ眠くなってきたのか、空栗荘の大家はコタツに埋もれてあくびをしながら言った。

「でもいつも見られていると思うと、動物園のパンダになったみたいな気分ですね」

「うん。寝てばかりいるところが、特にそうね」

というわけで、冷たい北風と寒々とした冬空が戻ってきた、その日。

雪女の取り憑いた像は、空栗荘の北側の庭に置かれた。

妖怪たちはお露さんの手作りのあんころ餅を土産にもらって町へ帰り、空栗荘の住人たちはそのあんころ餅を食べながらみんなでお茶を飲んだ。

そうしてその夜まで、太一は頭の中の声にふと耳をすませている自分に気づいて、何度も戸惑った。

ついでにいうと大家は、部屋でコタツに入ったままうっかり寝てしまい、あやうく風邪をひくところだったらしい。

8

六花が木像に移って、三日目の明け方――。

クスクスと小さな笑い声を聞いたような気がして、太一は目を開けた。

まず思ったのは、ものすごく寒いということだった。布団の中にいても、ぞくぞくする。室内の空気が氷のように冷たく尖って、吐く息が白い。

（なんだろう、これ？）

半分寝ぼけながら、太一は思った。

クスクスクス。笑い声が、またした。すぐ枕元で。

「太一」

呼ばれて、聞き覚えのある声だと思ったとたん、いっぺんに目が覚めた。

身体を起こすと、くしゅっとクシャミが出て、太一は慌てて掛け布団を肩の上から身体に巻きつけるように羽織った。

部屋の中は電気をつけていないのに、ぼうっと明るい。雪明かりの薄青い明るさだ。

布団の横に、少女が座っていた。

そうやって正座していると、長い黒髪は畳に触れそうなくらいだ。雪のように白い肌。純白

の着物に氷の色した銀の帯。
雪女は、ちょっと猫を思わせるような、可愛いらしい顔をしていた。勝ち気で少し生意気そうで、でもどこか幼さを残していて。
「ちゃんともとに戻ったんだ……」
太一が言うと、うん、と六花はうなずいた。
「これが溶ける前のあたしの姿。どう？」
これまでずっと頭の中で聞こえていた声が、今は耳に届く。なんだか不思議で、くすぐったい。
どう、と訊ねられてちょっと困って、
「ええっと、イリオモテヤマネコの子猫に似てると思う」
太一が言ったら、六花は力が抜けたように肩をさげた。
「……それ、ほめてるの？」
「うん」
いつだったか、テレビでイリオモテヤマネコの子猫を保護したというニュースをやっていて、その子猫がまだほんのおチビなのに、ケージの中からシャーシャーふうふうと強気に人間を威嚇しているところが映っていた。それが野生っぽくて人に媚びてなくて、でも太一にしては珍しく、とても可愛いと思ったのだ。

「ふーん。いいけど。ほめてるのなら」
六花は唇を尖らせて、けれどもすぐに笑った。
部屋の中はしんしんと寒く、吐く息はますます白い。さすが雪女だ、とそんなことを太一は思う。
「ねえ、太一。あたし、訊いたでしょ。あたしのこと誰にも言わないでって頼んだら、太一は黙っていてくれるって？　それで太一は、黙ってるって言ったよね」
なんとなく二人して黙り込んでから、六花は小首を傾けて言った。太一の中にいた時と同じ、なんでもない会話のつづきみたいに。
「うん」
「べつに本当に秘密にしといてって言うつもりはないけど。でもね、もしそんなふうにあたしが頼んでも、きっと太一はいつかしゃべっちゃうと思うの。あの子に」
「あの子って？」
「あの手袋の子」
「和泉？」
太一は首を傾げた。
自分はきっとしゃべらないと思う。それになぜ、采奈なのだろう？
「あたし、男は嫌いっていっぱい言ったよね。嘘つきだから。約束、守れないからって」

「……うん」

六花はまた笑う。不思議なことに、それは今まで見せていた表情と違って、なんだか少し悲しげで大人びた笑みだった。

男なら年を重ねなければできない顔を、女の子はまだ子供といわれるうちからもうできるのだと——それは、太一がずっとあとになって思うことだ。

本当はね、と六花は囁くように言った。

「わかってたの。だって、姉様が言っていたんだもの。——男は、本当に愛していて大切な相手には、隠しごとができないんだって。その人のことが好きで愛しているほど、秘密にしていることがあったら、それが自分の中でどんどん大きく膨らんじゃって、苦しくて、いつか必ずしゃべらずにはいられなくなるんだって。……だから」

雪女は、自分を心から愛してくれる人間の男とは、けして最後まで一緒には暮らせない。

「そんな悲しい想いをするくらいなら、ぜーったいに人間の男なんて好きにならないって、あたし決めてたの」

また意地っ張りな子供の顔に戻って、六花は言った。

（そうだったんだ……）

大切な人に隠しごとはできないというのは、たとえばテレビのドラマや小説なんかで聞いたことのあるセリフだけれども、本当のことなのだろうか。

少なくとも、今の太一には実感はない。自分のような人間には、一生理解できないことかもしれないとも思う。

「太一は、あの子にいっぱい黙ってることあるでしょ？」

「え？」

「でも、いつかきっとあの子に言っちゃうよ。全部」

「……だ……ど……はっくしゅんっ！」

だからどうして采奈に、と訊ね返そうとして、太一は盛大なくしゃみをしてしまった。布団にくるまっていても、冷凍庫の中にいるような気分だ。

それでも一応、六花には伝わったらしい。

けど。

「教えてあーげない。そんなの、自分でわかりなさいよーだ」

ちょっと憎まれ口のように言って、六花は立ち上がった。室内には風などないのに、長い髪があおられたみたいに、ふわりと揺れ動く。

とん、と爪先で畳を蹴ると、それだけで六花の身体は羽毛のように軽やかに、窓のそばに降り立った。

カーテンと窓を開けるとその向こうは、冬の夜明け前の藍色の薄闇だ。

「六花？」

「もう行くわ。あたし、雪女だから。ここにずっといたら、太一が凍っちゃうもん」
そう言った時には、六花は窓枠に手をかけていた。振り返って、やっぱり子猫みたいな顔で微笑む。
「待って。あのさ、……何を言いかけたの？」
「何って？」
「最後に。俺から離れる時」
あ、と口に手をあてて、六花は少し迷うような表情を見せた。
「あのね、えっとぉ、太一とはちょっとしか一緒にいなかったけど、あたし男なんか嫌いって言ったけど、本当は太一といる間楽しかったって、そのことをちゃんと伝えなきゃって思ったの。でもうまく言えなかった。ごめんね」
小さな子供みたいに、もじもじしながら、
「それから、あと――さようならって」
（あ、そうか）
これでもう、さようなら、だ。
（……あれ？）
胸がかすかに疼いた。
おかしいなと思う。六花はもう彼の中にいないのに、こうして目の前にいるのに、彼女の感

情のかけらがまだ太一の中に残ってしまっているみたいだ。
別れるということ。誰かがいなくなること。それは心にぽかりと隙間が空くように寂しいことなのだと、胸の小さな痛みが伝えている。
と、六花は急に、ニッと口の端をあげて、いたずらっこのような顔をした。
「って、言おうと思ったけど、やーめた」
「え……？」
太一はきょとんとする。
六花は声をあげて笑うと、ふわりと窓枠に飛び乗った。
「またいつか、会いに来るね。遊びに来るから。その時は太一、うーんと厚着してね」
「……え、あの、ちょっと⁉」
雪女は藍色の薄闇の中へ、飛び出した。
まるで重さがないみたいだ。長い髪と白い着物の袖が、水の中にいるみたいにゆるりと空中にひるがえって、窓の外に消えた。
太一は掛け布団をひきずって、窓に駆け寄った。
前庭。空栗荘の門。その向こうの街。慌てて見渡しても、わずかに透き通り始めた風景の中、六花の姿はどこにもない。
ただ、楽しそうな笑い声がずっと遠くで聞こえたような気がした。

「あ……」

ひらりとその時、白いものが舞った。

思わず太一は空を見上げる。

上空には重く垂れ込めた雲。けれども朝未(あさまだ)きの青い闇が広がる地上よりも、不思議と空は明るかった。雲そのものが、薄青く光をおびているみたいに。

粉のように細かな雪が、はらはらと落ちてくる。

――その日、賽河原町に初雪が降った。

三章　冬燈（ふゆともし）

1

冬休みに入る前の、最後の日曜日。青い空に雲ひとつない冬晴れの日だった。

今日にしよう、と太一（たいち）は思った。

日曜なら啓介（けいすけ）も昼間に家にいるはずだし、明日学校があると言えば泊まっていけと無理に引き留められることもないはずだ。だから今日しかない。

昼ご飯のあと、夜は外で食べるとお露（つゆ）さんに言って、太一は空栗荘（からくりそう）を出た。実家に戻るとは、誰（だれ）にも告げなかった。

空栗荘で暮らすようになってから初めて、家に帰ることを太一は決心した。父と、父の再婚相手に会うために。

――今日行かなければ、きっとまたその決心は鈍ってしまう。そうして、この先ずっと帰る機会を失ったまま、同じ場所で足を止めたまま。ぐずぐずと迷って、いつまでも答を見つけることを先延ばしにしてしまうかもしれなかったから。

だが。

（……やっぱり、やめようかな）

見慣れた駅。見慣れた風景。

一人暮らしを始めるまでずっと利用していたその駅で電車を降りたとたん、太一の決心は早くもぐらついた。

今さらだが、啓介や「鈴子さん」に会って何を話せばいいのだろうと思う。家にいた頃と同じように、重苦しい空気の中で互いに気を遣って、どうでもいい当たり障りのない会話を繰り返して、ただ疲れるだけで終わりそうな気がする。

考えただけで、息が詰まって逃げ出したくなった。

（引き返そうか）

簡単なことだ。このままもう一度、電車に乗ってしまえばいい。どうせ実家には、今日帰るともなんとも伝えていないし。ここには来なかったことにして、空栗荘に戻ればいいだけだ。お露さんには、予定がかわって外で夕食を食べるのはやめたと言えば。

（でも……）

前に聞いた柊二郎の言葉を、太一は思い返す。

――「どうでもいい」というのは、無関心です。「いらない、必要ない」という意味です。

どうでもいいとは、もう思わない。もしかしたら自分に見えていなかったことがあるのだろうかと、一瞬でも思ってしまったから。

太一は重いため息をつくと、ちょうどホームに滑り込んできた電車から離れて、駅の改札へと向かった。

チャイムを押すと、いきなりドアが開いた。不用心だからインターフォンで相手を確認してからドアを開けるようにと、何度か啓介が注意したはずだが、相変わらずのようだ。

「あの、ただい――」

ただいまと、全部言えなかった。出てきた相手の姿を見て、太一はぽかんとした。

(誰だ、この人?)

一瞬、本気で疑問に思った。

その女性は、なんだかよれよれの格好をしていた。古くてのびたみたいなトレーナー、しかも可愛い猫のプリントつき。だぼだぼのコットンパンツ。毛先の跳ねた髪をヘアバンドでまとめている。牛乳瓶の底みたいなレンズのぶ厚いメガネをかけていて、しかも目の下には黒いくまがあった。

古都子に訊かれて、「鈴子さん」がどんな人かうまく説明できなかった太一だが、さすがにこういう人でなかったことくらいはおぼえている。



「鈴子さん」はメガネをしていなかったし、いつもきちんとした服装をしていたし、髪は肩までのストレートでこんなにクシャクシャじゃなかった。

「太一君⁉」

でもやっぱりその人は「鈴子さん」だった。

太一を見てぎょっとした顔をして、「鈴子さん」は固まった。固まるという表現はよく聞くけど、実際に固まった人を目の前で見たのは初めてだ。

ノブを握ってドアを開けた格好のまま、玄関でぴくりとも動かなくなってしまった相手に、太一はおそるおそる声をかけた。

「鈴子さん？」

息を吹き返したようにハッと目を瞠ると、「鈴子さん」は慌ててヘアバンドとメガネをとった。

「ごめんなさい。違うの、いつもはこんなじゃないのよ。でも昨日はうっかり、徹夜でペン入れしたものだから――！」

「はあ？」

ペン入れ？

「とにかく入って。中に入って。――啓介さん！　啓介さーん！」

太一を玄関に残したまま、「鈴子さん」は奥へ駆け込んだ。居間から顔を出した啓介に、「あ

とをお願い！」と叫んで、バタバタと階段を駆け上がっていった。
ひとつ思い出した。「鈴子さん」は、なぜかよく家の中を走っている人だった。
「太一？　帰ってきたのか。どうしたんだ？」
啓介は息子を見て、驚いた顔をした。
「そんなところにいつまでも立ってないで、あがれ。――自分の家なんだから」
居間に入ってコートを脱ぐと、太一はソファに腰をおろした。
なんとなく、室内を見回す。何ヶ月ぶりかだが、家の中の様子は何も変わっていなかった。置いてあるものも、家具の配置も、彼が家を出た時のままだ。
だが、太一はひどく落ち着かない気分になる。生まれ育った自分の家なのに、なんだか部外者としてこの場所に紛れ込んだような違和感をおぼえてしまう。
それは、久しぶりに帰ってきたからではない。家を出る前から、そんな空気は感じていたのだ。――「鈴子さん」と一緒に暮らすようになってから。
ある意味馴染み深い、その違和感までもが、以前と少しも変わっていないというだけのことだ。
「帰ってくるならくると、先に連絡くらいしろ」
啓介はつけっぱなしになっていたテレビを消して、ソファとセットになっている一人がけ用の椅子に座った。

「もう冬休みか？」
「いや、まだだけど。明日も学校あるし」
「じゃあ、空栗荘で何かあったのか」
「べつにそんなことないよ」
啓介は少し困った顔をした。自分でも素っ気ない言い方だと思ったので、太一は慌ててつけ加えた。
「考えてみたら俺、一度も家に帰ってきてなかったから。大家さんに、たまには親に顔を見せてこいって言われて」
「柊二郎が？」
「うん」
嘘をついた。
そういえばこの家では、誰かを傷つけないための嘘や言い訳ばかり重ねていたなと太一は思う。
そうか、と啓介はうなずいた。
「空栗荘では元気にやっているようだな。時々柊二郎に電話をしておまえがどうしているか訊いたんだが、いつも心配ないという返事だった」
「うん。大家さんもあそこに下宿している人たちも、みんな親切だし、いい人たちだから大丈

夫だよ」

「帰ってこないのは、一人暮らしが楽しいからだろうと思っていた。鈴子は心配して、一度くらい空栗荘におまえの様子を見に行ったらどうかと言ったんだが、何か困ったことがあればおまえのほうから連絡をよこすだろうし、そうでなければ男の子なんだから平気だと言っておいたんだ」

「うん」

その啓介の言葉も、きっと嘘だ。「鈴子さん」が啓介に空栗荘へ行くことを勧めたのは、本当かもしれない。そして啓介がそうしなかったのは――多分、太一と同じ理由だ。

太一が家へ戻ってくることに抵抗があったのと同じように、啓介も空栗荘へ来て息子と会うことを躊躇っていたのだと思う。

会っても、こんなふうにぎこちない会話にしかならないのが、わかっていたから。

「……あのさ、父さん」

「なんだ？」

「鈴子さん、どうしたの？」

正直、彼女のことだけは予想外だった。

啓介はちらと天井に目をやると、「ああ」となんでもないことのように言った。

「メガネをコンタクトに変えて、服を着替えて、化粧をしているんだろう」

「どうして？」
「おまえと一緒に暮らしていた時には、いつもそうしていたぞ。気がつかなかったのか？」
太一は目を瞬かせた。
「知らなかったけど……女の人って、家にいる時もお化粧してるの？」
「それはまあ人それぞれだし、状況にもよるだろうが。おまえが家を離れてからは、鈴子はコンタクトも化粧もしていなかった」
ますますわからない。
「それって、俺に気を遣って無理をしていたってこと？」
啓介は肩をすくめた。
「俺もそう思って、そんなに気張らなくてもいいと言ったんだが……どうも、そういうことでもないらしく……いや、気を遣っていたことにはなるんだろうが」
あやふやな口調になる。
「多感な十代の男の子というのは女性に対して美しい幻想を抱いているものだから、自分がそれをぶちこわして、おまえが女に失望したりしたら一生取り返しがつかなくなる、とかなんとか言っていた」
「は？」
さらに、ぜんっぜんわからなかった。

「それにおまえがいきなり友達を連れてくるかもしれないし、ガールフレンドが遊びにくるかもしれないし、その時に自分がすっぴんでみっともない格好をしていたらおまえに恥をかかせるから、とも言っていたな」

「――」

連れてくる友達なんていないのに、と太一は思った。ましてや……ガールフレンド？

（どうしてそんなこと、思うんだろう）

半年間一緒に暮らしていれば、「鈴子さん」にだって太一がどんな人間か、イヤでもわかったはずだ。他人とうまくつきあえなくて、クラスメートとろくに口もきかないような人間が、家に友達なんか連れてくるわけがない。

そう考えてから、太一は唇を噛んだ。

（まさか……そんなこと全然、わかっていなかったとか？）

半年。同じ家にいて。毎日顔を会わせていて。

彼女にも、太一のことはわからなかったのかもしれない。

太一自身が、「鈴子さん」のことを何も知らないように。

――毎日顔を会わせていても、互いのことを知る会話など、何ひとつしなかった。

黙り込んだ太一を見てどう思ったのか、啓介は軽いため息をついた。

「とにかく自分は母親がわりに同居する人間なのだから、おまえに対する責任はどんなことが

あっても果たすと……こっちが何を言っても、頑として譲らないんだ」

「鈴子さん、そんなこと言ってたんだ」

母親がわり。考えもしなかった。太一の認識では、「鈴子さん」は父親の再婚相手でしかなかった。

「なんか、鈴子さんてすごい人だね。高校生の息子がいるのに、父さんと結婚して。いろんなこと苦労するって、わかってたはずなのに。俺のことまでそんなふうに責任を感じてるなんて、思わなかった」

普通に考えれば、とてつもない決心が必要だっただろうことは、わかる。世間一般からすれば「鈴子さん」のような人は、献身的で愛情にあふれた素晴らしい女性ということになるのだろうと、太一は思う。——無関係な他人事のように、そう思った。

だが啓介は息子をまじまじと見つめると、いささか複雑な表情をした。

「いや、それは違うな」

「違うって？」

啓介はしばらく言葉を選ぶように考え込んで、大真面目に断言した。

「鈴子は考え方や感覚が、明後日の方角くらい世間の常識とズレているんだ」

「……は？」

その時、バタバタとまた足音が聞こえて、「鈴子さん」が居間に姿をあらわした。

うわ、と太一は思わず口の中で呟く。女の人ってすごいと思った。

そこにいるのは、太一が記憶していたとおりの「鈴子さん」だった。さっきのよれよれの女の人はどこにもいない。

フェミニンなブラウスにカーディガン。フレアスカート。毛先の跳ねていた髪は、肩までのストレートになっている。よく見れば確かに化粧をしていて、目の下のくまもきれいに消えていた。少し痩せた、濃いピンクの口紅の似合う、ものすごくというほどではないけど普通に綺麗な女の人だ。

とりあえず、見た目だけでもちゃんとおぼえておこう、と太一は思った。次には古都子に説明できるように。

ところが困ったことに、脳裏にさっきの瓶底メガネと、猫のプリントつきののびたトレーナーと、太一を見てうろたえたまま固まった顔がちらついて消えない。それくらいすごいインパクトだったのだ。

「太一君、お風呂に入る？　すぐに入れるから」

開口一番、「鈴子さん」は言った。

なぜいきなり風呂なんだろうと、太一は思いながら、

「いえ、いいです。空栗荘に帰ってから入るから」

「え、今日は泊まっていかないの？」

「明日、学校があるし」
「じゃあ夕食ね。今すぐ支度にかかるから、ちょっと待っててね」
しかし時計を見ると、一般の家庭ではせいぜいおやつの時間である。
「いくら何でも夕食にするには早すぎるだろう。なんだったら、今夜は寿司でもとって――」
啓介は言いかけたが、
「今からつくり始めなければ間に合わないわ。今夜は、太一君の好きなハンバーグをつくるの。修業のためにミンチを常備しておいてよかったわ」
「鈴子さん」はとてつもない決意を秘めたみたいな表情で、テーブルの上に置いてあったエプロンを摑むと、パタパタとキッチンに駆け込んでいった。啓介の言葉は、素通りしたようだ。
もうひとつ、太一は思い出した。そういえば「鈴子さん」は、他人の話をあまり最後まで聞かない人だった、ような気がする。
(なんか……わりとマイペースな人なのかな?)
思い出してそんなことに気がつくというのも、妙なことだ。彼女のそういう部分を一緒にいて目の当たりにしていた頃には、太一は何とも思わなかった――というか、無関心だった。
それにしても、またあの味の薄いぼそぼそのハンバーグを食べさせられるのかなと、太一がうんざりしていると、
「ハンバーグか……」

啓介も物憂げに呟いた。
「今日はやめておいたほうがいいんだがな」
意味不明なことを言っている。
居間にいる男二人の心の声とは無関係に、キッチンからはがちゃんがちゃんと食器や調理器具を取り出す音が聞こえてきた。
「……あのさ。修業って何？」
訊ねた太一を横目で見て、啓介はため息をついた。
「それは俺の口からは言えんな。おまえに黙っていてくれと、言われているんだ」
「――」
（でも、ハンバーグをつくるだけなのに）
上手に焼くための修業だろうか？　普通は料理をつくる時に、そんな言葉は使わないと思うのだが。
「さっき、世間とズレてるって父さん、言ったけど」
「ん？　ああ。そうだな、どこか夢の中に住んでいるというか、時々こちらが驚くほど世間に疎いところがあるし、おまけに思い込みが強いからいったんこうと思い込むと、人の話を聞かずにそのままどこまでも突っ走るようなところがあって――」
「……誰が？」

「誰って」
啓介は驚いたように、息子を見た。
「鈴子の話をしていたんじゃないのか？」
太一は思わず啓介を見つめた。
とりあえず「鈴子さん」が他人の話を聞かない部分だけ、同意だ。
だめ押しのように、啓介は言った。
「しかも、恐ろしいほどのポジティブ思考だ」
ポジティブというのはたいてい長所だと思うのだが、なぜかそうは聞こえない。
何かヘンだな、と太一は思う。
さっきからどうにも何かが噛み合わないような、しっくりしない感覚があった。いつもこの家にいて感じていた違和感とは違う、別の落ち着かなさに、太一は戸惑った。
太一が記憶しているこの家の風景の中に、啓介が言うような「鈴子さん」はいない。
憶えているのは、ぎこちない気詰まりな空気。いつも「家族」が互いに息をつめて気を遣いあっているような、息苦しくて逃げ出したくなるような、日常の様々な場面。
それが太一の中で今、小さな波のように揺れて、ぶれ始めていた。
「鈴子さん、俺が空栗荘に行ってから性格変わった？」
「いや。前からああだ」

啓介は不思議そうに太一を見た。
「むしろ、おまえがそんなに鈴子のことに興味を示すようになったことに、驚いている。以前は、鈴子にはまったく関心がないという顔をしていたからな」
変わったのは――。
がっしゃーん！
その時、キッチンで何かをひっくり返すような、けたたましい音が響いた。

「……ミ、ミンチ……ミンチが手にくっついて……」
音に驚いてキッチンに駆けつけると、「鈴子さん」は床にへたり込んでいた。青い顔でうわごとのように「ミンチがミンチが」と繰り返していたが、そのミンチはボールごと下に落ちて床に飛び散っていた。
「そりゃ、くっつきもするだろう。ハンバーグの材料をこねているんだから」
やっぱりというように吐息をつくと、啓介は「鈴子さん」を支えて起こした。
「どうしたの？」
訊ねた太一に、
「貧血を起こしたんだ」
短く答える。

「……ミンチ……床……ぐちゃぐちゃ」

「いいからとにかく、まず手を洗いなさい」

流しで鈴子さんに手を洗わせてから、啓介は彼女の身体を抱えて居間へ運ぼうとした。太一も慌てて手を伸ばして、反対側から「鈴子さん」を支えた。

啓介を手伝おうと思った。それだけだ。

だが、「鈴子さん」の腕を摑んだ太一を見て、啓介は驚いた顔をした。その顔を見て、

（……あれ？）

自分で自分の行動に、太一も驚いた。

これまで、具合の悪くなったミヨシやレンの身体を支えたり、ろくろっ首の抜けてしまった首を拾い上げたり、アカネにきゅうきゅう抱きつかれたりといった数々の経験をしていたおかげで、他人に触れることには、ほとんど抵抗がなくなっていた。触れられると、まだ身が竦んだが。

ただ、とっさに、ごく自然に誰かに手を伸ばすことのできた自分に、太一は驚いたのだ。

啓介と一緒に「鈴子さん」を居間に運んで、ソファに寝かせた。そのあと二人でキッチンの床に飛び散ったミンチを片付けて戻ってくると、

「どうしてダメなのかしら。……あんなに修業したのに……」

目をつぶって横になったまま、「鈴子さん」はふにゃふにゃした声で言った。

「今日は無理しないほうがよかったんじゃないか？　昨日寝ていないから、体調がよくなかったんだろう」
「……徹夜明けでボケた頭なら、逆に平気なんじゃないかと思って」
「だからそういう無駄に前向きな姿勢はやめなさい」
はあぁ、と啓介は長いため息をつくと、
「もう太一に言うぞ。このままじゃ、説明のしようがない」
「ダメ。今日は失敗したけど、次は大丈夫なのよきっと」
「これ以上黙っていたら、話がややこしくなる。そもそも太一が家にいた時に、きちんと言っておくべきだったんだ。多分こいつは、君のことをとんでもない味覚オンチだと思っているぞ」
「鈴子さん」は諦めたように黙った。
太一はぽかんとして、啓介を見る。
（ということは……味覚オンチじゃないってこと⁉）
信じられない。
啓介は太一に向き直ると、今まで黙っていたがと言った。
「鈴子はものすごい偏食なんだ」

聞いてみたら、好き嫌いが多いというレベルではなかった。
野菜と卵と乳製品は大丈夫、魚貝もなんとか食べられる。甘いものは嫌い。料理としては揚げ物全般が苦手。
肉は牛、豚、鶏およびそれ以外もすべて受けつけない。食べるどころか、気持ち悪くて触ることもできないらしい。
「じゃあ、こんなふうに貧血を起こしたのって……」
「まあ、ミンチはな。生肉に触れない人間には、かなりキツイな」
太一は呆れてソファの傍らに突っ立っていた。
(ああ、だから)
なんだかいろいろなことが、いきなりストンと腑に落ちた気がした。
油でべとべとのエビフライ。甘すぎる鶏の照り焼き。しょっぱすぎるチンジャオロース。焼きすぎてゴムみたいになったステーキ。それに比べて野菜の煮物や和え物、魚の料理は普通に食べることができた。——その理由が、ようやくわかった。
(自分で食べられないから、うまく料理ができなかったんだ)
他人に不用意に触れられると、気持ちが悪くてぞっとする。その感じを、太一は思い出す。
「鈴子さん」にとって、大嫌いな肉に触るというのもそれと同じことなのだとしたら……。
「もしかして、鈴子さんが修業って言ってたのは」

「なんとか慣れて平気になるために、いつも冷蔵庫にミンチを買い置きしていて、時々触る練習をしていたんだ」

啓介は苦い顔で答えた。

（触る練習って……）

彼女にとっての一番の不幸は、太一の好物がハンバーグだったことだろう。

「そんなに無理しなくても……最初に言ってくれればよかったのに」

「俺もそう思って、できないものは作らなくてもいいと言ったんだがな」

啓介がもごもごと言ったとたん、

「――そんなのはダメよ！」

「鈴子さん」はがばっと身体を起こした。けど、「あ、目の前に星が」と呻いて、またソファの肘掛けにふにゃっと頭を落とした。

「太一君は育ち盛りの食べ盛りなのよ。ウサギじゃあるまいし、毎日野菜ばかり食べているわけにはいかないのよ。成長期に必要な栄養を摂取しないと、頭と身体が丈夫じゃない大人になるわ。年をとったら骨粗鬆症で骨がすかすかになるわ。それに偏った食事で私みたいな偏食になったら、すごく困るわ」

「こいつは今さら偏食の始まる年齢でもないと思うが」

「え、そうなの？」

とりあえず、太一の健康を気遣ってくれていたというのはわかったけど、その結果があの料理の数々だとしたら——もし「鈴子さん」が本当の母親だったら、自分は今頃きっと肉と揚げ物が大嫌いになっていたに違いないと、太一はこっそり思った。申し訳ないけれど。

「食事が偏るのが心配なら、いざとなれば外食でもかまわないと言っただろう」

「それは絶対にイヤです。うちは両親が共働きで、母が料理大嫌い人間だったから、手作りの料理が並ぶ一家揃っての食卓なんてめったになかったの。だからこそ、私は断言するわ。家族の絆は食卓よ。その食卓には手作りの温かい料理が必要よ」

寝たまま拳を握って、断言されましても。間違っちゃいないだろうけど。

(知らなかった。鈴子さんて、こんなにしゃべる人だったんだ)

しかも啓介が言ったように、思い込んだら本当に他人の言葉には耳を貸さずに突っ走る人らしい。

「あの、でも、肉が嫌いとか黙ってる必要はなかったと思うけど」

太一が言うと、「鈴子さん」は横になったまま首を曲げて彼を見た。それは、と急に口ごもった。

「私が無理してつくってるって思ったら、太一君は嬉しくないでしょう？　だって、食事のたびに毎回毎回、あなたたちのためにこんなに頑張ったのよって言っているみたいじゃない。私だったらそんなの、嬉しくないわよ」

「――」

「母がそういう人だったわ。たまに料理をつくると必ず言うのよ。大変だった、頑張った、感謝しなさいねって。仕事が忙しいし料理が嫌いなんだから確かに大変だったと思うけど、そんなふうに押しつけられると、味なんてわからなかった。そのせいね、私は母の料理の味が全然思い出せないのよ」

そうか、と太一は思った。

――一生懸命やりました頑張りました、だから認めてください自分の努力にみあうだけ応えてくださいって

――その一生懸命を押しつけられるのって、相手にとっては負担かもしれないでしょ？

六花がそう言っていた。

だから。「鈴子さん」が言いたいことが、太一にもわかった。

（でも、ものすごく頑張ってつくってくれていたんだ）

肉に触るのも嫌なのに、ミンチをこねてハンバーグをつくってくれた。揚げ物が嫌いなのに、エビフライやトンカツをつくってくれていた。

「鈴子さん」が何も言わなくても、毎日ちゃんと見ていれば、それくらいのことは気がついたはずなのだ。

でも、気がつかなかった。太一は何も見ていなかった。「鈴子さん」のことを。

――頑張ってつくってくれているのに、なぜそんなことを
ようやく、本当にようやく今になって、太一は啓介が怒った理由を理解した。
ごめんなさい。
小さく小さく、口の中で呟く。きゅっと引っ掻かれるような、胸の痛みとともに。
あの時の「鈴子さん」――鈴子さんに。
「クッキーも、甘いのが嫌いなのに焼いてくれたんだ」
え、と鈴子さんは太一を見た。
「空栗荘に宅配で送ってくれたやつ」
「あ、あれね。……どうだったかしら?」
「え……あ……おいしかった」
のあとに、(って他の人が言ってた)と心の中でつけ加える。だから嘘はついていない。
ところがそのとたん、鈴子さんは「えええっ!?」と叫んで跳ね起きた。今度は目眩は起こさなかったようだ。
「おいしかったの?」
「は、はい(他の人が)」
鈴子さんはまじまじと太一を見つめると、
「太一君、味覚は大丈夫?」

この人にだけは訊かれたくないことを言った。
「あのクッキーは喉が焼けるほど甘かったぞ。おまけに石みたいに固いから、歯の詰め物が取れて、俺は歯医者に駆け込む羽目になったんだ」
啓介も呆れた顔で太一を見る。
そうして二人で顔を見合わせると、
「あれ、まずかったわよね？」
「ああ。まずかった」
うなずきあった。
太一はしばらく、何を言っていいのかまったくわからずに、啓介と鈴子さんを見ていた。
「焼いている時に一応味見をしたんだけど、だんだん舌が麻痺して味がわからなくなってしまったの。それでも焼きたては、まだ少しは柔らかかったのよ。だからできるだけ見た目のよさそうなのを選んで、太一君に送ったのだけど」
鈴子さんは言い訳するみたいに、まくしたてた。
「次の日に啓介さんと一緒にもう一度食べてみたら、あんなとんでもない出来でしょう？　慌てて宅配の会社に連絡をしたら、もう車に乗せたって言うし。いっそ車のナンバーを聞いて、空栗荘に着く前にその車の前に飛び出して止めて、送ったクッキーを奪い返そうかと思ったんだけど、啓介さんにそれはやめろと言われてしまったの。運転手さんに迷惑だから」

いくら自分が送ったものでも、宅配車の前に飛び出して荷物を奪い取ったりしたら、犯罪にならないだろうか。それ以前に生命が危ない。

「仕方がないからすぐにそっちに電話しようとしたのだけど、もしもう食べていたらどうしよう、きっと太一君は困っているか怒っているに違いないわと思ったら、連絡もしづらくて。迷っているうちに何日も経って、結局電話をするタイミングを逸してしまったの。……あ、それから一緒に送った手紙だけど、本当はもっといろいろなことを書くつもりだったのよ。でもいざとなったら緊張して何を書いていいのかわからなくなって、本当はもっと故郷宅配便のお母さんの手紙っぽくしたかったのに、あんな短冊の願い事みたいな内容になってしまって。——ねえそれで、あのクッキー、本当においしかったの？」

鈴子さんはものすごく疑わしげに、また訊いた。

ここまで言われて、それでもまだ「おいしかった（他人の意見だけど）」と答える勇気は、太一にもない。

「いえ、あの……甘くて固かった、です」

渋々そう答えたら、鈴子さんはホッとした顔をした。

「ああ、よかった。私の料理のせいで、太一君の味覚がおかしくなったのかと思ったわ」

自分の料理の味についての自覚はあったらしい。

とにかく、これでハッキリした。

あのクッキーはまずい。それは間違いない。なにしろ、つくった本人がそう言っているのだから。

そうして太一は、もうひとつ結論を出した。

(鈴子さんて……ちょっとヘンな人かも)

次に古都子に訊ねられたら、そう答えよう。

鈴子の大反対を押し切って結局、夕食は出前の寿司をとった。

で、食べ終えたとたん、鈴子は電池が切れたみたいにパタっとソファに倒れて寝てしまった。

そのまま、声をかけても揺すっても起きない。爆睡だ。

「仕方がない。しばらくこのまま寝かせておこう」

啓介は寝室から毛布を持ってくると、鈴子の身体にかけた。

「そういえば昨日は徹夜したって言ってたけど……ペン入れって?」

おや、という顔で啓介は息子を見た。

「言ってなかったか?」

「何を」

「鈴子は漫画家なんだ。結婚してやめたから、もとプロだが」

「……えぇ!?」

太一が呆気にとられていると、そうか言ってなかったかと啓介は苦笑した。

そのあとの啓介の説明によると、鈴子さんは『豆花みずき』というペンネームで漫画を描いていたらしい。聞いたことのない名前だと太一が言うと、「本人が言うには、それほど売れていなかったらしいぞ」という啓介の答だ。ともあれ、売れっ子ではないにしろ地道に漫画を描いて生きてきた鈴子さんは、啓介との結婚を機に主婦業に専念すると宣言して、本当にそのとおりに漫画家をやめてしまった。

「父さんがやめろって言ったの？」

「まさか。俺は逆に漫画をつづければいいと言ったんだ。だが何しろ、いったんこうと決めたら、もう他人の話を聞かない性格だから……」

啓介は肩をすくめて、眠っている鈴子さんを横目で見た。

その眼差しが優しいから、太一はなんとなく思った。——ああ父さんは本当に、この人が好きなんだと。

「鈴子さんて、幾つだっけ」

「三十一……いや二になったかな。漫画家としてデビューしたのは、十代の頃らしいぞ」

「へえ」

「鈴子と知り合って、初めて彼女の漫画を読んだ。この歳になって漫画のことはよくわからんが、いい話だと俺は思った。確かに人目を引くような派手な絵ではないかもしれないが、暖か

くて、しみじみとする話で、なるほどこういうものが描ける人なんだと感心したんだ」
「それで結婚したの？」
啓介はちょっと黙り込んでから、きまり悪そうに「いや」と口ごもった。
「いざつきあいはじめると、これがずいぶん素っ頓狂で――」
学生から漫画家になった鈴子さんは、社会というものをあまり知らないせいか、マニアックな知識はあっても一般常識にはわりと疎かった。時々よくわからないことで落ち込んで、よくわからないことであっという間に立ち直った。純粋で前向きなのはいいが、前を向きすぎてよく暴走した。――簡単に言えばそういうことになる鈴子さんの武勇伝を幾つか聞いてから、太一は訊ねた。
「なぜそれで鈴子さんと結婚しようと思ったわけ？」
そうだな、と啓介は言った。どう答えようかと考え込むようにしてから、
「見ていて飽きなかったからかな」
「……」
よくわからない。わからないが、
（父さんは、今度は母さんとは全然違うタイプの人を選んだんだな）
太一はそう思った。
「鈴子は今、同人誌で漫画を描いている。おまえが家を出てから始めたんだが、次に出す本の

締め切りが近いとかで、昨日は徹夜だったんだ」
やっと「徹夜」と「ペン入れ」の謎が解けたところで、太一は目を瞬かせた。
「でももう漫画はやめるって、本人が言ったんだろ？」
「俺が勧めたんだ。また描くように」
「どうして」
「鈴子は漫画を描くことが好きなんだよ」
啓介はまた寝ている鈴子さんに目をやって、小さく微笑んだ。
「好きでずっとやっていたことを、たった一度の思いつきでやめられるわけがないだろう。だから、プロでなくても、多少家のことがおろそかになってもかまわないから、もう一度漫画を描けばいいと彼女に言ったんだ」
ぽつりと、言葉をつけ足す。
「気づかないふりをして、また同じことを繰り返したくはなかったからな」
太一は父親を見つめた。
それから、時計を見た。もう帰らなければならない時間だ。そう思って、驚いた。
啓介とずいぶんたくさん話をした。ここへ来る前は、何を話せばいいのかわからなかったのに。話すことなんて、もしかしたらないんじゃないかと思ったのに。
啓介も気がついたように時計を見て、もうこんな時間か、と言った。

「うん。そろそろ空栗荘に帰らないと」
「だったら、駅まで送っていこう」
「いいよ、べつに……」
だが啓介は、自分のコートを取りに立ち上がった。

駅まで数分の距離を、啓介と二人で少しゆっくりと歩いた。
白い息が、黒に近い藍色の冬の夜に滲む。通り過ぎたスーパーの店内から、賑やかなクリスマスソングが聞こえていた。この時期、街には華やかなイルミネーションと、赤と緑の色彩と、クリスマスに定番の音楽があふれている。
「――実を言うとな、おまえが空栗荘で暮らすことになったのは、杉二郎に頼まれたからじゃない。俺のほうからあいつに頼んだんだ。おまえを預かってくれと」
傍らの父親の言葉に、太一はうんとうなずいた。
「多分そうだろうなって思ってた」
「そうか」
短い沈黙のあとに、啓介はふたたび口を開いた。
「鈴子にはずいぶん文句を言われたよ。まだ高校生の息子を、一人で下宿させるなんてとんでもないとね」

「鈴子さんが反対したの？」
「ああ。……鈴子はずっと、おまえとの関係はうまくいっていると思っていたんだ」
「――」
太一は言葉を失った。
一緒に暮らしていた頃のことを思い出して、一体どのあたりがうまくいっていたんだろうと思う。
「正直なところ、家にいた時のおまえは鈴子にはまったく無関心だった。ところが鈴子に言わせると、高校生の男の子があれくらい素っ気ない態度をとるのは当たり前ということらしい。しかもおまえが少しずつ心を開いてくれていると、本気で思い込んでいた」
「……どうやったら、そんなふうに思い込めるわけ？」
あのぎこちない、気詰まりな空気の中にいて。
それともまさか鈴子さんは、そんなものは感じていなかったのか？
「だから、ズレているんだ、いろいろと」
啓介は吐息をついた。
「おまえのことも真理子と離婚することになった経緯も、一応話してはいたんだが」
「だけど鈴子さんは、俺にものすごく気を遣っていなかった？」
「不自然なくらいにな。でも彼女は、そうすることが正しいと思っていたんだ。小説でもドラ

マでも、血の繋がらない息子に対する義理の母親というのはたいてい、あれくらいは気を遣っているものだからと」

「だってそれ、小説やドラマの話だろ？」

「そういうものと現実の区別があまりついていないのが、鈴子の不思議なところだ」

啓介は肩をすくめる。

ふたたび短い間をおいて、急にきっぱりとした声で言った。

「つまりな。わかるか？　鈴子は、何も気づいていなかったんだ。おまえの問題について。一緒に暮らしていても、何も見えていなかったんだよ」

「え……」

見えていない。その言葉に、太一もドキリとする。

「おまえが他人に興味を示さないこと、何にも関心を持たないこと、笑わないこと――そのことに気づいていないのなら、このままではまずいと思った。確かに鈴子はずっと『家族』になるための努力をしてくれたし、おまえのためにいろいろやっていたことは混じりけなしの好意からだったとしてもだ」

啓介は何を言おうとしているのだろう。太一は困惑した。聞くのが少し怖かった。

「本人がどんなつもりであろうと、思い込みで母親がわりの役をやって、そんなものがつづくわけはない。漫画を描くことだって、本当はやめられるわけがない。おまえも、このままでは

何も変わらない。このままではいけない。――今度こそ、俺は何とかしなければいけないと思った」

また、大切なものが壊れてしまう前に。

「だから俺に、一人暮らしをしろって言ったの？」

啓介は白い息とともに、ああ、とため息のような声を漏らした。

「おまえと鈴子、双方のためにもしばらく距離をおいたほうがいいと考えた。だが情けないことに、ではどうするかといえば俺は、息子を他人に預けることしか思いつかなかったんだ」

踏切の音が聞こえてくる。もうすぐ駅だ。

――太一。おまえ、しばらく一人で暮らしてみないか。

――おまえが部屋を借りれば、あいつも助かるわけだから。

嘘だと、あの時すぐにわかった。嘘のヘタな父親の、不器用な嘘。

だけど今思えば、それが嘘であるということしか、あの時の太一にはわかっていなかったのだ。

だから。

「厄介払いされたと思っていたか？」

啓介が躊躇いがちに言う。

だから、そう思っていた。自分は邪魔だったのだと。そしてそんなことすら、どうでもよ

かった。

駅の改札が見えたところで、太一は足を止めた。先に行きかけて、啓介が振り返る。

「ごめん。俺もさっき、父さんに嘘を言ったんだ。本当は大家さんに言われて帰ってきたんじゃなくて……そうじゃなくて」

「なんだ？」

「レンさんて覚えてる？　引っ越しの時に荷物を運ぶのを手伝ってくれた……あの人に言われた。俺、他人のことを見ていないって。逃げてるだけだって。それに、古都子さんて人がいるんだけど、その人にも言われたんだ。空栗荘を逃げ場にするなって」

「逃げ場というのは……」

「どういう意味なのか、まだよくわからないけど、でもわからないならちゃんと考えないといけないって思った。それで、父さんや鈴子さんとも話をしなきゃって」

必要なこと大切なことは何かと、時にさりげなく、時に一生懸命に教えてくれる人たちが、あそこにはいる。

「そうか」

啓介は息子に手を伸ばした。小さな子供にするみたいに、その頭を撫でようとしたのだが、太一はとっさに身体を後ろに引いた。

啓介は苦笑して、手を引っ込める。

「まだダメか」
「うん。……ごめん」
他人に触れられるのは、まだ怖い。
「空栗荘での暮らしは楽しいか？」
「うん」
「あそこは変わっているだろう？　人間と、その……」
「なに？」
「いや」
やっぱり父さんは、空栗荘がどんなところなのか——異界と繋がる場所だということを知っているんじゃないかなと、太一は思う。
「あそこはご飯がおいしいしね」
「……それだけでも、おまえを空栗荘にやったのは正解だと思っている」
啓介は心からのように言った。
「父さんは毎日、鈴子さんの手料理を食べているの？」
「まあ俺の場合は野菜料理がメインだからな。おまえと違って育ち盛りではないので、肉はそんなに食べなくてもいいんだそうだ。あと、腹回りのことを考えたら揚げ物もダメだと言われた。ありがたいことに」

ふたたび踏切が鳴り始めた。
「じゃ、もう帰るよ」
「ああ」
太一は改札に向かって歩きだしたが、思いついて啓介を振り返った。
「俺、冬休みに家に帰るから。大晦日は空栗荘で過ごすけど、年が明けてからそっちに戻って、二、三日泊まるよ。その時は化粧しないで、メガネのままでいいからって鈴子さんに言っといて」

2

空栗荘に帰ってくると、ちょうどお露さんが玄関のそばの立木の枝に、ガラスの提灯のようなものを吊していた。
夜の冷気を透かして、暖かな火色がほんのりと揺れている。周囲の樹木の葉が、柔らかに緑の色を浮き上がらせて、不思議と建物から漏れる光よりも、その小さな炎のほうが明るく見えた。
「おや、おかえり」
お露さんは太一に気づいて言った。

「これ何ですか？」
隣に立って太一が訊ねると、
「提灯ランプだよ。ほら、この丸いガラスの器の中に、火を覆うためのホヤが入っているだろう？」
お露さんは、ランプとそれを吊り下げた枝を見比べながら、あまり枝に近いと燃えちまうから気をつけなきゃならないのさ、と言った。
よく見ると、内側に細い筒型のガラスが仕込んであって、炎はその中で燃えている。これがホヤだろう。外側の丸い器は小さな花の模様を散らした磨りガラス、手に提げれば本当に提灯みたいだ。
でもどうしてランプなんて吊すのかな、と炎を見ながら太一がぼんやりと考えていると、まるでそれがわかったみたいにお露さんはニッと笑った。
「このランプは、どういうわけか冬至が近くなると、玄関のガラクタの山から出てくるんだ。火を入れろってことだろうから、毎年そのとおりにしている。もうずっと昔からね。一体誰がこんなもの、土産に持ってきたんだか」
「冬至とランプって、何か関係があるのかな」
太一は首を傾げる。
「ふん。ランプが関係あるものかね。前にも言っただろう。冬至は一年で一番日が短く、夜が

長い。この時期は陰の気がこもって、いろんなものの力が衰えちまうんだ。せめて火を灯して、陽の気を呼び込もうってことだろうさ。……まあ、これっぽちの火じゃ、気休めにもならないけどね」

でも、とお露さんはまた、ニッとした。

「寒さに凍えながら外から戻ってきた時に、こうして家の前に火が灯っているというのはいいものだ。なんだか気分があったかくなるからねえ。そう思わないかい？」

「はい」

本当にそうだと、太一は思った。

こんな小さな炎が、見ていて暖かくてホッとする。目印みたいに、早くおいで、帰っておいでと言われているような気がする。

「で、あんた、夕食はちゃんとすませたのかい？」

「あ、はい。食べてきました」

「ならいいんだけどね。まったく日曜だってのに皆して戻りが遅いから、ちっとも片付きゃしない」

ぶつぶつ言いながら、お露さんは玄関に入っていった。

あとにつづこうとして、ふと太一はランプの光がふわりと揺れたことに気づいた。風もないのに、としばらく炎に目をこらしてから、何気なく振り返ると、ちょうどレンが門からこちら

に向かってくるのが見えた。
太一に気づいて、レンは目を瞬かせた。
「ただいま」
「うん。……おかえり」
ふわり。ランプの炎がまた揺れる。おかえり、と。
「君も今戻ったの？」
「うん」
レンはランプの前で立ち止まると、そうかもう冬至なんだねと呟いた。
「今日もバイト？　こんな時間まで？」
「うん。クリスマスの予約が多いんだ。ツリーにするもみの木を買いに来るお客さんも多いしね。店が閉まったあとも、いろいろ手配したり伝票をチェックしなきゃいけなくて」
そう言って、レンはおっとりと笑った。
まるで太一との諍いなんてなかったみたいな笑顔だ。
でも、何もなかったことにはできなかった。太一は息を吸って、それをゆっくりと吐き出した。
言わなければいけない言葉があった。でも、その言葉は口にしたとたん、別のものに変わった。

「――ありがとう」
レンは驚いたように小首を傾げた。
「俺、今日、家に帰ったんだ。父さんたちと話をしてきた。レンさんに言われて……自分に見えていないものって何だろうって、ずっと思ってたから」
「そう」
「まだわかっていないことはいっぱいあると思うけど、でも前より少しだけわかったこともあって。……父さんが俺を心配してくれていたこととか……」
「うん」
何か、もどかしい。伝えたいことはたくさんあるはずなのに。どうして上手に言葉にならないんだろう。
こんなふうに、相手に何かをわかってもらうために話をすることなんて、今までなかったから。
「俺、あの時……ケンカした時、レンさんにひどいことを言いそうになったんだ」
太一は唇を噛む。心臓がドキドキしている。
「でも俺そんなこと、全然本気では思ってなくて、……スゴイなっていつも思ってるんだ。レンさんは植物と話ができてスゴイって……」
レンはじっと太一を見つめてから、

「帰り花のこと」
ぽつりと言った。
「え？」
「――どこに咲いているかって、僕に訊いたよね。あの時、嬉しかったんだ。だって、君はなんだかとても当たり前みたいに訊いてくれたから」
ふわっとレンは笑った。
「だから、知ってた。君が今言ったこと。僕の力をスゴイって思ってくれてること」
伝わった。伝わっていた。
太一は俯く。どうしてだろう。きゅっと胸が痛い。
どうしてだろう。その痛みは、少し甘くて不快じゃない。
ガラリと玄関の戸が開いて、お露さんがしかめっ面を突きだした。
「何をしているんだい。レン、あんた夕食がまだだろう。用意してあるのに、早く来ないと冷めちまうじゃないか。あんたもだよ、太一。茶を淹れてやるから、どうせなら中で話をしな。いつまでも二人でそんなところに突っ立っていて、風邪でもひいたらどうする気だい？」
その夜。
風呂に入ったあとにアカネと遊んでやって、さて今日はもう寝ようかと思っていた時だった。

廊下で物音が響いた。
がしゃがしゃと、金具をこすり合わせるような音だ。
（なんか、前にも聞いたことがあるような……）
太一がドアを開けてのぞくと、ちょうど隣のタカハシさんの部屋から落ち武者（むしゃ）が出てきたところだった。
しかも一人ではなかった。そのあとにもう一人、二人、三人……と一列になってあらわれた落ち武者は、全部で七人いた。
（増殖してるし）
落ち武者の群れはがしゃがしゃと鎧（よろい）の音をたてながら、規則正しく階段まで行進して、消えた。
「すまない。廊下は静かに歩くようにと、何度注意してもきかないんだ」
隣室のドア越しに、タカハシさんの声が聞こえた。
「え、いえ、鎧をつけていたら無理だと思います」
身体（からだ）半分、ドアからのぞかせた格好で、太一は慌てて言った。
「お友達、増えたんですね」
「いや。全員昔からの知り合いだ。彼らが生きていた頃（ころ）からの」
「――」

太一は考え込んだ。
落ち武者が生きていた頃。
(って、いつだろう?)
「……それって何百年か前のことじゃないんですか?」
「そうだな」
「タカハシさんはその頃から、そこにいたんですか?」
訊いたら、タカハシさんは黙ってしまった。少しして、微妙に困ったように、
「さすがにその頃に空栗荘はなかったよ」
それはそうだろう。
「じゃあどこにいたんですか?」
また沈黙があって、そのあと驚いたことにタカハシさんの笑い声が聞こえた。
「そんなことを訊ねられたのは、初めてだよ」
「あ……すみません。訊いちゃいけなかったですか?」
プライベートなことを質問して悪かったかもしれないと、太一が思っていると、
「いいんだよ。今まで誰も訊かなかったから、言わなかっただけだ」
タカハシさんはまだ笑っているみたいな声で言った。
「このあたりには昔、祠があって、あの武者たちは戦に向かう前によくお参りをしていたんだ。

手柄をたてられますようにと」
「はあ」
「その祠に祀られていたのが、私だ」
太一はまじまじと隣室のドアを見つめた。
なんだか今、さらりとすごいことを聞いたような気がする。
祠。お参り。だけど祠というのは確か——いや、人が普通お参りする相手というのは。
というか、祀られていたって。
「あの……もしかしてタカハシさんは、あのぉ……か」
言っていいんだろうか。口にするのが怖い。
「か……か……神様とか⁉」
「まあそれほどたいしたものじゃない。神といっても格下の、いわば地域密着型の名もない守り神だ」
タカハシさんは謙遜した。
「いえ、でもあの」
空栗荘に来て、ここの奇妙な住人たちや妖怪や妖かしの類は、わりと簡単に受け容れた太一だったが、さすがにこれは驚きを通り越して、呆然とする。
下宿した先の隣室の住人は、なんと神様だった。

（えっと、それって、神社の隣に住んでるようなもの⁉）

いや、それとはちょっと違うような……。

「しかしあの武者たちは間違えていた。私の役目は地域の安全を守ることであって、戦の手柄を望まれても困る。そっち方面はちゃんと他に、武運を担当する神というものがいるのでね。今となってはああして彼らが会いに来るたびに、昔話に花を咲かせて、あれはひどい勘違いだったと皆で笑いあっているんだ」

ノリは神様と落ち武者の幽霊たちの同窓会。まったくあの頃のおまえらときたらどうしようもない悪ガキで……とか、やだなあ先生俺ら青春まっただ中だったんすよでも今じゃすっかり真面目な社会人っすから……みたいな。

あまり想像したくない。

「すみません。俺、神様だなんて知らなくて。今まで、えっと……」

「かまわないよ。私はここでの暮らしが気に入っている。今までどおり、空栗荘の住人の一人として扱ってくれればいい」

「は、はあ」

でも怒らせたら罰が当たるんだろうな、と太一は思う。

（とりあえず、廊下でうるさくしないように気をつけよう）

「それじゃ、おやすみなさい、タカハシさん」

挨拶してドアを閉めようとしたら、「待ちなさい」と声がかかった。
「私に訊きたいことがあっただろう?」
「え?」
太一は戸惑った。
(タカハシさんに訊きたいこと……あったっけ?)
思いつかない。
「柊二郎が言っていた。君が私に食べさせたいものがあると」
「……あ」
鈴子さんのクッキーだ。
(確かに大家さんは、タカハシさんにも食べてもらえばって言ってたけど)
冗談だとばかり思っていた。
「でもあのクッキーはだいぶ前にもらって、もう古いし……」
「かまわないよ。何を食べても私は腹をこわす心配はない。人間はよく私にお供えといって食べ物や花を持ってきたものだが、私が食べるのはそれにこめられた想いや願いや祈りだ。そういったものは、古くなったりはしないからね」
「でも」
「いいから、持っておいで」

神様に命令されて、仕方なく太一はクッキーを取りに戻った。
本棚の一番上に置いてあった箱を下ろして、中を開ける。
ビニール袋に入ったクッキーを一枚取り出して、口に入れた。
「……やっぱり固い」
前に食べた時よりも、さらに固くなっている気がする。そしてやっぱり、とてつもなく甘い。
太一は急いで部屋の中を見回した。いくら何でもこのままタカハシさんに渡すわけにはいかないので、皿の代わりになるものがないかと思ったのだ。
見つけたのは、さっきまでアカネが遊んでいた折り紙だった。
(これでいいかな)
一枚を半分に折って、その上にクッキーを三つ載せる。それを持って部屋を出た。
「これ、どうすればいいですか?」
タカハシさんの部屋の前で、ドアに向かって話しかけると、
「床に置いてかまわない。ドアが開くところのなるべく近くに」
「はい」
言われた通りにした。
そうして後ろにさがって見ていると、ドアノブがゆっくりと回って、ドアが開いた。
ほんの一瞬だった。

わずか数センチほどの隙間が開いて、その奥に真っ黒な闇が見えた。紙の上に置いたクッキーがその闇に吸い込まれたように消えたと思った瞬間、ドアはもう閉まっていた。

太一はそこに立ったまま、軽く息をつめていた。ドアにかけられた174のプレートに目をこらしたまま。

タカハシさんの声が聞こえた。

「とてもおいしいよ」

太一は目を瞬かせる。ホッと息を吐いてプレートから目を逸らせると、床に置いた紙を拾い上げた。

そうして、もう一度真っ直ぐにタカハシさんの部屋のドアを見つめて、言った。

「はい。俺もそう思います」

3

冬休みに入り、空栗荘ではたいして盛り上がりもせずに——十遠見が一応、ケーキを焼いたが——クリスマスが過ぎ、大掃除の手伝いだの暮れと正月の準備だので慌ただしく過ごしているうちに、大晦日になった。

夕方、柊二郎が部屋に来た。

「太一君、これから火種をもらいに行くので、一緒に行きましょう」
「……火種？」
何だかわからないうちに、外に引っ張り出された。
「どこへ行くんですか？」
日暮れとともにどんどん暗くなってゆく道を、柊二郎と並んで歩きながら、太一は訊ねる。
「近くの神社です」
「あの、それは何ですか？」
柊二郎は相変わらず、作務衣に綿入れ半纏を着て、襟巻きを巻いている。さすがに寒いとみえて、毛糸の帽子をかぶり足には足袋を履いていた。
手に妙な物をぶらさげている。持ち手と蓋のついた、素焼きの植木鉢のようなもの。
「火桶です。火種の炭をこの中に入れて運ぶんです。炭が途中で消えないように、中に灰が入っています」
「……その火種って何ですか？」
襟巻きに顔を埋めるようにして歩いていた柊二郎は、おやという顔で太一を見た。
「太一君は知りませんでしたか。賽河原町では毎年、大晦日に神社からご神火をもらってきて、それでお正月の餅を焼いたりお雑煮をつくることになっているんです。そうすればその一年は、病気も怪我もしないと言われていますから」

「火をもらってくるんですか？」
「昔は松明で火を運んだそうですけどね。今は炭をくべて配っているんですよ」
十五分ほど歩くと、神社の鳥居が見えた。
（こんなところに神社があったんだ……）
賽河原町でもこのあたりには普段は来ないし、それでなくても神社や寺なんて高校生には無縁の場所なので知らなかった。
「けっこう大きな神社でしょう。祀られているのは塞の神です」
柊二郎は鳥居を見上げて言った。
「サイノカミ？」
「今でこそこの神社は、縁結びに学業成就、商売繁盛の祈願となんでもありですけどね。もともと、塞というのは『境界』という意味なんです」
「――」
「つまり塞の神は、境界を守る神様なんですよ」
『境界』の神。妖かしの棲む異界と、人間の住む現の世界を隔てるための。
ずっと昔、この社を建てた者たちは、ここが異界と繋がる土地であることを誰よりもよく知っていたのだ。
「では、行きましょう」

ぼうっとしていた太一は、歩き出した柊二郎のあとを慌てて追った。
年越しの参拝にはまだ早い時間だというのに、境内には大勢の人がいる。火種をもらいに来た人たちだというのは、大半がそのための容れ物を持っていることからわかる。
参道には露店がところ狭しと並んでいて、あたりは皓々と昼間のように明るい。
（あれ？）
鳥居をくぐったとたん、すれ違った相手に違和感があった。思わず太一は振り返る。
着物に編み笠の男性。一瞬ちらりと見えたが、目だけ出して赤い布で顔を覆っていた。でも、ヘンだと感じたのはその奇妙な格好ばかりではなく……。
「妖怪ですよ」
隣にいた柊二郎が、あっさりと言った。
「え？」
「おかしいなと思ったんでしょう？　異形の気配がしたからです。君もしょっちゅう妖怪を見ているだけあって、だんだんそういうものがわかるようになってきたんですねえ」
「はあ。……でもいいんですか？　妖怪がこっちの世界に入ってきちゃって」
しかも神社に。
「彼らはいいんですよ。暮れになると家々を回って、新年への祝いの歌を謡って米やお金をもらうんです。福をもたらす妖怪です。でも今年の仕事はこれで終わったので、神様に挨拶に来

たのでしょう」
「へえ」
そういう妖怪もいるんだな、と太一は思う。
でもね、と柊二郎はちょっと顔をしかめた。
「問題は、そんな連中ばかりではないということで」
まさにその時だった。
「おいこらっ、待たんかい！」
「あれ、ミヨシさ――」
ん、まで言えなかった。
目の前を、ミヨシが風のごとく駆け抜けていった。太一たちのことは目に入っていないようだ。人混みを器用にすり抜けて、あっという間に姿を消す。誰かを追いかけていたみたいだけど、よく見えなかった。
「ミヨシさん、何をしているんだろう？」
「稼ぎ時とばかり、こっそり境界を越えて違法の商売をする妖怪がいるんですよ。毎年ね。それを見つけてもらうために、彼に見回りをお願いしてあったんです」
ミヨシが消えた方角を眺めて、柊二郎はすまして言う。
「違法の商売？」

「人間に化けて、参拝客に破魔矢とか御札とか、お正月の縁起物を売りつける連中がいるんです」

「御札って……妖怪がですか？」

「はい。妖かしが厄除けを売っても、ご利益があるとは思えませんからねえ。ニセ物をつかまされた客はいい迷惑です。そういうのは見過ごしにできません」

「そっか。ミヨシさん、大家さんに頼まれて仕事をしている最中だったんだ」

太一が言うと、柊二郎はへらっと笑った。

「まあ仕事というか、ボランティアですね。世のため人のため、無償で違法行為摘発にいそしんでもらっています」

「……」

その笑顔でなんとなくわかった。

（ミヨシさん、また家賃滞納しちゃったんだろうな）

大晦日にボランティアに駆り出されたということは。

「太一君、ほら、甘酒がありますよ。いただきましょう」

柊二郎が指さしたのは社務所の横のテントで、そこでは、やって来る人たちに甘酒がふるまわれていた。

「おいしいでしょう？　ここのは餅米でつくっているんです。毎年、火種をもらいに来たつい

でにこの甘酒を飲むのが、僕はとても楽しみなんです」

甘酒の入った紙コップを受け取り、一口すすって、柊二郎は顔をほころばせる。

とろりとして熱い甘酒は、確かにおいしかった。味だけではなくて、こういう場所でこういうものを飲むのは、なんだか楽しいと太一は思った。

甘酒で身体が温まったところで、参道を先に進む。あたりにはどんどん人が増えてきて、露店の声もいっそう賑やかで、ちょっとしたお祭りみたいだ。

「太一君、こっちです」

門があって、そこを通り抜けると急に空気が静かになった。この先には露店は出ていない。炭をくべている台の前で順番待ちの列をつくる人たちも、なんとなく神妙な面持ちで小声で話をしている。

太一と柊二郎もその列に並んで、火種を受け取った。

(火種って、こういうのなんだ……)

火桶に入れてもらったそれは、炭というより炭のカケラみたいに小さい。うっかりするとすぐに火が消えてしまいそうだ。

太一がそう言うと、柊二郎はその通りとうなずいた。

「帰るまでに火が消えてしまっては、大変ですからね。では急いで空栗荘に戻りましょう」

ところが。そう言ったくせに、参道の途中で知り合いに挨拶された柊二郎は、なんとそのま

ま立ち話をはじめてしまった。
「ああ太一君、すぐに追いつきますから、先に鳥居のところで待っていてください」
（いいのかな）
火種が気になるけど、仕方がない。言われたとおり、太一は一人で先に参道を歩き出した。
「阿川君！」
もうすぐ鳥居というところで、後ろから大声で名前を呼ばれた。
振り返ると、参道から采奈が走ってくるのが見えた。両手に抱えるように、小さな火鉢を持っている。彼女も火種をもらいに来ていたらしい。
太一の目の前で足を止めると、しばらくゼイゼイと息を切らしてから、采奈はパッと笑顔になった。
「ビックリしたぁ！　阿川君がいると思わなかったから、前を歩いているのを見つけて、わぁウソって思って走って追っかけてきちゃった！　阿川君も火種をもらいに来たの？　もうもらってきた？」
「うん。これから帰るところ」
「私も今もらってきたとこ！　あれ、阿川君の火種は？」
「大家さんが持ってる。――空栗荘の大家さんと一緒に来てるから」

あ、とその時急に、采奈は小さな声をあげた。
目を丸くして、そのまま黙り込む。
（どうしたんだろう）
いつまでもしゃべらないので、太一は首を傾げた。采奈はじっと何かに目をこらしたまま、動かない。おまけに何だか、顔が赤い。
（あ……）
気がついた。采奈が見ているもの。太一の手だ。
太一は、采奈にもらった手袋をしていた。
「あの、これ」
「そ、それ」
二人同時に言いかけて、一緒に黙ってしまう。
太一がこの手袋をはめるのは、今日が初めてだ。もらって次に采奈に会った時に「ありがとう」と言ったけれども、なぜかすごく気恥ずかしくて、学校にはしていかなかったのだ。
どうしよう何か言わなきゃと焦っていたら、采奈が大きく息を吸って先に口を開いた。
「や、やだな阿川君。それ、軍手だよ？　そ、そんなの人前ではめてたら、みっともないってば」
「あの」



「あ、編み目とかとんでるしっ」
太一は手袋をはめた自分の手を、ぐっと握りしめた。
思い切って、言った。
「……でもこれ、暖かいから」
「え？」
采奈は驚いたように彼を見た。
「だからこれ、軍手じゃなくて、手袋にしようと思って」
境内に灯された明かりと、露店から漏れてくる光の中で、もともと赤かった采奈の顔が、さらにいっそう真っ赤になったのがわかった。
俯いて、あーとかうーとか意味不明に唸ってから、采奈は小さな声で、
「う、うん。……阿川君がそ、そう言うなら……」
「あの、これ、ありがとう」
「お、お礼は前にもう言ってもらったから」
「――ところでさ、和泉」
「なな何？」
「もしかしてその火種、消えてない？」
太一が指をさすと、采奈はぎょっとしたように、それまで胸元にしっかり抱いていた火鉢に

目をやった。
「きゃあああぁ！　忘れてた！　ウソやだ、消えてる⁉　火が消えちゃった！　またもらいに行かなきゃいけなーい！」
「あ、和泉」
采奈は慌てふためいたように、いきなりくるりと背中を向けてダダッと走り出した。
そのまま駆け去るかと思いきや、数歩先でぴたっと立ち止まった。
振り返る。
「阿川君！　よいお年を！」
叫んだ。
「それからそれから――来年もよろしく！」
そうして行き交う人々の中に駆けだしていった彼女を見送って、火鉢を持ったまま転ばなきゃいいけど、と太一は思った。

「いやあ、どうもお待たせしました。あのあと何人も、知り合いに会ってしまいまして」
鳥居で待っていると、ほどなく柊二郎があらわれた。
「火種は大丈夫ですか？」
太一が危ぶんで訊ねると、「大丈夫ですよ、灰の中にしっかり埋めてありますから」と呑気

な答だ。

「今日はみんなで年越し蕎麦を食べたあとに、もう一度ここにお詣りに来ましょう」

神社を出て、柊二郎は鳥居を見上げた。

「さて、来年は何をお願いしましょうか」

「良い年になりますように、じゃないんですか？」

「だって願わなくてもいつも良い年ですから」

あっけらかんと言って、空栗荘の大家は微笑む。

「そうそう。おみくじを引かねば。僕は今年、小吉でしたからね。来年こそ、大吉を引き当ててみせますよ」

なんか、おみくじというより宝くじみたいなノリだ。

そんな会話をしながら、時々火桶の中の火種を確認して、空栗荘への帰り道を急いだ。

玄関脇の立木に吊されたランプが、おかえりというように炎を揺らした。

空栗荘の窓や玄関から、暖かに明るい光が漏れている。

帰り着いて、その光景にホッと息をついた時だった。

ふと、その気配を感じて、太一は足を止めた。

（なんだろう……）

何かが通り過ぎていった。藍の色深い空を、暮れのざわめきに満ちた大地を、街中を、道路を。何か、とても大きなものが。

目には見えないけれども、大きくて清々しくて、綺麗なものが、ゆっくりと音もなく通っていった。

空気の色が静謐に変わってゆく。

これは、何だろう。

ふと見ると、火桶を持った柊二郎がやはり同じように立ち止まって、太一を見ていた。

微笑んで、言う。

「ほら、来年も良い年ですよ」

古き年逝き、あらたまの年立つ。

もうじき新しい年が来ようとしている。

あとがき

こんにちは。霜島ケイです。

この「カラクリ荘の異人たち」も、なんとか三巻まできました。夏、秋ときて、今回は冬の話。十一月末から大晦日（おおみそか）までのエピソードになっています。

ええまあ、その、原稿を書いている時にはリアルに冬だったんですが。

担当氏「だから、寒いうちに本を出そうって言ったじゃないですかー！」

霜島「うわぁ、すみませんごめんなさい。努力はしたんです、努力だけはっ」

この本が出るのは四月です。思い切り季節を外しております。

遅筆と言われて久しいうえに、別シリーズと交互に書いているためにこういうことになるわけで。なんというか、面目ない。

今回の雪女ネタは、担当のMさんとの「そういえば、雪女って夏の間はどうしてるんでしょうねえ」という雑談がきっかけでした。

「溶けちゃってたりして」

「それで固まりなおしたら悲惨ですね」

「このまま地球温暖化が進んだら、絶滅危惧種？　シロクマなみですか？」

といった会話のあと、「じゃあ、今回はそういう話でいきましょう」と言ったら、「えええ!?」と盛大に驚かれてしまいました。

ちなみに、文中にあった「しっぽのとれないおタマっこ」というのも、Mさんの名言です。真顔でぽろぽろとネタを落としてくれるMさん。いつもどうもありがとう。

と、感謝の意を伝えたら、

「私はもう何も言いませんからねっ！」

うふふ。かように謙虚な担当さんです。うふふふふ。

そうそう、「タカハシ一族」ネタというのもありました。

Mさんいわく「タカハシさんて、実は家族であの部屋にいるんじゃないですか？」

か、家族……？

「奥さんとか、子供とかいたりして」

おもしろいので本当にそういう設定にしようかと思ったのですが、今回判明したタカハシさんの正体がアレですので、その案はボツになってしまいました。ちょっと残念。

この三巻目で、太一もまた少しいろんな感情を思い出して、成長しました。……したんだろうな。してないと困るんだが。

今だから言いますが、この物語を書き出した一巻目では、ほのぼの（？）妖怪ものにするか、太一の成長物語にするか、まだ方向性がはっきりと決まっていませんでした。二巻目になって、太一の心の動きをメインにするという流れに、ごく自然に決まったような気がします。多分、栄奈というキャラの存在が大きかったのでしょうね。

頑張れ、恋する女の子。今回は太一との仲もずいぶん進展したぞ。……かなり明後日の方角ですが。何しろ、太一があまりに鈍いもので。

あと、レンがさりげなく頑張っています。こちらは、最初はいるだけの和ませキャラのつもりだったんですけど、いつの間にかわりと重要な場面をかっさらっていくようになりました。そのうち太一と熱い友情を語ってくれると嬉しいかも。

ところで。

五月に出る（予定の）ＧＡマガジンに、「カラクリ荘～」の番外短編を書かせていただきました。で、ネタばれになるので詳しくは書きませんが、この場を借りて一言。

――そんなに私が嫌いか、道頓堀（どうとんぼり）っ。

くいだおれ太郎につづいて、カのつくおっさんまでネタ潰しをしてくれなくてもいいじゃな

いか。悔しいから書き直さずにそのまま出しちゃいましたけどっ。

いやま、何のことやらなんですけどね、もしその短編が皆さまの目に触れることがありまして、このあとがきを覚えてくださっていたら、「バカで～」と思ってくださいませ。

くうぅ、こうなったら今年は優勝しろよ、阪神タイガース。

いつも素敵なイラストで物語りを飾ってくださるミギーさん。ありがとうございます。毎回一冊書き終えるたびに、「今度はどんな絵が見られるのだろう」とわくわくします。幸せ者だな、私は。

そしてもちろん一番の感謝は、この本を手にとってくださった皆さまに。

この物語はあと一冊、春のエピソードで完結する予定です。できれば最後まで、太一の成長を見守っていただければ幸いです。

では、また。

霜島ケイ



オルキヌス 稲朽深弦の調停生活

鳥羽 徹 イラスト／戸部 淑

駆け出し調停員の
ネゴシエーション・コメディ開幕!!

幻獣が棲む島オルキヌスに調停員として赴任した稲朽深弦。その職務は、オルカ間のトラブルを調停することだ。だが、実際に出会うオルカは予想の斜め上をいく面々ばかりだし、師事するはずの先輩調停員・秋永壱里は失踪中!? 言葉を武器にオルカたちとわたりあう、駆け出し調停員のネゴシエーション・コメディ開幕！！

第1回GA文庫大賞・奨励賞受賞作！



這いよれ！ニャル子さん

逢空万太　イラスト／狐印

怒濤のハイテンション混沌コメディ！

深夜。八坂真尋（やさかまひろ）は得体の知れない「何か」に追われていた。どんなに助けを求めても応える声も人もなく、自らの最期を覚悟したその瞬間――
「いつもニコニコあなたの隣に這い寄る混沌、ニャルラトホテプです」
――銀髪の美少女が、とてつもなく意味不明なキャッチフレーズとともに現れた！　怒濤のハイテンション混沌コメディ！
第1回GA文庫大賞・奨励賞受賞作！



迷宮街クロニクル②
散る花の残すもの

林 亮介 イラスト／津雪

この世で最も生と死を隔てる壁が薄い場所・迷宮街。そんな場所にも、クリスマスはやってくる。ただ、クリスマスの福音は探索者に等しく届くわけではない。死亡率14%のゴールドラッシュ。様々な人間が、様々な理由で迷宮街を出ていく。ある者は幸せに、ある者は無言で。

Webで公開されて大好評を博した作品に、書き下ろし短編「祭典の前夜祭」も収録した、現代のガリンペイロ達の物語、第2弾。



神曲奏界ポリフォニカ
ダン・サリエルとイドラの魔術師

あざの耕平　イラスト／カズアキ

現状を抜け出せないでいる自分と違い、きらびやかなステージに立った幼馴染みに、アマディアは嫉妬と羨望を覚えた。しかも、ひょんなことから再会した幼馴染みの少女、リジアをプロデュースしている男は、なんとサリエルのかつての相棒、ハセ・シャルマだったのだ！

忙しくも愉快なサリエルやモモ、コジ、そしてアマディアたちの日常を描いた作品等、全4作を収録！

ファンレター、作品の感想を
お待ちしています

〈あて先〉

〒107－0052
東京都港区赤坂4－13－13
ソフトバンク クリエイティブ（株）
GA文庫編集部 気付

「霜島ケイ先生」係
「ミギー先生」係

http://ga.sbcr.jp/

カラクリ荘の異人たち３
～帰り花と忘れ音の時～

発　行　　2009年４月30日　初版第一刷発行
著　者　　霜島ケイ
発行人　　新田光敏

発行所　　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107－0052
東京都港区赤坂４－13－13
電話　03－5549－1201
03－5549－1167（編集）

装　丁　　株式会社ケイズ（大橋 勉／彦坂暢章）

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
© Kei Shimojima 2009
ISBN978-4-7973-5412-6
Printed in Japan　　GA 文庫

第2回 GA文庫大賞

GA文庫では10代～20代のライトノベル読者に向けた
魅力あふれるエンターテインメント作品を募集します!



大賞金100万円+受賞作品刊行

希望者全員に評価シート送付!

■大賞

広義のエンターテインメント小説（ラブコメ、学園モノ、ファンタジー、アドベンチャー、SFなど）で、日本語で書かれた未発表のオリジナル作品を募集します。

※文章量は42文字×34行の書式で80枚以上130枚以下

■テーマ賞

提示された「テーマ」に沿った、日本語で書かれた未発表のオリジナル作品を募集します。テーマ賞の作品には、指定された3つの「キーワード」を作中に盛り込むことが必要です。

※文章量は42文字×34行の書式で30枚以上50枚以下

応募の詳細は弊社Webサイト
GA Graphicホームページにて **http://ga.sbcr.jp/**

9784797354126

ISBN978-4-7973-5412-6

C0193 ¥610E

1920193006100

定価 本体610円 +税

ジーエー文庫
発行:ソフトバンク クリエイティブ

カラクリ荘の異人たち3
～帰り花と忘れ音の時～

捜し物を見つけて欲しいと頼みにくるものや、身体が溶けてしまった雪女。あい変わらず、色々なことが巻き起こるカラクリ荘だったが、太一には別に悩みがあった。

それは、正月休みに自宅へ帰るべきかどうか――である。

自宅には、義母・鈴子がいて、会えばまたギクシャクすると思うと、どうも乗り気になれない。

カラクリ荘の面々がそのまま過ごすと知った太一は、それならば自分も――と考えた。しかし意外にもレンからの反発にあってしまうのだった。珍しく大きく動揺し、怒りをレンにぶつけた太一だったが……。

ご町内妖怪奇譚第3巻登場！